樹木とその葉

若山牧水著

改造社版

樹木とその葉

若山牧水著

樹木とその葉

若山牧水著

改造社版

序文に代へてうたへる歌十首

著　者

書くとなく書きてたまりし文章を一冊にする時し到りぬ

おほくこれたのまれて書きし文章にほのかに己が心動きをる

貞心のこもらぬにあらず金に代ふる見えぬにあらずわが文章に

幼く且つ拙しとおもふわが文を讀み選みつつ捨てられぬかも

自がこころ寂び古びなばこのごときをさなき文はまた書かざらむ

書きながら肱をちぢめしわがすがたわが文章になしと
いはなくに
ちひさきは小さきままに伸びて張れる木の葉のすがた
わが文にあれよ
おのづから湧き出づる水の姿ならず木々の雫にかわが
文章は
山にあらず海にあらずただ谷の石のあひをゆく水かわ
が文章は
書きおきしは書かざりしにまさる一冊にまとめおくお
かざるにまさるべからむ

跋

大正十年の春から同十三年の秋までに書いた隨筆を輯めてこの一冊を編んだ。並べた順序は不同である。

何々の題目に就き、何日までに、何枚位ゐ書いてほしいといふ註文を受けて書いたものばかりである。

なほ、非常に編輯を急いだため、當然爲さねばならなかつた取捨をようしなかつたので多少文章に重復した樣なところなどあるのを校正の際に發見し、誠に申譯なく思ふ。

とにかく序歌にも云つてある通り、幼く且つ拙いものゝみである。一冊となればなほ一層それが目立つであらう。それを充分見詰むることによつて多少とも今後によき文章が書けたならば難有いと思ふのである。

大正十四年二月初旬

沼津千本松原の蔭なる寓居にて

著　者

目　次

草鞋の話旅の話……一
島　三　題……一九
木　槿　の　花……五七
夏を愛する言葉……六九
四邊の山より富士を仰ぐ記……八一
野　蒜　の　花……九五
若葉の頃と旅……一一七
枯　野　の　旅……一三一
冷たさよわが身を包め……一四一
夏　の　寂　寥……一四三
夏のよろこび……一五一

釣……一五三
虻と蟻と蟬と……一五九
空　想　の　願　望……一六五
酒の讃と苦笑……一七七
歌　と　宗　教……一八五
自己を感ずる時……一八九
なまけ者と雨……一九一
貧乏首尾なし……一九九
若葉の山に啼く鳥……二〇九
秋　風　の　音……二一五
梅の花櫻の花……二二一
温泉宿の庭……二二五

或る日の晝餐……二二九
桃の實……二三七
春二三日……二四五
青年僧と叡山の老爺……二五七
東京の郊外を思ふ……二七一
駿河灣一帶の風光……二七七
故郷の正月……二九三
伊豆西海岸の湯……二九九
海邊八月……三〇九
地震日記……三一九
火山をめぐる温泉……三四七
自然の息自然の聲……三五五

草鞋の話旅の話

私は草鞋を愛する、あの、枯れた藁で、柔かにまた巧みに、作られた草鞋を。

あの草鞋を程よく兩足に穿きしめて大地の上に立つと、急に五體の締まるのを感ずる。身體の重みをしつかりと地の上に感じ、其處から發した筋肉の動きがまた實に快く四肢五體に傳はつてゆくのを覺ゆる。

呼吸は安らかに、やがて手足は順序よく動き出す。そして自分の身體のために動かされた四邊の空氣が、いかにも心地よく自分の身體に觸れて來る。

杖上の爲事に勞れた時、世間のいざこざの煩はしさに耐へきれなくなつた時、私はよく用もないのに草鞋を穿いて見る。

二三度土を踏みしめてゐると、急に新らしい血が身體に湧いて、其儘玄關を出かけてゆく。實は、さうするまではよそに出懸けてゆくにも億劫なほど、疲れ果てゝゐた時なのである。

そして二里なり三里なりの道をせつせと歩いて來ると、もう玄關口から子供の名を呼び立てるほど元氣になつてゐるのが常だ。

身體をこゞめて、よく足に合ふ樣に紐の具合を考へながら結ぶ時の新しい草鞋の味も忘れられない。足袋を通してしつくりと足の甲を締めつけるあの心持。立ち上つた時、じんなりと土から受取る時のあの心持。

と同時に、よく自分の足に馴れて來て、穿いてゐるのだかゐないのだか解らぬほどになつた時の古びた草鞋も難有い。實をいふと、さうなつた時が最も足を痛めず、身體を勞れしめぬ時なのである。

ところが、私はその程度を越すことが屢々ある。いゝ草鞋だ、捨てるのが惜しい、と思ふと、二日も三日も、時とすると四五日にかけて一足の草鞋を穿かうとする。そして間々足を痛める。もうさうなるとよほどよく出來たものでも、何處にか破れが出來てゐるのだ。從つて足に無理がゆくのである。

さうなつた草鞋を捨てる時がまたあはれである。いかにも此處まで道づれになつて來た友人にでも別れる樣なうら淋しい離別の心が湧く。

『では、左樣なら！』

よくさう聲に出して云ひながら私はその古草鞋を道ばたの草むらの中に捨てる。獨り旅の時はことにさうである。

私は九文半の足袋を穿く。さうした足に合ふ様に小さな草鞋が田舎には極めて少いだけに（都會には大小殆んど無くなつてゐるし）一層さうして捨て惜しむのかも知れない。

で、これはよささうな草鞋だと見ると二三足一度に買つて、あとの一二足をば幾日となく腰に結びつけて歩くのである。もつともこれは幾日とない野越え山越えの旅の時の話であるが。

さうした旅をツイ此間私はやつて來た。

富士の裾野の一部を通つて、所謂五湖を廻り、甲府の盆地に出で、汽車で富士見高原に在る小淵澤驛までゆき、其處から念場が原といふ廣い〳〵原にかゝつた。八ヶ岳の表の裾野に當るものでよく人のいふ富士見高原なども謂はゞこの一部をなすものかも知れぬ。八里四方の廣さがあると土地の人は云つてゐた。その原を通り越すと今度は信州地になつて野邊山が原といふのに入つた。これは、同じ八ヶ岳の裏の裾野をなすもので、同じく廣茫たる大原野である。富士の裾野の大野原と呼ばるゝあたりや淺間の裏の六里が原あたりの、一面に萱や芒のなびいてゐるのと違つて、八ヶ岳の裾野は裏表とも多く落葉松の林や、白樺の森や、名も知らぬ灌木林などで埋つてゐるので見た所いかにも荒涼としてゐる。丁度樹木の葉といふ葉の落ちつくした頃であつたので、一層物淋びた眺めをしてゐた。

野邊山が原の中に在る松原湖といふ小さな湖の岸の宿に二日ほど休んだが、一日は物すごい木枯であつた。あゝした烈しい木枯は矢張りあゝした山の原でなくては見られぬと私は思つた。其處から千曲川に沿うて下り、御牧が原に行つた。この高原は淺間の裾野と八ヶ岳の裾野との中間に位する様な位置に在り、四方に窪地を持つて殆ど孤立した様な高原となつて居る。私は曾つて小諸町からこの原を横切らうとして道に迷ひまる一日松の林や草むらの間をうろ〳〵してゐた事があつた。

其處から引返して再び千曲川に沿うて溯り、終にその上流、といふより水源地まで入り込んだ。此處の溪谷は案外に平凡であつたが、その溪を圍む岩山、及び、到る所から振返つて仰がるる八ヶ岳の遠望が非常によかつた。

そしてその水源林を爲す十文字峠といふを越えて武藏の秩父に入つた。この峠は上下七里の間、一軒の人家をも見ず、唯だ間斷なくうち續いた針葉樹林の間を歩いてゆくのである。常磐木を分けてゆくのであるが、道がおほむね山の尾根づたひになつてゐるので、意外にも遠望がよくきいた。近く甲州地の國師嶽甲武信嶽、秩父の大洞山雲取山、信州地では近く淺間が眺められ、上州地の碓氷妙義などは恰も盆石を置いたが如くに見下され、ずつとその奥、越後境に當つた大きな山脈は一

齊に銀色に輝く雪を被いでゐた。

ことにこの峠で嬉しかつたのは、尾根から見下す四方の澤の、他にたぐひのないまでに深く且つ大きなことであつた。しかもその大きな澤が複雜に入りこんでゐるのである。あちこちから聳え立つた山がいづれも鋭く切れ落ちてその間に深い澤をなすのであるが、山の數が多いだけその峽も多く、それらから作りなされた澤の數はほんとに眼もまがふばかりに、脚下に入り交つて展開せられてゐるのであつた。そしてそれらの澤のうち、特に深く切れ込んだもの〻底から底にかけてはありとも見えぬ淡い霞がたなびいてゐるのであつた。

峠を降りつくした處に古び果てた部落があつた。栃本と云ひ、秩父の谷の一番奥のつめに當る村なのである。削り下した嶮崖の中に一筋の縄のきれが引つ懸つた形にこびりついてゐるその村の下を流れる一つの谷があつた。卽ち荒川隅田川の上流をなすものである。いま一つ、十文字峠の尾根を下りながら左手の澤の底にその水音ばかりは聞いて來た中津川といふがあり、これと栃本の下を流るゝものとが合して本統の荒川となるものであるが、あまりに峽が嶮しく深く、終にその姿を見ることが出來なかつた。

栃本に一泊、翌日は裏口から三峰に登り、表口に降りた。そして昨日姿を見ずに過ごして來た中

津川と昨日以來見て來てひどく氣に入つた荒川との落ち合ふ姿が見たくて更らにまた川に沿うて溯り、その落ち合ふところを見、名も落合村といふに泊つた。

斯くして永い間の山谷の旅を終り、秩父影森驛から汽車に乘つて、その翌日の夜東京に出た。すると其處の友人の許に沼津の留守宅から子供が脚に怪我をして入院してゐる、すぐ歸れといふ電報が三通も來てゐた。ために豫定してゐた友人訪問をも燒跡見物をもすることもなくしてあたふたと歸つて來たのであつた。

この旅に要した日數十七日間、うち三日ほど休んだあとは毎日歩いてゐた。それも兩三回、ほんの小部分づゝ汽車に乘つたほか、全部草鞋の厄介になつたのであつた。

自宅に歸ると細君から苦情が出た、何日には何處に出るといふ風の豫定を作つておいて貰ふか毎日行く先々から電報でも打つて貰はぬことにはまさかの時に誠に困るといふのである。

もつともとも思ふが、私の方でも止むを得なかつた。たとへば千曲川の流域から荒川の流域に越ゆる間など、ほゞ二十里の間に郵便局といふものを見なかつたのだ。

また私は健脚家といふでなく、所謂登山家でなく冒險家でもないので、あまり無理な旅をしたく

ない。出來るだけ自由に、氣持よく、自分の好む山河の眺めに眺め入り度いためにのみ出かけて行くので、行くさき〳〵どんな所に出會ふか解らぬ間は、なか〳〵豫定など作れないのである。

それにしてもどうも私には旅を貪りすぎる傾向があつていけない。行かでもの處へまで、われから强ひて出かけて行つて烈しい失望や甲斐なき苦勞を味ふ事が少くない。

然しそれも、

『斯ういふ所へもう二度と出かけて來る事はあるまい、思ひ切つてもう少し行つて見よう』

といふ概念や感傷が常に先立つてゐるのを思ふと、われながらまたあはれにも思はれて來るのである。

今度の旅では幾つかの湖と、幾つかの高原と、同じ樣に幾つかの森林と、溪谷と、峰と、澤とを見、且つ越えて來た。順序よく行けば十日あれば廻り得る範圍である。それにしてはよく計畫された旅であつた。私の十七日かゝつたのは例の貪慾癖と、信州地で三四日友人等と會談してゐたゝめ

であつた。

机の上に地圖をひろげて見てゐると、まだまだなか〳〵行つて見度い處が多い。いつも考へる事だが、斯うして見ると日本もなか〳〵廣大なものだ。どうか出來るならばせめてこの日本中の景色をでも殘る所なく貪り盡くして後死にたいものだとしみ〴〵思はざるを得ぬのである。

草鞋を穿いて歩く樣な旅行には無論幾多の困難が伴ふ。先づ宿屋の事である。次ぎに飲食物の事である。

今度の旅でも私は二度、原つぱの中の一軒家に泊めて貰つた。二軒ともこの邊の甲州と信州との間の唯一の運送機關になつてゐる荷馬車の休む立場の樣な茶店で、一軒は念場が原の眞中、丁度甲信の國境に當つた所であつた。時雨は降る、日は暮れる、今夜の泊りと豫定した部落まではまだこの荒野の中を二里も行かねばならぬと聞き、無理に賴んで泊めて貰つたのであつた。一軒は野邊山が原のはづれ、千曲川に臨んだ嶮崖のとつぱなの一軒家で、景色は非常によかつた。

それから妙な廻り合せで裁判所の判檢事、警察署長、小林區署長といふ客の一行から私は二度宿屋を追つ拂はれた、一度は千曲川緣の小さな鑛泉宿で、一度はそれから一日おいて次ぎの日、その千曲の溪の一番の奥にある部落の宿屋で。一夜は一里あまり闇の中を歩いて他に宿を求め、一夜は

辛うじて同じ村内に木賃風の宿を探し出し、屋内に設けられた厩の二疋の馬を相手に村酒を酌んで冷い夢を結んだ。別に追つ拂はれる事もないのだが矢張り斯うして長いものに卷かれてゐた方が自分の氣持の上に寧ろ平穩である事を知つて居るからであつた。

信州では、ことに今度行つた佐久地方では鯉は自慢のものである。成程いゝ味であるが、それも一二度のことで、二度三度と重なると飽いて來る。鑵詰にもいゝ物はなく、海の物は絶無と云つていゝ。

たゞ難有いのは山の芋と漬物とであつた。私は何處でも先づこの二つを所望した。とろろ汁は出來のよしあしを問はず生來の好物だし、斯うした山國の常として漬物だけには非常な注意が拂つて漬けられてゐるので確かにうまい。味噌漬もいゝが、ことに梅漬がよかつた。この國では多分（この國だけではないかと思ふ）梅を所謂梅干といふ例の皺のよつた鹽鹹いものにせず、木にある生の實のまゝの丸みと張りと固さとを持つた漬け方をするのである。そして同じく紫蘇で美しく色づけられてゐる。これが何處に行つても必ず毎朝のお茶に添へて炬燵の上に置かるゝ。中の核を拔いて刻んで出す家もあり、粒のまゝの家もある。これをかり〳〵と嚙んで澁茶を啜るのはまことに私の毎朝の樂しみであつた。殆んど毎朝その容器をば空にした。また、時として酒のさかなにもねだつた。

田舍の漬物のことで一つ笑ひ話がある。ずつと以前、奥州の津輕に一月ほど行つてゐた事があつた。このあたりの食物の粗末さはまた信州あたりの比ではない。たいていのものをば喰べこなす私も後にはどうしても箸がつけられなくなつた。そして矢張り中で一番うまいのは漬物だといふ事になり、そればかり喰べてゐた。やがて其處を立つて歸る時が來た。土地の青年の、しかも二人までが、見てゐるところ先生はよほど漬物がお好きの樣である、どうかこれをお持ち下さいと云つてかなりの箱と樽とを差出した。眞實嬉しくて厚く禮をいひ、幾度かの汽車の乘換にも極めて丁寧に取り扱つて自宅まで持ち歸つた。そして大自慢で家族たちに勸めた。ところが、皆、變な顏をしてゐる。そんな筈はないと自分にも口にして見て驚いた。たゞ驚くべき鹹味が感ぜらるゝのみで、ツイ先日まで味はつてゐた風味はなか〳〵に出て來ないのである。やがて私は獨りで苦笑した、津輕にゐた時には他の食物に比してこれがうまかつたが、サテ他のものゝ味が出て來るともうこの漬物の權威はなくなつてゐるのであつたのだ。

酒であるが、因果と私はこれと離るゝ事が出來ず、既に中毒性の病氣見たいになつてゐるので殆どもうその質のよしあしなどを云ふ資格はなくなつてゐると云つていゝ。朝先づ一本か二本のそれ

が濟まなくてはどうしても飯に手がつけられない。晝の辨當を註文する前に一本のそれを用意する事を忘れない。夕方はなほのことである。

それも獨りの時はまだいゝ。久し振の友人などゝ落合つて飲むとなると殆んど常に度を過して折角の旅の心持を壞す事が屢々である。恨めしい事に思ひながら、なほそれを改め得ないでゐる。いゝ年をしながら、といつも耻しく思ふのであるが、いつかは自づとやめねばならぬ時が來るであらう。

旅は獨りがいゝ。何も右云つた酒の上のことに限らず、何彼につけて獨りがいゝ。深い山などにかゝつた時の案内者をすら厭ふ氣持で私は孤獨の旅を好む。

つくづく寂しく、苦しく、厭はしく思ふ時がある。

何の因果で斯んなところまでてくくく出懸けて來たのだらう、とわれながら恨めしく思はるゝ時がある。

それでゐて矢張り旅は忘れられない。やめられない。これも一つの病氣かも知れない。

私の最も旅を思ふ時季は紅葉がそろくく散り出す頃である。

私は元來紅葉といふものをさほどに好まない。けれど、それがそろくく散りそめたころの山や谷の姿は實にいゝ。

谷間あたりに僅かに紅ゐを殘して、次第に峰にかけて枯木の姿のあらはになつてゐる眺めなど、私の最も好むものである。

路にいつぱいに眞新しい落葉が散り敷いてその匂ひすら日ざしの中に立つてゐる。その間から濃紫の龍膽の花が一もと二とも咲いてゐるなどもよくこの頃の心持を語つてゐる。

木枯の過ぎたあと、空は恐しいまでに澄み渡つて、溪にはいちめんに落葉が流れてゐる、あれもいゝ。ホ、もうこの邊にはこれが來たのか、と思ひながら踏む山路の雪、これも尊い心地のせらるゝものである。枯野のなかを行きながら遠く望む高嶺の雪、これも拜みたい氣持である。

落葉の頃に行き會つて、これはいゝ處だと思はれた處にはまた必ずの樣に若葉の頃に行き度くなる。

これは一つは樹木を愛する私の性癖からかも知れない。

事實、世の中に樹木といふものが無くなつたならば、といふのが仰山すぎるならば、若し其處等の山や谷に森とか林とかいふものが無くなつたならば、恐らく私は旅に出るのをやめるであらう。それもいはゆる植林せられたものには味がない、自然に生えたまゝのとりどりの樹の立ち並んだ姿がありがたい。

理窟ではない、森が斷ゆれば自づと水が涸るゝであらう。

水の無い自然、想ふだにも耐へ難いことだ。

水はまつたく自然の間に流るゝ血管である。

これあつて初めて自然が活きて來る。山に野に魂が動いて來る。

想へ、水の無い自然の如何ばかり露骨にして荒涼たるものであるかを。

ともすれば荒つぽくならうとする自然を、水は常に柔かくし美しくして居るのである。立ち並んだ山から山の峯の一つに立つて、遠く眼にも見えず麓を縫うて流れてゐる溪川の音を聞く時に、初めて眼前に立ち聳えて居る巍々たる諸山岳に對して云ふ樣なき親しさを覺ゆることは誰しもが經驗

してゐる事であらうとおもふ。

私の、谷や川のみなかみを尋ねて歩く癖も、一にこの水を愛する心から出てゐるのである。

今度の旅では千曲川のみなかみを極めて、荒川の上流に出たのであつた。

その分水嶺をなす樣な位置に在る十文字峠といふのは上下七里の難道であつたが、七里の間すべて神代ながらの老樹の森の中をゆくのである。

その大きな官有林に前後何年間かにわたつて行はれた盜伐事件が發覺して、長野埼玉兩縣下からの裁判官警察官林務官といふ樣な人たちがその深い山の中に入り込んでゐた。そしてそれらの人たちのために二度宿屋を追はれたのであつた。

千曲川の上流長さ數里にわたつた寒村を川上村と云つた。

ずつと以前利根川の上流を尋ねて行つた時、水上村といふのに泊つたことがある。

村の名にもなかゝしやれたのゝあるのに出會ふ。上州の奥、同じく利根の上流をなす深い溪間の村に小雨村といふのがあつた。恐しい樣な懸崖の下に、家の數二十軒ばかりが一握りにかたまつ

てゐる村であつた。その次の村、これはそれよりも一二里奥の同じ渓に臨んだ小雨村よりももつと寂しい京塚村といふのであつた。この村をば私は對岸の山の上から見て過ぎたのであつたが、崖の中腹に作られた七八軒の家が悉くがつしりした構へで而かも他に見る様にきたなつぽくなく、いかにも上品な古びた村に眺められたのであつた。どうしたのか、折々この村をば夢に見ることがある。

荒川の上流と云つたが、二つの渓が落合つて本流のもとをなすのである。その一つの中津川といふの〻水上に中津川といふ部落があるさうだ。昔德川幕府の時代、久しい間この部落の存在は世に知られてゐなかつた。よくある話の様に、折々その渓奥から椀の古びたのなどが流れてくる。箭の折れたのも流れて來た。若しや大阪の殘黨でも隱れてゐるのではないかと土地の代官か何かゞ大勢を引率してその上流を探して行つた。果して思ひもかけぬ山の蔭に四五十人の人が住んでゐた。それといふのでその四五十人を何とかいふ蔓で何とかいふ木にくゝしつけてしまつた。そしてよく聞いて見ると大阪ではなくずつと舊く鎌倉の落人であることが解つた。村人はその時の事を恨み、この後この里にその何とか蔓と何の木とはゆめにも生ゆること勿れと念じ、今だに其木と蔓とはその里に根を絶つてゐるといふ。

傳說は平凡だが、私は十文字峠の尾根づたひのかすかな道を歩きながら七重八重の山の奥の奥に

まだ〳〵さうした村の在るといふことに少なからぬ興味を感じた。落葉しはてたその方角の遙かの渓間には折から朗かな秋の夕日がさしてゐた。その一個所を指ざして、ソラ、あそこにちよつぴり青いものが見ゆるだらう、あれが中津川の人たちの作つてゐる大根畑だ、と云ひながら信州地から連れて來た私の老案内者はその大きなきたない齒莖をあらはして笑つた。

燒岳を越えて飛驒の國へ降りついたところに中尾村といふ村があつた。十四五軒の家がばらばらに立つてゐるといふ風な村であつたが、その中の三四軒で、男とも女ともつかぬ風態をした人たちが大きな竈に火を焚いてせつせと稗を蒸してゐた。

越後境に近い山の中に在る法師温泉といふへ、上州の沼田町から八九里の道を歩いて登つて行つたことがある。もう日暮時で、人里たえた山腹の道を寒さに慄へながら急いでゐると不意に道上で人の咳く聲を聞いた。非常に驚いて振仰ぐと、畑ともつかぬ畑で頻りと何やら眞青な葉を摘んでゐる。よく見ればそれは煙草の葉であつた。

下野に近い片品川の上流に沿うた高原を歩いた時、その邊の桑の木は普通の様に年々その根から刈り取ることをせず、育つがまゝに育たせた老木として置いてある事を知つた。だから桑の畑と云

つても實は桑の林と云つた觀があつた。その桑の根がたの土をならしてすべて大豆が作つてあつた。すつかり葉の落ちつくした桑の老木の、多い幹も枝も空洞になつてゐる樣なのゝ連つた下にかゞんでぽつ〳〵と枯れた大豆を引いてゐる人の姿は、何とも云へぬ寂しい形に眺められた。

今度通つた念場が原野邊山が原から千曲の谷秩父の谷、すべて大根引のさかりであつた。枯れつくした落葉松林の中を飽きはてながら歩いてゐると、不意に眞青なものゝ生えてゐる原に出る。見れば大根だ。馬が居り、人が居る。或日立寄つた茶店の老婆たちの話し合つてゐるのを聞けば今年は百貫目十圓の相場で、誰は何百貫賣つたさうだ、何處其處の馬はえらく痩せたが喰はせるものを惜しむからだ、といふ樣なことであつた。永い冬ごもりに人馬とも全くこの大根ばかり喰べてゐるらしい。

都會のことは知らない、土に嚙り着いて生きてゐる樣な斯うした田舍で、食ふために人間の働いてゐる姿は、時々私をして涙を覺えしめずにはおかぬことがある。

草鞋の話が飛んだ所へ來た。これでやめる。

島三題

その一

伊豫の今治から尾の道がよひの小さな汽船に乘つて、一時間ほども來たかとおもふ頃、船は岩城島といふ小さな島に寄つた。港ともいふべき船着場も島相應の小さなものであつたが、それでも帆前船の三艘か五艘、その中に休んでゐた。そして艀から上つた石垣の上にも多少の人だかりがあつた。一寸重い柳行李を持てあましながら、近くの人に、

『M――といふ家はどちらでせう』

と訊くと、その人の答へないうちに、

『M――さんに行くのですか』

と他の一人が訊き返した。同じ船から上げられた郵便局行の行囊を取りあげようとしてゐる配達夫らしい中年の男であつた。

『さうです』

と答へると、彼は默つて片手に行囊を提げ、やがて片手に私の柳行李を持ち上げて先に立つた、惶てながら私はそのあとに從つた。

二三町も急ぎ足にその男について行くと彼は岩城島郵便局と看板のかゝつてゐるとある一軒の家に寄つて私を顧みながら、

『此處です』

と云つた。

其處のまだ年若い局長であるM――君は夙うから我等の結社に加入して歌を作つた。その頃一年あまり私は父の病氣のために東京から鄕里日向の方に歸つてゐた。そのうち父がなくなり、六月の末であつたか、私は何だか寂しい鬱陶しい氣持を抱きながら上京の途についたのであつた。そしてその途中、兼ねてその樣に手紙など貰つてゐたので、九州から四國に渡り、其處から汽船に乘つてこのM――君の住む島に渡つて行つたのである。手紙の往復は重ねてゐたが、まだ逢つた事もなく、どんな職業の人であるかも知らなかつた。

M――君はたいへん喜んで、急がないならどうぞゆつくり遊んでゆく樣に、と勸めて呉れた。身體も氣持もひどく疲れてゐた時なので、言葉に甘えて私は暫く其處に滯在する事にした。M――君はその本宅と道路を中にさし向つた別莊の雨戸をあけて、

『こちらが靜かですから……』

自由に起臥する様にと深切に氣をつけて呉れた。

M――家は島の豪家らしく、別莊などなか〳〵立派なものであつた。私の居間ときめられた離宅は海の中に突き出た様な位置に建てられ、三方が海に面してゐた。肱掛窓に凭づて眺めると、ツイその正面に一つの島が見えた。その島はかなり嶮しい勾配を持つた一つの山から出來てゐて、海濱にも人家らしいものはなかつた。山には黑々と青葉が茂つてゐた。その島の蔭から延いて更らに二つ三つと遠い島が眺められた。遠くなるだけ夏霞が濃くかゝつてゐた。手近の尖つた島と自分の島との間の瀨戸をば日に一度か二度、眼に立つ速さで潮流が西に行きまた東に流れた。汐に乘る船逆らふ船の姿など、私には珍らしかつた。

一方緣側からは自分の島の岬になつた様な一角が仰がれた。麓からかけて隨分の高みまで段々畑が作られて、どの畑にも麥が黃いろく熟れ、滯在してゐるうちにいつかあらはに刈られて行つた。

その頃私は或る私立大學を卒業して五六年もたつてゐるに係らず、まだ職業らしい職業を持つてゐなかつた。『金にもならぬ和歌ばかり作つてゐて一體お前はこの若山家をどうする氣か』と云つて、先頃まで歸つてゐた鄕里の家で、病父の枕許で、年とつた母や親戚たちから私は責められた。苦しい中から學資を貢がせられ、漸く卒業したと思ふに五年たつても六年たつても金の一圓送つて貰へ

ない彼等の身になつて見るとその苦情も當然であつた。たゞ父だけはその性分からか、さまでに氣にかけず『もう少し待つて見ろ、そのうちに何かするだらう』と寧ろ彼等を慰めてゐた。その父が死んで見るといよ〳〵私の立場は苦しくなつた。是から東京に出て新聞社などに勤めた所で幾らの送金が出來るわけでもなし、いつそこのまゝ母の側にゐて小學校なり村役場なりに出て暮らさうかとまで考へて、その口を探したがなまじひに何々卒業の肩書のあるのが邪魔になつて都合よく行かなかつた。いよ〳〵弱つたはてにまた母や姉から若干の旅費を貰つて、ともかく東京へ出て見ようといふ途中に、この瀨戸內海の中の小さな島に立ち寄つたのであつた。

凭り馴れた肱掛窓に凭つてかけ出しの様になつてゐる窓下を見るともなく見てゐると、丁度干潟になつた其處に何やら蠢くものがある。よく見ると、飯蛸だ。一つ、二つ、やがては五つも六つも眼に入つて來た。それを眺めながら、私は懶く或る事を考へてゐた。父危篤の電報に呼び返さるゝ數日前に私は結婚してゐた。一軒の家でなく、僅か一室の間借をして暮してゐたので、私の鄕里滯在が長引くらしいのを見ると、妻も東京を引きあげて鄕里の信州に歸つてゐた。そして其處で我等の長男を產んでゐた。私が今度東京に出るとなると、早速彼等を呼び寄せなくてはならぬ。入るものは金である。その金の事を考へてゐるうちに見つけたのが飯蛸であつた。そして可愛ゆげに彼等

の遊び戯れてゐるのに見入りながら、不圖一つの方法を考へた。一年あまりの郷里滞在中は初めから終りまで私にとつては居づらい苦しい事ばかりであつた。どうかしてそれを紛らすために、いつか私は夢中になつて歌を作つてゐた。その歌の數が隨分になつてゐる筈だ、それを一つ取り纒めて一冊の本にして多少の金を作りませう、と。

括つたまゝ別莊の玄關にころがしてあつた柳行李を解いて、私はその底から二三冊のノートを取り出した。そしてM――君から原稿紙を貰つて、いそ〳〵と机に向つた。左の肱が直ぐ窓に掛けられる様に、そして左からと正面からと光線の射し込む位置に重々しい唐木の机は置かれたのである。

が豫想はみじめに裏切られた。それ以前『死か藝術か』といふ歌集に收められた頃から私の歌は一種の變移期に入りつゝあつたのであるが、一度國に歸つてさうした異常な四周の裡に置かるゝ様になると、坂から落つる石の様な加速度で新しい傾向に走つて行つた。中に詠み入れる内容も變つて來たが、第一自分自身の調子どころか二千年來歌の常道として通つて來た五七五七七の調子をも押し破つて歌ひ出したのであつた。何の氣なしに、原稿紙を摑げて、順々にたゞ寫しとらうとすると、その異様な歌が、いつぱいノートに滿ちてゐたのである。實は、郷里を離れると同時に、時間こそは僅かであつたが、やれ〳〵と云つた氣持ですつかり其處のこと歌のことを忘れてしまつてゐ

たのであつた。そしていま全く別な要求からノートを開いて見て、其處に盛られた詩歌の異様な姿にわれながら肝をつぶしたのである。

其處には斯うした種類の歌が書きつらねてあつた。

納戸の隅に折から一挺の大鎌ありなんぢが意志をまぐる
なといふが如くに
新たにまた生るべしわれとわが身に斯くいふ時涙ながれ
き
あるがまゝを考へなほして見むとする心と絶對に新しく
せむとする心と
ともし斯くもするはみな同じやめよさらばわれの斯くし
て在るは
いづれ同じ事なり太陽の光線がさつさとわが眼孔(がんこう)を抜け
通れかし
感覺も思索も一度切れてはまたつなぐべからず繋ぐべく

もあらず
日を浴びつゝ夜をおもふは心痛し新しき不可思議に觸る
るごとくに
言葉に信實あれわがいのちの沈默よりしたゝり落つる言
葉に
さうだあんまり自分の事ばかり考へてゐたあたりは洞穴
の様に暗い
自分の心をほんとうに自分のものにする爲にたび〳〵來
て机に向ふけれど
自分をたづぬるために穴を掘りあなばかりが若し殘つた
ら
何處より來れるやわがいのちを信ぜむと努むる心その心
さへ捉へ難し
眼をひらかむとしてまたおもふもふわが生の日光のさびしさ

よ
死人の指の動くごとくわが貧しきいのちを追求せむとす
る心よ
といふ様なのがあるかと思へば、また、
ふと觸るればしとゞに搖れて影を作る紅ゐの薔薇よ冬の
夜のばらよ
閉かむとする薔薇散らむとするばら冬の夜の枝のなやま
しさよ
靜かにいま薔薇の花びらに來ていこへるうすきいのちに
夜の光れり
傲慢なる河瀨の音よ呼吸烈しき灯の前のわれよ血の如き
薔薇よ
悲しみと共に歩めかし薔薇悲しみの靴の音をみだすなか
ればらよ

吸ふ息の吐く息のわれの靜けさに薔薇の紅ゐも病めるが
ごとし
むなしきいのちに映りつゝ眞黑き珠の如く冬薔薇の花の
輝きてあり
われ素足に青き枝葉の薔薇を踏まむ悲しきものを滅ぼさ
むため
薔薇に見入るひとみいのちの痛きに觸るゝ瞳冬の日の午
後の憂鬱
古びし心臓を捨つるが如くひやゝかに冬ばらの紅ゐに瞳
向へり
愛する薔薇をむしばむ虫を眺めてあり貧しきわが感情を
刺さるゝ如くに
灯を消すとてそと息を吹けば薔薇の散りぬ悲しき寢醒の
漸く眠りを思ふ時に

この冬の夜に愛すべきもの薔薇ありつめたき紅ゐの郵便
切手あり
やゝ深き溜息をつけば机の上眞青のばらの葉が動く冬の
夜
ラムプを手に狹き入口を開けば先づ薔薇の見えぬ深き闇
の部屋に
餘り身近に薔薇のあるに驚きぬ机にしがみつきて讀書し
てゐしが
忘れものばかりしてゐる樣なおちつきのない男の机の冬
の薔薇
書は晝で夜は二層ばらが冷い樣だ何しろおちつかぬ自分
の心
と思ふまにばらがはら〳〵と散つた朝久しぶりに凭つた
晴い机に

じいつとばらに見入る心じいつと自分に親しまうとする
心

斯うしてじいつと夜のばらを見てゐる時も心はばらの様
に靜かでない
ばらが水を吸ひやめたやうだガラスの小さな壜の冬の夜
のばらが

かと思ふと、或る海岸の荒磯に遊んでは、
あはれ悲しいで衣服をぬがばやと思ふ海は青き魚の如く
うねり光れり
とかくして登りつきたる山のごとき巨岩のうへのわれに
海青し
岩角よりのぞくかなしき海の隅にあはれ舟人ちさき帆を
あぐ
嬉し嬉し海が曇るこれから漸くわたしのからだにもあぶ
ら

ら
が出る
身體は一枚の眼となりぬ青くかゞやける海ひらたき太
陽

岩のあひだを這ひて歩くはだしで笑ひて浪とわれと
鵜が一羽不意にとびたちぬ岩かげの藍色の浪のふくらみ
より
下駄をぬいでおいたところへ來たこれからまた市街へ歸
るのだ
この帆にも日光の明暗ありかなしや青き海のうへに
水平線が鋸の齒のごとく見ゆ太陽のしたなる浪のいたま
しさよ
少女よその蜜柑を摘むことなかれかなしき葉の蔭の
精力を浪費する勿れはぐゝめよと涙して思ふ夜の浪に濡
れし窓邊に

悲しき月出づるなりけり限りなく闇なれとねがふ海のう

への夜に

と云ふ風の歌を作つてゐるのであつた。

ツィ、僅かばかり前に一生懸命して自分で作つておきながら、いま改めて見直すとなつて殆んど正體なく驚いたのである。どうしてあんなに驚いたのか今考へればわれながら可笑しいが、とにかくに驚いた。ほんの數日ではあつたが、鄉里を離れてさうした島の特別にも靜かな場所に身を置いたゝめ、前と後とで急に深い距離が心の中に出來てゐたのかも知れぬ。

驚愕はいつか恐怖に變つた。何だか恐しくて、とても平氣でそんな歌を清書してゆく勇氣がなくなつてしまつた、と云つて、心の底にはさうして作つてゐた當時の或る自信が矢張り何處にか根を張つてゐた。そしてその自信は書かせようとする、故のない恐怖は書かせまいとする、その縺れが甚しく私の心を弱らせた。二日三日とノートと睨み合ひをしてゐるうちに終に私は食事の量が減り始めた。氣をまぎらすためにM――君から借りて讀んだ萬葉集の、讀み馴れた歌から歌を一首二首と音讀しようとしては聲が咽喉につかえて出ず、强ひて讀みあげようとするとそれは怪しい嗚咽の聲となつた。萬葉の歌を眞實形に出して手を合せて拜んだのはこの時だけであつた。

終に友人が心配しだした。そして、では私が代つて清書してあげませうと云ひながら、次ぎから次ぎと書きとつて行つた。それをば唯だ茫然と私は見てゐた。さうなつてからは日ならずして二三冊のノートの歌が一綴の原稿紙の上にきれいに寫しとられてしまつた。

折角久し振におちついてゐた私の心はその清書にかゝらうとした時から再びまた烈しい動搖焦燥の裡にあつた。そして友人の手によつて清書が出來上るや否や、それを行李に收め、あたふたと私はその靜かな島を辭した。

丁度十年ほど前にあたる。いまこの島の數日を考へてゐると、其處の友人の家の庭にあつた柏の木の若葉、窓の下の飯蛸、または島から島にかけて啼き渡つてゐた杜鵑の聲など、なほあり〳〵と心の中に思ひ出されて來る。

その二

いま一度、私は瀨戸內海の島に渡つて行つたことがある、備前の宇野港から數里の沖合に在る直島といふのへ。

夏の初、やゝもう時季は過ぎてゐたがそれでもまだ附近の內海では盛んに名物の鯛がとれてゐた。

その鯛網見物にと、岡山の友人I――君から誘はれて二人して出懸けたのであつた。直島附近は最もよく鯛漁のあるところと云はれてゐるのださうだ。

附近に並んでゐる幾つかの島と同じく、直島も小さな島であつた。名を忘れたが、島の主都に當る某村に郷社があり、其處の神官M――氏をI――君は知つてゐた。そして網の周旋を頼むためにこんもりと樹木の茂つた神社の下の古びた邸にM――氏を訪ねて行つた。

M――氏は矮軀赭顔、髪の半白な、元氣のいゝ老人であつた。そして私は同氏によつてその島が崇德上皇配流の舊蹟で、附近の島のうちでも最も古くから開けてゐた事、現にM――家自身既に十何代とか此處に神官を續けて來てゐる事等を聞いた。内海の中に所狹く押し並んでゐる島々のうちにも、舊い島新しい島の區別のあることが私には興深く感ぜられた。

『では、參りませう。網は琴彈の濱といふ所で曳くのですが、途中を少し廻つて上皇の故蹟を見ながら參りませう』

『でも、たいへんではありませんか』

『いゝえなに、島中くるりと廻つても半日とはかゝりませんからな、ハ、、、』

私も笑つた。その小さな島にさうした歴史の殘つてゐることがまた面白く感ぜられた。多分、船着場や潮流のよしあしなどの關係から出てゐることであらうとも思つた。

邸の前から漁師の家の間を五六十間も歩くと直ぐ山にかゝつた。とろ〳〵登りの坂ではあつたが早くも汗が浸み出た。晴れてはゐても、空には雲が多かつた。

『あそこに見えますのが……』

杖をとつて先に立つてゐた老人は立ち止つた。まばらに小松が生え、下草には低い雜木が青葉をつけ、そしてところどころそれらが禿げて地肌の赤いのを露はしてゐる樣な山腹を登つてゐた時であつた。老人にさし示されたところは我等より右手寄りの谷間に當つて其處ばかり年老いた松が十本あまり立ち籠つてゐた。

『上皇のお側に仕へてゐた上臈がおあとを慕うて島へ渡つて參り、程なく身重になつた。で、身二つになるまであそこの谷間に庵を結んで籠つてゐたと云ひ傳へられてゐる處です』

むんむと蒸す日光の照りつけたその松林にははげしい蟬時雨が起つてゐた。

『さうして生みおとされたお子さまなどは、どういふことになつたのでせう』

『さア、どうなられましたか……、まだほかに上皇の姫宮も父君のおあとを慕つて參られましたが、どうしたわけか御一緒におゐでずに、此處とは別な谷間に上臈と同じく庵を結んで居られたと申し

ます』

程なくその島の背に當つてゐる峠を越した。そして少し下つた處に崇德上皇を祭つたお宮があつた。あたりは廣い松林で、疎ならず密ならず、見るからに明るい氣持がした。お宮もまた小さくはあつたががつしりた造りで、庭も社殿も清らかな松の落葉で掩はれてゐた。ことにいゝのは其處の遠望であつた。眼下の小さな入江、入江の澄んだ潮の色、みないかにも綺麗で、やゝ離れた沖の島の數々、更らに遠く眺めらるゝ四國路の高い山脈、すべてが明るく美しく、それこそ繪の樣な景色であつた。

其處から二三丁下つたところに所謂行宮の跡があつた。其處も前の上蔦の庵のあとゝ同じく小さな谷間、と云つても水もなにもない極めて小さな山襞の一つに當つてゐた。松がまばらに立ち並び、雜木が混つてゐた。平地と云つても、ほんの手で掬ふほどの廣さで、M――氏に云はるゝまゝに注意して見るとその平地が小く三段に區分されてゐるのが眼についた。それ〴〵の段の高さおよそ三四尺づゝで、茂つた草を掻き分けて見ると僅かに其處に石垣か何かの跡らしいものが見分けられた。段々になつた一番下の所に警護の武士の詰所があり、二番目が先づお附の人の居た場所、一番上の狹い所が恐らく上皇御自身の御座所でゞもあつたらう、といふM――老人の解釋であつた。とする

と、御座所の御部屋の廣さは僅かに現今の四疊半敷にも足りない程度のものであつたに相違ないのである。そして、一番下の警護の者の詰所から十間ほどの下には、黑い岩が露はれて波がかすかに寄せてゐた。あたりを見廻しても嶮しい山の傾斜のみで、此處のほかには一軒の家すら建てらるべき平地が見當らない。同じ島のうちでも、全然家とか村とかいふものから引離された、斯うした所を選んで御座所を作つたものと想像せらるゝのであつた。斯ういふ窮屈な寂しい所に永年流されておゐでになつて、やがてまた四國へ移され、其處で上皇はおかくれになつたのだつたといふ。

其處から路もない磯づたひを歩いて入江に沿うた一つの村に出た。玉積の浦というた。其處を右に切れて田圃を拔けるとまた一つ弓なりに灣曲した穩かな入江があり、廣々とした白砂の濱を際どつて一列の大きな松の並木が並び、松の蔭に四五軒の漁師小屋があつた。其處が名にふさはしい琴彈の濱といふのであつた。

丁度、晝前の網を曳きあげたところであつたが、一疋の鯛もかゝつてゐなかつた。次ぎの網は午後の三四時の頃だといふ。途方に暮れて暫らく松の蔭に坐つてゐたが、やがてM――老人は急に立ち上つて漁師共の寄つてゐる小屋へ出かけて行つた。そしてにこ〳〵と笑ひながら歸つて來た。

『えゝことがある、今に仰山な鯛を見せてあげますぞ』

老人からこつそりとわけを聞いてI――君も踊り上つて喜んだ。そして、時計を出して見ながら、

『早う來んかなう』

など〻幾度となく繰返して私の顏と沖の方とをかたみがはりに眺めては笑つてゐた。その間に老人は一人の漁師を走らせて酒や酢醬油をとり寄せた。

程なく右手に突き出た岬のはなの沖合に何やら大きな旗をたてた一艘の發動機船の姿が見えた。

『來た〳〵』

さう叫びながら漁師たちは惶てゝ小舟を濱からおろした。解のわからぬまゝに私も促されてそれに乘つた。二人は漕ぎ、一人はせつせと赤い小旗を振つてゐた。

入江の中ほどに來ると、その發動機船は徐ろに停つた。我等の小舟はそれを待ち受けてゐて、漕ぎ寄するや否や一齊に向うに乘り移つた。私もまた同樣にさうさせられた。そして、引つ張られてとある場所にゆき、勢ひよくさし示された所を見て思はず聲をあげた。

この大型の發動機船の船底は其儘一つの生簀になつてゐた。そして其處に集めも集めたり、無數の鯛が折り重なつて泳いでゐるのである。I――君は機船の人に問うた。

『なんぼほど居ります』

『左樣、千二三百も居りますやろ』

おゝ、その千二三百の大鯛が、中には多少弱つてゐるのもあつたが、多くはまだいき〳〵として美しい尾鰭を動かして泳いでゐるのである。

その中から二疋を我等はわけて貰うた。小舟の漁師たちと機船の人たちとの間に何やら高笑ひが起つてゐたが、やがて漁師たちは幾度も頭をさげて小舟へ移つた。機船は直ぐ笛を鳴らして走り出した。聞けば彼女はこの瀨戸内の網場〳〵を廻つて鯛を買ひ集め、生きながら船底に圍うて大阪へ向けて走るのださうである。

濱の松の蔭では忽ちに賑やかな酒もりが開かれた。うしほに、煮附に、刺身に、鹽燒に、二疋の鯛は手速くも料理されたのである。

いつか夕方の網までその酒は續いた。そしてたべ醉うた漁師達の網にどうしたしやれ者か、三疋の鯛がかゝつて來た。よれつもつれつ、我等三人は一疋づゝその鯛を背負うて、島の背をなす山の尾根づたひの路を二里ばかりも歩いた。歩いてゐるうちに月が出た。折しも十五夜の滿月であつた。峠から見る右の海左の海、どこの海にも影を引いて數多の島が浮んでゐた。斯くて今朝早朝に發動船で着いた船着場とは違つた今一つの港に着いて、其處から一艘の小舟を雇ひ、漕ぎに漕がせて宇

野港へ歸りついたのは夜もよほど更けてゐた。可哀相に、其處まで送つて來てくれたM――老人は其處からまた島まで一人で歸るのであつた。晝間の酒をほど〳〵に切り上げて午後の定期の發動船に間に合ふ樣に老人の村まで歸つて居つたらば斯うした苦勞はせずとも濟んだであつたのに。

その三

船子よ船子よ疾風のなかに帆を張ると死ぬがごとくに叫ぶ船子等よ
大うねり傾きにつつ落つる時わが舟も魚となめなりけり
次ぎのうねりはわれの帆よりも高々とそびえて黑くうねり寄るなり
はたはたと濡帆はためき大つぶのしぶきとび來て向かむすべなし
やとさけぶ船子の聲にしおどろけばうなづら黑み風來るなり
舳なるちひさき一帆裂くるばかり風をはらみて浪を縫ふなり
色赤くあらはれやがて浪に消ゆる沖邊の岩を見て走るなり
かくれたるあらはれにたる赤岩に生物の如く浪むらがれり
友が守る燈臺はあはれわだなかの眞はだかの岩に白く立ち居り
むら立てる赤き岩々とびこえて走せ寄る友に先づ胸せまる
あはれ淋しく顏もなりしか先つ日の友にあらぬはもとよりなれども
別れゐし永き時間も見ゆるごとくさびしく友の顏に見入

りぬ
たづさへしわがおくりもの色燃えしダリヤの花はまだ枯
れずあり
ダリヤの花につぎて船子等がとりいだす重きは酒ぞ友よ
こぼすな
歩みかねわが下駄ぬげばいそいそと友は草履をわれに履
かする
友よ先づわれの言葉のすくなきをとがむな心なにかさび
しきに
相逢ひて言葉すくなき友だちの二人ならびて登る斷崖
石づくり角なる部屋にたゞひとつ窓あり友と妻とすまへ
る
その窓にわがたづさへし花を活け客をよろこぶその若き
妻

語らむにあまり久しく別れゐし我等なりけり先づ酒酌ま
む
友醉はずわれまだ醉はずいとまなくさかづきかはし心を
あたゝむ
石室のちひさき窓にあまり濃く晝のあを空うつりたるか
な

これらの歌は今から七八年前、伊豆下田港の沖合に在る神子元島の燈臺に燈臺守をしてゐる舊友を訪ねて行つた時に詠んだものである。

神子元島は島とは云ふものゝ、あの附近の海に散在してゐる岩礁の中の大きなものであつた。赤錆びた一つの岩塊が鋭く浪の中から起つて立つてゐるにすぎなかつた。島には一握の土とてもなく、草も木も生えてはゐなかつた。其處の一番の高みに白い石造の燈臺が聳え、燈臺より一寸下つたところに、岩を刳り拔いた樣にして燈臺守の住宅が同じく石造で出來てゐた。暴風雨の折など、ともすると海の大きなうねりがその島全體を呑むことがあるので、その怒濤の中に沈んでも壞れぬ樣にと、たゞ頑丈一方に出來てゐた。謂はば一つの岩窟であるその住宅は、中が四間か五間かにくぎら

れてゐた。階級は一等燈臺で、燈臺守の定員は四人とかいふのであつたが私の行つた時には一人缺員のまゝであつた。臺長といふのはもういゝ年輩で、夫婦にちひさい子供が二人ゐた。私の友人はその少し前に鄕里で細君を貰つて其處へ連れて行つてゐた。そしてそのほかに廿六七歳の獨身の人が一人ゐた。

その友人を知つたのはそれよりも六七年前、私が早稻田大學の豫科生の時であつた。當時私は讀み耽つてゐた『透谷全集』を教室にまで持ち込んで、授業中にも机の下に忍ばせて讀んでゐた。或る時、偶然同じ机に隣り合つて坐つたのがその友人で、彼も亦同書の愛讀者であつた。それが緒で折々往來する樣になつたが、別に親しいといふ程ではなかつた。そのうち半年もたつと急に彼の姿が教室から見えなくなつた。一年たち二年たちする間に、同級生であつた彼の同鄕人から聞くとなく彼の噂をとび〳〵に聞いてゐた。彼は佐賀縣の或る金滿家の息子で、急に學校が厭になると鄕里に歸つて、以後一切關係を斷つ約束のもとに家から數萬圓の金を分けて貰ひ、肥前の平戸沖あたりの小さな島を全部買ひ切つて一人して其處へ移り牛や鷄を放し飼にして樂しんでゐた。それもほんの暫くでいやになり、二束三文で全てを賣り拂つた金で大盡遊びを續け、金が盡きると或る炭鑛の鑛夫になつた。それも僅の間で、親類たちに多少の金をねだつて米國へ渡り、昨今はあちらで罐詰

工場の職工をしてゐる相だ、といふ樣なことを。が、それも學校にゐる間の事で、學校を出ると同時に彼の同鄕人の級友ともすつかり別れてしまつたので、其後の噂を聞くたよりもなかつた。

學校を出て一年あまりもたつた頃、私は或る新聞の記者となつてゐた。其處へ突然見すぼらしい風をして訪ねて來たのが彼であつた。いきなり私の前へ五六圓の金を投げ出して云つた。

『僕は今度、亞米利加から船中で團扇で客を煽ぐ商賣をやつて歸つて來た。これはその金の殘りだ。これで一杯飲まうよ』

それから幾日か私の下宿にころがつてゐたが、多少繪の心得のある所から自分からたづね歩いて或るペンキ屋に入り込み、キヤタツを擔いで看板繪をかいて歩いてゐた。それもほんの數日で、或日またふらりとやつて來た。

『いまペンキ屋の親爺を毆つて飛出して來たよ』

程經て市内電車の運轉手になつた。これは割合に永く續いたが、何かの事で首になつた。其後、彼に似氣なく入學試驗といふものを受けて入學したのが横濱に在る航路標的所何とかいふ、つまり燈臺守の學校であつた。六ケ月間の學期を無事に終へて、初めて任命されて勤めたのが、この神子元島燈臺であつた。そしてかれこれ一年あまりもたつたであらうか、漸く自分も從來の放浪生活の

非をしみ〴〵覺つて、今後眞面目にこの燈臺守の靜かな朝夕の裡に一生を終へようと思ふ樣になつた、さう決心すると同時に鄕里に歸つて妻をも貰つて來た、この心境の一轉を見るために一度この島に遊びに來ないか、といふ風の手紙を二三度も私の所によこしてゐたのであつた。

彼ほど徹底してはゐなかつたが、私もまた彼のいふ放浪生活の徒の一人であつた。學校を出て、一箇所二箇所と新聞社にも出て見たが、何處でも半年とはよう勤めなかつた。轉じて雜誌記者となつたが、これも三四ヶ月でやめてしまつた。自分等の流派の歌の雜誌を自分の手で出して見たが、初めは面白くやつてゐても直ぐ飽きが來た。さうかうしてゐるうちにいつか自分もひとの夫となり親となつてゐた。さうしてその日の米鹽すら充分でない樣な朝夕をずつと數年來續けて來てゐたのである。さういふ場合だつたので、今まではさういふ島があるといふ事すら知らなかつたこの島からの友人のたよりは、割合深く私の心にしみたのであつた。そして、終に其處に出かける氣になつた。

秋のダリヤの盛りの頃であつた。一本の木草すら無いといふその島には恰好の土產であらうと私はそれを澤山買つて行つた。先づ靈岸島から汽船で下田まで行き、其處で彼も吾も好物の酒を買つて第二の手土產とした。下田から一週間おきに燈臺通ひの船が出ることになつてをり、その船で水

から米、其他燈臺守たちの必需品を運ぶのであつた。前に友人からよく樣子を知らして來てあつたので、都合よくそれに便船する事が出來た。下田を出ると、船は忽ち烈しい波浪の中に入つた。何處でも岬のはなの浪は荒いものであるが、其處の伊豆半島のとつぱなは別してもひどかつた。それは單に岬だけの端といふでなく、其處には無數の岩礁が海の中に散らばつてゐた。形を露はしたものもあり、僅かに其處だけに渦卷く浪によつて隱れた岩のあるのを知る所もあつた。それらの岩から岩の間にかもされた波浪は、見ごとでもあり凄くもあつた。船には大勢の船頭が乘り込んでゐた。

多分今日の船で來るであらうと、友人は朝から双眼鏡を持つて岩の頭に立つてゐたのださうだ。船の島に着いたのは午前十時頃であつた。そして、つれられてその岩窟內の彼の居間に通つて、二年振ほどで彼と對座したのであつた。彼の妻とは初對面であつた。まだ年も若く、何も知らない田舍の娘と云つた風の人であつた。

氣のせいかいかにも從來の彼としてはおちつきが出來てゐた。おちついたといふより、急に老けて見えた。それにさうした變つた場所のせいか、私自身が浪や船に勞れてゐた爲か、それとも初對面の細君が側にゐる故か、久し振に逢つたにしては今までの樣に間が調子よく行かなかつた。彼もそれを感じてゐたらしく、大きな聲で先づ酒を出す樣にとその妻に云ひつけた。

年若い妻は案の如く大輪のダリヤの花を見て驚喜した。そして珍客の接待よりも先づその花をあり合はせの器に活けて、その部屋にたゞ一つしかないガラス窓の所に持つて行つて据えた。窓のツイ向うには刳り取つた岩の斷層面がうす赤く見えてゐた。そしてその岩の上僅か一尺ばかりの廣さに空が見えた。何といふ深い色であつたことだらう、今でもそれを思ひ出すごとに私にはその空の色が眼に見えて來る。照り澄んだ秋の眞晝であつたとは云へ、まことに不思議な位ゐの藍色が其處に見られた。そして、この深い藍の色は一層私の心を、沈んだ、浮き立たぬものにした樣に感ぜられた。その色の前にあるダリヤの花はすべてみな褪せさらばうたものにさへ眺められた。

直ぐ始つた酒は一時間二時間と續いて行つた。が、最初にそれ始めた私の心の調子はどうしても平常の賑やかな晴々しい所に歸つて行かなかつた。友人とても亦たさうであつた。そしてどうかしてその變調子を取り除かうと努めてゐるのがよく解つた。

其處へ、積荷を上げ、晝食をとり、一休みした船頭たちの一人が顏を出して友人に云つた。

『ではもう船を出しますが、別にお忘れの御用はございませんか』

それを聞くと私は突差に決心した。

『K――君、では僕もこの船で歸らう、ただ顏を合せればそれで氣が濟むと思ふから……』

さう云ひながら、居ずまひを直さうとした。不意に彼は立ち上つた。これは、と思ふ間もなく彼の烈しい拳が私の頭に來た。惶てゝ身をかはす間に二つ三つと飛んで來た。呆氣にとられた船頭は漸く飛びかゝつて彼を背後から抑えた。隣室からは臺長夫婦が飛んで來た。

『何だと、……歸る、……、ひとを散々待たしておいて、來たかと思ふと歸るとは何だ、歸れ、歸れ、直ぐ歸れ、この馬鹿野郎……』

彼はなほ立つたまゝ私を睨み据ゑて、息を切らしてゐる。たうとう私は平あやまりにあやまつて、改めてこの次ぎの船まで、その島に滯在することにきめてしまつた。

燈臺は島で一番の高い所に立つてゐた。燈臺の高さ十六丈、その根から直ぐ斷崖になつて二十丈ほどの下には浪が寄せてゐた。で、燈臺の最高部、燈火の點る燈室から眞下を見下す事は私の樣な神經質の者には到底出來なかつた。たゞ、其處からの遠望はよかつた。伊豆半島が案外の近さに眺められた。半島の中心をなす天城山が濃く黑く、どつしりとして眼前に据つてゐた。半島から島までは例の白渦の流れてゐる狹い海、それを除いた三方にはすべて果しもない大きな荒海があつた。晴れた日には黑潮の流が見えた。見えたといふより感ぜられた。動くともなく押し移つてゐる大きな潮流が、その方面を眺めてゐるうちにしみ〴〵として身に感ぜられて來た。伊豆七島のうち二三

の島がその潮流のうへにくつきりと浮んで見えた。丁度西風の吹き始めた季節で、黒ずんで見ゆるその濃藍色の大きな瀬の上にあまねくこまかな小波の立ち渡つてゐるのが美しくも寂しかつた。夜は、燈臺の火を眼がけていろんな鳥が飛んで來た。そして燈臺の厚いガラス板に嘴を打ちつけては下に落ちた。朝、燈臺の下に行つて見ると幾つかのそれを拾ふ事が出來た。海鳥が多かつたが、中には伊豆の天城から飛んで來るらしい山の鳥も混つてゐた。

燈室の床はその四壁と同じく厚いガラス張となつて居り、その下に宿直室があつた。ガラス張を天井とするこの宿直室は、一尺四方ほどの小さな窓を二つほど持つてはゐたが明りは主としてその天井から來た。一脚の卓子と椅子とが、燈臺の形なりの狹い圓型のその室内にあり、圓いなりの石の壁には小さな六角時計がかけてあつた。海上三十餘丈の上の空中にぽつつと置かれたこの部屋の靜けさは、また格別であつた。私はこつそりと螺旋形の眞暗な階子段を登つて來てはこの不思議な形をした小さな部屋の椅子に凭る事を喜んだ。よく當る風にしろ、よほど強く吹いてゐない限りは四尺厚さの石の壁を通してその薄暗い室内には聞えて來なかつた。

その空中の宿直室に居なければ私は多く事務室にゐた。それは燈臺守たちの住宅の岩窟の一角に、他の部屋よりはやゝ廣目に作つてあつた。壁には日本地圖世界地圖、萬國々旗表、といふ樣なもの

が張つてあり、その一方の戸棚には僅かの書物や書類と共に、幾品かの藥品が入れてあつた。この寂び古びた壜や箱の藥品が私には常に氣になつた。風いで居ればこそ一週間ごとに船が來るが、荒れたとなれば十日もその上も一切他と交通のきかぬこの離れ島に住んで居る幾人かの生命をば僅かにこの幾品かの藥品が守つてゐるのである。大きなテーブルの一部の埃を拂つて凭りかゝりながら、おなじく埃でよごれてゐる大きな地圖を見、棚の中の藥壜を眺め、または窓から見ゆる蒼空を仰いで、靜かな樣な、そして何となく落ちつかぬ時間を私はその部屋で過ごした。

でなければ、釣であつた。よほどの鋭い角度で海底から突つ立つてゐるらしいこの岩礁の四周の磯は到る所が深かつた。浪さへなければ、餌をおろせば大小さまゞの魚がすぐ釣れた。餌はそこらの岩の間に棲んでゐる蟹であつた。

或る日、私は獨りでとある岩の角に坐つて釣つてゐた。其處へ友人がやつて來た。何か用ありげに私の側に腰をおろしてゐたが、やがて、

『若山君……』

と呼びかけて、

『どうだね、一つ、君も東京あたりにいつまでもぐづ〳〵してゐないで、いつそ諦めてこの燈臺守

にならんかね』

と云ひ出した、彼自身これまでに通つて來た境遇の繁雜なのに飽いて、何處か斯う目をつぶつて暮せる樣な靜かな境地はないものかと考へて、他にもかくして航路標的所の試驗を受けた、そして實地此處に來て見ると前から空想してゐた靜かな生活といふ事よりも先づ身にしみたのは暮らしむきの安全といふことであつた。今まで自分も隨分といろんな事をやつて來たが、要するに頭には故鄕があつた。親や親類の財產があつた。いよ〳〵それから見離されたとなると、自づと考へらるゝのはその日〳〵の生活である。それもはつきりと具體的に考へてゐたのではなかつたが、此處に來て見ていよいよさうであつたことが解つた。それにまたどうしても自分の歲や健康のことも考へられて來る、それにはこの燈臺守位ゐ安全な生活法はないのだ、月給にした所が他に比べては非常にいゝ、早い話が君が四五年かゝつて大學を出てから新聞社に勤めた月給より僕が六ヶ月の學期を終へて此處に勤めてのそれの方が多いではないか、また、貰つた月給は殆んど貰つたなりに殘つてゆくのだ、見給へ此處で斯うしてゐる分には自分等の食ふ米味噌代のほかには金の使ひようがないではないか、此處に限らない、燈臺の在る所は大抵似たり寄つたりの場所ばかりなのだ、現に此處の臺長なども幾個所か勤めて歩いて來たのだがその間に溜めた金と云つたら素晴らしいものだ、今では

伊豆の方に澤山な地所も買つてあり家をも建てゝ、其處から長男長女を中學校女學校に出してゐる、君もいつまでも歌だの文學だのと云つて喰ふや喰はずにゐるよりか、一つ方角を變へてこの道に入らないか、入つたあとでまた歌なり何なり充分に勉强出來るではないか、見給へ、僕等は四人詰で此處に斯うしてゐるが、職業に就いて費す時間と云つたら朝の燈臺の掃除と夕方の點火と二三行の日記を書く事と、全部で先づ每日三四十分の時間があつたらいゝのだ、あとは何をしてゐようと自分の勝手ではないか、いろいろ慾を考へずにさうきめた方が幸福だと思ふよ、と私の顏を見い〳〵いつもの荒つぽい調子に似合はず、ひそ〳〵として說き勸めて呉れるのであつた。そして、私の身體に目をつけながら、

『それに第一、遠方から來るといふのにそんな小ぎたない風態をして來る奴があるものか、君の細君も細君だ、僕は最初の日、羽織袴で出迎へて呉れた臺長の手前、ほんとに顏から火が出たよ、其處へもつて來ていきなり歸るなんか云ひ出すもんだからあんな騷ぎになつたのだよ』

と云つて苦笑した。

私もいつか竿をあげて聽いてゐた。島に來てから見るともなく、其處の彼等の生活がいかに簡易で、靜かであるかを見てゐながら、多少それを羨む氣持が動いてゐたところなので、一層友人のこ

の勧告が身にしみた。同じく苦笑しながら、

『ウム、難有う、まア考へておかう』

と云つてその日は濟んだ。が、それからといふもの、例の空中の宿直室に在つても岩かげの事務室にゐても、釣糸を垂れながらも、私の心はひどくおちつきを失つてゐた。燈臺守になるならぬの考へが始終身體につき纏うてゐたのである。なつての後、いかに其處により善く生活してゆくか、本を買ふ、讀書をする、遠慮なく眼を瞑ぢて考へ且つ作る、さうした樂しい空想もまた幾度となく心の中に來て宿つた。

が、何としても今までのすべてと別れて其處に籠る事は、寂しかつた。よしそれを一時の回避期準備期として考へても、とてもその寂しさに耐へ得られさうになかつた。その寂しさに耐ふる位ゐなら其處に何の生活の安定があらうとさへ思はれた。そして、或る日、見るともなく事務室の藥品棚の中にある古錆びた藥品を見詰めながら、私は獨りで笑ひ出した。そして自分に云つた、斯うしたものに預けておくには自分の身體にはまだ〳〵少々膏が多過ぎる、と。

さう思ひきめると、急に東京が戀しくなつた。其處にゐる妻や友人たちが戀しくなつた。そして豫定の日が來ると、私は曾つて私の來る時に友人がしたといふ樣に、朝早くから双眼鏡を取つて岩

の頭に立ちながら、向うの方に表はれて來るであらう船の姿を探した。

いよ〳〵船に乘り移らうとする時、何となく私はこれきりでこの友人とももう逢ふ機會があるまいだらう樣な氣がした。そして、固くその手を握りながら、

『どうだ、臺長に願つてこれから一緒に下田まで行かんか、あそこで一杯飲んで別れようぢやないか』

と云つた。一年も續けて土を踏まずにゐると脚氣の樣な病氣に罹りがちなので、折々交替に二三週間づつ陸地の方へ行つて來るといふ話を思ひ出してさう云つた。

『フ、ッ』

と彼は笑つた。

『まアよさう、行くなら東京へ訊ねて行かうよ、君もまたやつて來て呉れ、今度はもう殺らんよ、ハ、、、』

『ハ、、』

自分も笑つた。送つて來て呉れた燈臺中の人も、船頭たちも、みな聲を合せて笑つた。

木槿の花

この沼津に移つて來て、いつの間にか足掛五年の月日がたつてゐる。姉娘の方が始終病氣がちであつたのが移轉する氣になつた直接原因の一つ、一つは自分自身東京の繁雜な生活に耐へられなくなつて、どうかして逃げ出さうとしてゐたのが自然さうなつたのでもあつた。自分は山地を望んだが、子供の病氣には海岸がいゝといふわけで、そしていつそ離れるなら少くも箱根を越した遠くがいゝといふので、何の緣故もないこの沼津を選んだのであつた。

何の緣故もないとはいふものゝ、自分等の立てゝゐる歌の結社にこの沼津から一人の青年が加入してゐたのをおもひ出して、先づ彼に手紙を出し、とりあへず一軒の借家を見付けて貰ふ樣に賴んだ。程なく返事が來て、心當りの家があるから一度見に來る樣にとの事であつた。今から五年前の八月十日頃であつたと記憶する。早速出かけて來て見ると、分に過ぎた大きな邸であつた。荒れ古びてこそをれ、櫻の木に圍まれて七百坪からの廣さがあつた。もう少し小さい家はないかと訊合せたが、隨分と探したけれど、町内ならとにかく郊外に當つてゐるこの界隈には今のところ此處だけだといふ。それに家賃も格安だつたし、一先づ此處にきめておかうと、その青年父子に——青年のお父さんといふは年老いた醫師であつた——厚く禮を述べ、一晩ゆつくりして行つたらいゝだらうと勸めらるゝのをも斷つて、その日の汽車で私は東京へ歸つた。そしてその旨妻に報告すると共に、

翌日から荷造りにかゝつた。

家の下見に行つた時、その家は本當の空家ではなかつた。まだ人が住んでゐた。何でも或る粘土からアルミニユムを採る方法を發明したと稱へて一つの會社を起さうとしてゐる男であつた。型のごとき山師で、其處に六七箇月住んでゐる間に町の酒屋呉服屋料理屋等にすべて數百圓からの借金を拵へ、たうとう居たゝまらなくなつて私の行つた一月ほど前に何處かへ逐電してしまつたところであつた。そしてその留守宅にはその男の年老いた兩親が殘つてゐた。父親は白い髯など垂らした、品のいゝ老爺であつた。私が前に云つた青年やその父の老醫師や、東京の或る實業家の持家であるその家を預つて差配をしてゐる年寄の百姓たちと邸の中に入つて行つた時、老爺は庭で草とりをしてゐた。各部屋を見て廻つて、此處が湯殿ですと離室に續いた一室の戸を引きあけると、其處で髪を洗つてゐたのが母親であつた。私は見まじきものを見た樣な、脈はしい痛はしい氣がした。その時、私達を案内してゐた差配の百姓、この男ももう相當の爺さんで、小柄の、見るからに險しい顏をした男であつたが、庭でせつせと草を拔いてゐる老爺を呼びかけて、故らに大きな聲で、斯うしてお客樣を案内して來たから、氣の毒だけれど早速この家をあけて貰ひたい、もう斯うなると今度こそは待つてあげるわけにゆかぬから、と宣告した。髯の白い老爺は立ち上つてずつと我等を見廻

しながら、丁寧にお辭儀をした。

『どうも始末にいかねエんですよ、毎日々々追立を喰はしてるんですけれど、どうしても動かねエんでね、……然し今度は立退くでせうよ、斯うして旦那がたをお連れ申したんだから』

差配は狡猾らしい笑ひを漏らしながら我等を顧みて斯う云つた。

『だつて行く先が無くちや困るでせうに』

私は云つた。

『なアに、息子とはちやアんと打合せが出來てるでせうよ、どつちもどつちで、煮ても燒いても食へる奴等ぢやアねエんですから』

家賃は僅か一ケ月分を拂つたのみで、その上うまく搾がれて、多少現金をもその男から捲きあげられてゐる話をひどい早口で差配は話して聞せた。

家族を連れて沼津驛に降りたのはその月の十五日であつた。その夜一晩、町はづれの狩野川に沿うた宿屋に泊り、翌朝起きてみるとこまかい雨が降つてゐた。二階から見下す下の通りをば番傘をさした近在の百姓女たちが葱や茄子の野菜の籠を擔いで通つてゐたが、それら眞新しい野菜も雨に濡れてゐた。そして窓から少し顏を出して見ると、今度借りた家のうしろに位置してゐる香貫山と

いふ小松ばかりの圓つこい岡が同じく微雨の中に眺められた。

『何だかたいへん靜かな生活に入つてゆける樣な氣がしてならないが、お前はどうだ』

早急な引越騷ぎに勞れ果てたらしい顏をしてゐる妻を顧みて私が云ふと、

『ほんとですね、どうかさうしたいものですね』

と、微かにさびしく笑ひながら答へた。其處へ例の差配をしてゐる百姓がやつて來た。一わたりの挨拶を濟まして歸つて行つたあと、妻は聲をひそめて、

『何だかいやな顏した爺さんではありませんか』

とさゝやいた。

三日五日とかゝつて荷物の片付が終ると、夫婦ともにその前後の疲勞から半病人の樣になつてしまつた。そして多くの日を寢たり起きたりで過してしまつた。喜んだのは子供たちで、急に廣くなつた家の內、庭のあちこちを三人して夢中になつて飛んで廻つた。

さうかうしてゐるうちに、秋が來た。邸の前は水田、背後は畑であつたが、田のもの畑のもの、みなとりどりに秋の姿に移つて來た。私たちの疲勞も幾らかづつ薄らいで、漸く瞳を定めて物を見得る樣なおちつきが心の中に出來て來た。第一に氣付いたのは來客の無くなつた事であつた。東京

にゐては一日少くも一人か二人、多い日には十人からの來訪者を送迎せねばならなかつたのに、此處に來て以來、一週間も十日も家人以外の誰もの顏を見ずに濟ますことが出來た。自づと時間が生れて、するともなく庭の隅の土を起して草花の種を蒔いたり、やさしい野菜物を作つたりする樣になつた。

『これはいゝ、やつぱり此處に越して來てよかつた、どれだけこの方が仕合か知れない』

と心から思ふ樣になつた。娘の健康も眼に見えてよくなつて來た。それに毎日の自分の爲事の上から云つても、おちついて机に向ふ事が出來るし、我等の爲事に附きものである郵便の都合もたいへんによかつた。東京と云つても私のそれまで住んでゐたは郊外の巢鴨であつたが、其處と市内との往來に要する郵便の時間よりも、東京と沼津との間に要する時間の方が寧ろ速い程であつた。

さうした有樣で、二年の豫定が延びていつの間にか此處に足掛五年の永滯在となつてしまつた。斯うなると改めて東京へ歸つてゆくのが億劫になつた。いつそ此儘この沼津に住んでしまはうではないか、などと夫婦して話す樣になつた。然し、その五年間を押し通して最初に考へた通りの幸福な時間が送られたわけでは決してなかつた。半年一年とたつうちに自づと東京にゐた時と同じ樣な環境が自分の身體のめぐりに出來て來た。東京にゐた時とは違つた交際がまた此處でも始められた。

東京では廣くはあつたが多く書生づきあひの簡單なものであつた。それが土地の狹いこの沼津となると、なまじひに世間的になつてゐる自分の名前のために、一種形式的な窮屈ないはゆる社會的交際をせねばならぬ場合が多くなつて來た。自分の最も恐れてゐた飲友達も、いつ出來るともなく出來て來た。斯くて初めに願つてゐた隱栖といふ生活とは違つた朝夕がいつともなしに送らるゝ樣になつてゐたのだ。それでもまだ〳〵東京よりましだと信じてゐた。イヤ現にさう信じてゐるのではある。

初めに老醫師の世話で借りた家は、戸じまりも充分に出來兼ぬるほど荒れ古びた家で、しかも間取も甚だ拙く、うまく使へる部屋とても無かつたが、とにかく部屋の數は九つあつた。書生や女中や家族たちをそれぞれに配置して、まだ來客に備ふる一室位はどうやら殘つてゐた。家の古いこと、町から遠くて不便なこと（これも最初はさうでなかつたのだが、生活の間口が廣くなるにつれて次第に不便を感じて來た。）家の前後から襲うて來る田畑の肥料の臭氣、其他あれこれのことをば我慢しても、出來ることなら此儘此處にぢいつと暮して行かうと思つてゐたのであつたが、さう出來ぬ事情になつた。

表面の理由は他にあつたが、要するに差配の爺さんの我慾と狡猾とに我等は追はれたのであつた。

なほ詮じてゆくと、其處にはその爺さんと私の妻との感情問題も遠い因をなしてゐた。第一印象として彼女の彼に對する不快は年ごとに深くなつて、事ごとに眼に見えぬ衝突が兩人の間に行はれてゐたのであつた。

今年四月末、二ヶ月もかゝつた中國九州地方の長旅行から歸つて來て見ると、四圍の事情は私の留守の間に急變してゐて、どうでも差迫つた時間内にその家をあけ渡さねばならなくなつてゐた。喧嘩腰になつてかゝればさう周章へる必要もなかつたのだが、それはこちらの氣持が許さなかつた。喧嘩どころか、もうさうなると一刻も速くこちらから逃げ出したい氣がいつぱいになつてゐるのであつた。で、苦笑しながら私は早速に空家さがしを始めた。東京へ引揚ぐるのはもと〳〵いやだし、他の土地へ移るといふも億劫だし、矢張り沼津を——私が越して來てゐるうちに沼津町から沼津市に變つてゐた——中心として恰好な空家は無いかと探し始めた。自身はもとより、手の及ぶ限り知人たちにも頼んであちこちと探した。

さて、無かつた。極く小さな家ならぽつ〳〵と眼についたが、泊り客の多いこと、また毎月出してゐる自分等の歌の流派の機關雜誌の事務室の必要なこと等から、どうでも六つの部屋を持つた家でなくては都合が惡く、その見當で探すとなると、一向に見あたらなかつた。偶々あつたとすると、

それは避暑避寒地としての貸別莊向に建てられた家で、家賃が大概月百圓を越してゐた。

たうとうこの家探しの騷ぎのために夫婦とも頭を痛くしてしまつた。その間、私はおちついて机に向ふ餘裕を失つて、爲事の方もすつかり支えてしまつた。其處へ、頼んでおいた或る友人から、斯ういふ家があるがどうかと云つて來た。いま現に建築中のもので間數は玄關女中部屋を入れて五室、場所は市内千本濱の松原の蔭だといふ。饑ゑては食を選ばず、私は少なからず喜んだ。ではそれで我慢するとして雜誌發行の事務室だけをばまた他に間借でもする事にしようと、早速その示された場所へ出懸けて見た。松原の蔭はよかつたが、ツイ背後に私立の女學校があり、僅かの田圃を距てた眞前に遊廓があつた。ほんの手狹な空地を利用して建てられたもので、庭らしい庭もなく、兼々自分の望んでゐた樣な靜かな、他とかけ離れた樣な場所では決してなかつた。が、今更そんな贅澤は云つて居られなかつた。早速私は家主と逢つて、借りる約束をきめた。それは六月の始めで、今月一杯には出來上るとの事であつた。

やがて六月の末が來たが、家にはまだ壁も出來なかつた。七月十五日まで待つて呉れといふ。止むなく待つ事にした。其處へ運惡くも二番目の娘が病みついた。二三日ぶら〳〵してゐて、いよ〳〵寢込んだのが七月の朔日か二日であつた。初め二三日、症狀がはつきりせず、ともすると腸チブス

ではないかなどといふ熱の工合であつた。が、程なく肋膜炎だと解つた。しかも、起らねばいゝがと恐れられてゐた肺炎をも併發した。夫婦は晝夜つき切りにその枕頭に坐らねばならなくなつた。

一方差配の爺さんからはそんなことに頓着なく、家のあけ渡しを迫つて來た。病兒の看護のひまを盜み〳〵私は新しい家の出來上りの催促に通はねばならなかつた。十五日は過ぎ、二十日は過ぎ、たうとう七月は暮れてしまつたが、まだ何彼と手間取つて、その松原の蔭の小さな可愛らしい家には一人二人と大工や左官たちが呑氣さうに出入りしてゐるのみであつた。

壁位は引越してから塗らしてはどうです、といふやうな亂暴を例の差配の爺さんは云ひ出した。よく〳〵腹に据ゑかねたが、要するに喧嘩にもならなかつた。そして改めて新しい家の方をせきたてゝ、この八月の九日の朝、いよ〳〵引越す事にきめた。業腹ながら爺さんの言葉通りに、荒壁の上塗だけは越してから塗ることにして、九日曉荷物を運び込む故、疊だけは必ず敷いておいて呉れ、と固くも賴んで、看護の片手間にこそ〳〵と荷造りにかゝつた。醫者は子供を氣遣うて、もと〳〵絶對安靜を要する病氣なのだから出來得る限り、動かす事を延ばさぬかと云うて呉れたが、どうもさうして居られない狀態にあつた。

九日早曉、手傳の人と共に先づ二臺だけの荷馬車を新しい家の方へ差立てた。そしてそれの引返

して來る間に私は俥で近所の挨拶廻りに出た。引返して來た荷馬車屋は、行つてみた所まだ一枚の疊も敷いてなく、荷物の置場所に困つたがとりあへず庭先に置いて來たと云ふ。まだ歸さずにおいた俥に乘り、私は新しい家に駈けつけて、せめて病人を寢せる部屋だけでいゝから早速疊を入れて呉れる樣にと賴んでまた舊い方の家に引返し、やがて階下の六疊と八疊とに疊が入つたといふ報告を聞いて後、妻と共に病兒の俥につき添うて、五年間住んで來た古びた大きな邸の門を出た、

斯うして苦勞して入つた今度の家は、六疊の茶の間八疊の座敷に、中二階の樣になつた西洋まがひの六疊の部屋があり、他に玄關女中部屋湯殿が附いてゐて、いかにも小じんまりした、新婚の夫婦などには持つて來いの家である。が、九人家内の我等には相應すべくもない。越して來て今日で丁度十日目だが、まだ荷物も片付かず、新しい家に落ち着いたといふ喜びも安心も更に心の中に生れて來てゐない。

唯だ有難いのは、ツイ裏手に千本松原のある事と、自分の書齋にあてゝゐる中二階から幾つかの山を望み得る事とである。書齋は東と北とに窓があいてゐる。東の窓からは近く香貫德倉の小山が見え、やゝ遠く箱根の圓々しい草山から足柄の尖つた峰が望まるゝ。北の窓からは愛鷹山を前に置いた富士山が仰がるゝ。

が、それらの山よりも松原よりも、此頃最も私の眼を惹いてゐるのは、その松原に入らうとする手前に、丁度松原に沿うた形で水田と畑とを限つた様にして續いてゐる畔に長々と植ゑられた木槿の木である。

むらさき色の鮮かな花といへばいかにも艶々しく派手に聞ゆるが、不思議とこの木槿の花に限つてさうでない。さうでないばかりかその反對に、見れば見るほど靜かな寂しさを宿して咲いてゐる花である。この花の咲き出す頃になると思ひ出される例の芭蕉の句の、

道ばたの木槿は馬に喰はれけり

は如何にもよくこの花の寂しさを詠んでゐるが、なほそれでも云ひ足りないほどに今年などはこの花に對して微妙な複雑な心持を感じたのであつた。この芭蕉の句も彼が旅行の途次、富士川のあたりを過ぎつゝ馬上で吟じたものであるといふが、この花は不思議にまた我等に『旅』の思ひをそゝる。この花を見るごとに、秋を感じ、旅をおもふ。何物にともなく始終追はれ續けてゐる様な、おちつかぬ心を持つた私にとつては殊更にもこの花がなつかしいのかも知れぬともおもふ。

夏を愛する言葉

夏と旅とがよく結び付けられて稱へらるゝ様になつたが、私は夏の旅は嫌ひである。山の上とか高原とか湖邊海岸といふ所にずつと住み着いて暑い間を送るのならばいゝが、普通の旅行では、あの混雜する汽車と宿屋とのことをおもふと、おもふだに汗が流るゝ。

夏は浴衣一枚で部屋に籠るが一番いゝ様である。靜座、仰臥、とりどりにいゝ。たゞ專ら靜かなるを旨とする。食が減り、體重も減る様になると、自づと瞳が冴えて來る様で、うれしい。

夏深しいよいよ痩せてわが好む面にしわれの近づけよか
し

十年ほど前に詠んだ歌だが、今でも私は夏は干乾びた様に痩せることを好んで居る。それも、手足ひとつ動かさないで自然に痩せてゆく様な痩せかたである。耳に聽かず、口に云はず、止むなくば唯靜かにあたりを見てゐるうちにいつ知らず痩せてゐてほしい。

夏の眞晝の靜けさは冬の眞夜中の靜けさと似てゐる。おなじく身動きひとつ出來ない様な靜けさを感ずることがあるが、しかも冬と違つて無氣味な靜けさではない、ものなつかしい靜けさである。明るい靜けさである。

北南あけはなたれしわが離室にひとり籠れば木草見ゆなり
青みゆく庭の木草にまなこ置きてひたに靜かにこもれよと思ふ
めぐらせる大生垣の槇の葉の伸び清らけし籠りゐて見れば
こもりゐの家の庭べに咲く花はおほかた紅し梅雨あがるころを

しいんとした日の光を眼に耳に感じながら靜かに居るといふことは、從つて無爲を愛することになる。一心に働けば暑さを知らぬといふが、完全に無爲の境に入つて居ればまた暑さを忘るるかも知れぬ。ところが、凡人なかなかさう行かない。

怠けゐてくるしき時は門に立ちあふぎわびしむ富士の高嶺を
なまけつゝこゝろ苦しきわが肌の汗吹きからす夏の日の

風

門口を出で入る人の足音にこゝろ冷えつゝなまけこもれり

心憂く部屋にこもれば夏の日のひかりわびしく軒にかぎろふ

なまけをるわが耳底にしみとほり鳴く蟬は見ゆ軒ちかき

松に

無理強ひに仕事いそげば門さきの田に鳴く蛙みだれたるかも

蚤のゐて脛をさしさす居ぐるしさ日の暮れぬまともの書きをれば

殆んど夏の間だけの用として、私はほんの原稿紙を置くに足るだけの廣さの小さなテーブルを作つた。其處此處と持ち歩いて、讀書し、執筆するのである。

部屋のまんなかに置くこともあれば、廊下の窓にぴつたりと添うて据ゑることもある。庭の木蔭にも持ち出せば、家中で風が一番よく通るので風呂場の中に持ち込むこともある。いまは丁度廊下の窓に置いてある。椅子に凭りながら、片手を延ばせばむつちりと茂つた楓の枝のさきに屆く。葉蔭に咲き滿ちてゐる可愛らしいその花が、昨日今日ほのかに紅みを帶びて來た。

私のいま住んでゐる附近には辨慶蟹が非常に多い。赤みがゝつた、小さな蟹である。庭の木にも登れば、部屋の中にも上がつて來る。ツイ二三日前、何の氣なしに緣側のスリツパを履かうとするとその爪先に這入り込んでゐて大に驚いた。今年三歳になる男の子のよき遊び友だちである。

これが庭の柘榴の木に、どうかすると三四匹も相次いで這ひ登つてゐることがある。苔の生えかけた古木の幹だけに、たいへんにその形が面白い。眞紅な花の散り敷く梅雨の頃が最もいゝ。

草花いぢりも夏の一得であらう。氣を換へるに非常にいゝ。筆の進まぬ時氣持の重い時、ひよいと庭の畑に出て、草をむしり、水を遣る。言はず聽かずの暫しの時間を過ごすべく、私にはいまこれが一番である。花もよく、四五株の野菜を植うるも愛らしい。

眼に見えて肥料(こやし)きゝゆく夏の日の園の草花咲きそめにけり

あさゆふに咲きつぐ園の草花を朝見ゆふべ見こころ飽かなく

いま咲くは色香深かる草花のいのちみじかきなつぐさの花

泡雪の眞白く咲きて莖につく鳳仙花の花の葉ごもりぞよき

朝夕につちかふ土の黒み來て鳳仙花のはな散りそめにけり

しこ草のしげりがちなる庭さきの野菜ばたけに夏蟲の鳴く

葱苗のいまだかぼそくうすあをき庭のはたけは書齋より見ゆ

いちはやく秋風の音をやどすぞと長き葉めでゝ蜀黍(もろこし)は植う

その廣葉夏の朝明(あさけ)によきものと三畝(みうね)がほどは芋も植ゑたり

もろこしの長き垂葉にいづくより來しとしもなき蛙宿れり

紫蘇蓼のたぐひは黒き猫の子のひたひがほどの地(つち)に植ゑたり

青紫蘇のいまださかりをいつしかに冷やし豆腐にわが飽きにけり

みじか夜のあはれさも私の好きな一つである。春の夜、秋の夜、冬の夜、どこかすべてあくどいが、夏にはそれがない。香のけむりの立ち昇るにも似たはかなさがある。

ことに私はその明けがたを愛する。眼が覺むれば枕もとの窓がほのかに明るい。時計を見れば四

時まだ前、或は少し過ぎてゐる。立つて窓を開くと、かろやかに風が流れて、蚊がひそかに明るみへまつてゆく。

夜ふかくもの書き居れば庭さきに鳴く夏蟲の聲のしたしさ

みじか夜のいつしか更けて此處ひとつあけたる窓に風の寄るなり

夜爲事のあとの机に置きて酌ぐウヰスキイのコップに蚊を入るゝなかれ

このペンをはや置きぬべし蜩の鳴き出でゝいま曉といふに

降りたてば庭の小草のつゆけきにかへる子のとぶ夏のしののめ

みじか夜の明けやらぬ闇にかゞまりてものゝ苗植うる人の影見ゆ

あかつきをいまだ點れる電燈の灯影はうつる庭のダリヤに

朝靜のつゆけき道に蟇出でゝあそびてぞをる日の出でぬとに

旗雲のながれたなびきあさぞらの藍のふきかに燕啼くなり

まひおりて雀あゆめる朝じめり道のかたへのつゆ草のはな

一首蜩の歌を引いたが、ありとも見えぬこの小さな蟲の鳴き澄む聲はまつたく夏のあはれさ清らかさをかき含んだものである。ゆふぐれよりも朝がいゝ。地はしめり、草は垂れ、木々の葉ずゑに露の宿つた曉に聞くがもつともいゝ。

蜩が夏のあはれであるならば、その寂しさをうたふものは何であらう。あそこにも、此處にもその寂しさをひきしめてうたつてゐるものがゐる。曰く郭公である。筒鳥である。呼子鳥である。佛

法僧である。郭公は朝に、筒鳥は晝に、呼子鳥はゆふぐれに、佛法僧は夜に。

みな夏に限つて啼く鳥である。山も動け、川も動け、山も眠れ、川も眠れと啼き澄ます是らの鳥のはげしい寂しい啼聲を聽く時は、自づとこの天地のたましひがかすかに其處に動いてゐる神々しさを感ずるのである。

鶯も浮き、雲雀も浮き、鈴蟲も松蟲もみな浮いてゐるが、ひとりこれらの鳥の聲だけは天地の深みに限りも知らず沈んでゐる。

土用なかばに秋風ぞ吹く、といふ言葉がある。恐らく誰いふとなく云ひすてたものであらうが、この言葉は私には何ともいへぬ寂寥味を帶びて響いて來る。

土用芽といつて、春一度芽の萌えた樹木に、再び芽の萌え出すことがある。夏も更けて、その青葉も殆んどもう黒みを含んで來たころに、うす鈍い黄色をふいて萌え出るこの土用芽はまことに見る目寂しいものである。温度などから云へばまさに暑いまさかりで、多くの人はたゞもう汗にまみれて瞼を厚くしてゐるころである。

そのころに何處とはなしに忍びやかにつめたい風が吹いてゐるのである。眼に見えぬ秋のおとづ

れである。風の音にぞ驚かれぬる、の誇張より、土用なかばに秋風ぞ吹くの正直な俚言がそのころどれだけ私には身にひゞいて聞えて來るであらう。

秋づきしものゝけはひにひとのいふ土用なかばの風は吹くなり

うす青みさしわたりたる土用明けの日ざしは深し窓下の草に

園の花つぎつぎに秋に咲き移るこのごろの日の靜けかりけり

畑なかの小路を行くとゆくりなく見つゝかなしき天の河かも

うるほふとおもへる衣の裾かけてほこりはあがる月夜の路に

野末なる三島の町のあげ花火月夜のそらに散りて消ゆなり

四邊の山より富士を仰ぐ記

駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる愛鷹の山

東海道線御殿場驛から五六里に亘る裾野を走り下つて三島驛に出る。そして海に近い平地を沼津から原驛へと走る間、汽車の右手の空におほらかにこの愛鷹山が仰がるる。謂はゞ蒲鉾形の、他奇ない山であるが、その峯の眞上に富士山が親いてゐる。

いま私の借りて住んでゐる家からは先づ眞正面に愛鷹山が見え、その上に富士が仰がるゝ。富士といふと或る人々からは如何にも月並な、安瀬戸物か團扇の繪にしかふさはない山の様に云はれないでもないが、この沼津に移住して以來、毎日仰いで見てゐると、なか〳〵さう簡單に云ひのけられない複雜な微妙さをこの山の持つてゐるのを感ぜずにはゐられなくなつてゐる。雲や日光やまたは朝夕四季の影響が實に微妙にこの單純な山の姿に表はれて、刻々と移り變る表情の豐かさは、見てゐて次第にこの山に對する親しさを增してゆくのだ。

一體に流行を忌む心は、もう日本アルプスもいやだし、富士登山も唯だ苦笑にしか値しなかつた。與謝野寛さんだかゞ歌つた「富士が嶺はをみなも登り水無月の氷の上に尿垂るてふ」といふ感がしてならなかつた。それで今まで頑固にもこの名山に登ることをしなかつたが、こちらに來てこの山に親しんで見ると、さうばかりも云へなくなり、この夏は是非二三の友人を誘つて登つてゆき度い希望を抱くに到つてゐる。

閑話休題、朝晩に見る愛鷹を越えての富士の山の眺めは、これは一つ愛鷹のてつぺんに登つて其處から富士に對して立つたならばどんなにか壯觀であらうといふ空想を生むに至つた。ところが其頃私の宅にゐた土地生れの女中は切にこの思ひ立ちを危ぶんで、愛鷹には魔物がゐると昔から云ひなされて、土地の者すらまだ誰一人登つたといふ話を聞かぬ、何も好んでそんな山へ登るにも當るまいと頻りに留めるのだ。妻は無論女中の賛成者であつた。それこれで暫くその愛鷹登りが滯つてゐたが、次第に秋が更けて、相重つた二つの山の輪廓がいよいよ鮮かになり、ことにその前の山の中腹以上にある森の紅葉がはつきりと我等の里から見える様になると、もうとても我慢が出來なくなり、細君たちの安心を請ふために私は自宅の書生を伴れて、或る晴れた日にその頂上をさして家を出た。

最初私の眼分量できめた豫定は宅を朝の六七時に出て十一時には頂上に着く、そして一二時間を其處で休んで歸りかける、歸りみちにはあたりの松山で初茸でも取つて來やうといふ様なことであつた。ところが登りかけて見て少なからず驚いた。行けども〳〵同じ様な輕い傾斜の裾野路が續い

て、頂上に着く筈の十一時にはまだ山らしい坂にもかゝる事が出來ずにゐた。

愛鷹山は謂はゞ富士の裾野の一部にによつきりと隆起した瘤の樣なもので、山の六七合目から上は急峻な山嶽の形をなしてゐるが、それより下は一帶の富士の裾野と同じく極めてなだらかな、そして極めて細かな襞の多い、輕い傾斜の野原となつてゐるのである。で、こちらから望んだ丈では地圖の示す通りの海拔四千四五百尺の普通の山であるが、サテ實際に登りかけて見ると今云つた通り、こちらからは一寸見に解らないだらしのない野原をいつまでも〳〵歩いてゆかねばならなかつたのだ。

幸に麥蒔時で、その廣大な裾野にそちこちと百姓が蕊の里から登つて麥を蒔いてゐた。それでなくては到底何處が何處だか路などの解る野原ではないのであつた。百姓達はみんな我等二人の云ふのを聞いて一笑に附し去つた。今からなどとても〳〵峠まで行けるものでない、それよりも今から路を少し右にとつて、山の中腹にある水神さまにでも參つたがよいであらう、其處へならまだ行つて歸る時間もあらうし、若し遲くなれば其處の堂守に賴んで泊めても貰へると云ふのだ、さう云はれると落膽もし癪にもさわつた。殘念さうに私が返事もせずに山のいたゞきを望んで立つてゐるのを見た彼等の中の一人の若者は——彼等は丁度晝飯を喰つてゐた——笑ひ〳〵立ち上つて來てその

山の方を指ざしながら、それなら斯うしたらどうだ、ソレあの山の八合目にかけた森の中に土龍の形に似た枯草の野があるだらう、あれはこの蕊の村から牛馬の飼料を刈りにゆく草場で、その形からこの邊ではムグラツトと呼んでゐる、今はもう草刈時でもないが兎に角あそこまでは細い道がついてゐる、あそこまで登つて、そしてまア頂上まで行つたつもりになつて其處から降りて來るのだ。あれから先は路もないし、とても深い森でなか〳〵登れるわけのものでない、ムグラツトまで行つたにしても歸りは夜に入るが、兎に角蕊の村まで出て來ればまたどうとでもなるだらう、と云ふのだ。

兩人は顏を見合せたが、それでも水神樣にゆくよりその方が多少心を慰められる氣がしたので、若者に禮を云ひ捨てゝ急いでその森の中の枯草の野へ向けて足を速めた。それからは兩人とも急に眞劍にならざるを得なかつた。腹も空いたが大事をとつてムグラツトまでは辨當を開かぬ事とし、もう今までの無駄口も自づと消えて只だひたすらに急いだ。間もなく流石に長かつただら〳〵登りも盡きて、山らしい坂になつた。畑もなくなり、人影も見えなくなつた。ともすれば見失ひがちの小徑は水の涸れた谷をあちこちと横切つて多く笹の原の中を登つて行つた。そして程なく鬱蒼たる森林地に入り込んだ。

裾野の廣いのに驚いたと同じく、この中腰からかけての森の大きく美しいのもまた私を驚かした。沼津あたりから見るのでは、中腹以上が一帶にうす黑く見渡されて其處が森をなしてゐることだけはよく解るが、たゞ普通の灌木林か乃至は薪炭を作る雜木林位ゐにしか考へられなかつた。いま眼の前に見るその森の木は灌木どころかすべて一抱へ二抱への大木で、多くは落葉樹、そしてもうその紅葉は半ばすぎてゐた。しかも眼の及ぶ限りその落葉しかけた大木が並び連つて寂然とした森をなしてゐるのである。少し樹木の開けた所から見れば峯から谷へ、谷から峯へ、峯から峯へ、すべて山の窪み高みを埋めつくして鬱然と押し擴がつてゐるのであつた。

樹木好きの、森好きの私はそれを見るに及んで、一時沈み切つてゐた元氣を急に恢復した。昨今頻りに散り溜りつゝある眞新しい落葉をざく〳〵と踏みながら、ほんとに檻から出た兎の樣な面白さで、這ひながら走りながらその深い〳〵森の中の木がくれ徑を登つて行つた。考へて見れば其處の森は御料林の一つで、今時珍しい木深さなども故あることであつたのだ。

大君の御料の森は愛鷹の百重なす襲にかけてしげれり

大君の持たせるからに神代なす繁れる森を愛鷹は持つ

この山のなだれに居りて見はるかす幾重の尾根は濃き森をなせり

蜘蛛手なす老木の枝はくろがねのいぶれるなして落葉せるかも

時すぎて今はすくなき奥山の木の間の紅葉かがやけるかな

一しきりその森を登つてゆくと間もなくそのムグラツトに出た。これも遠目と違つてなか〳〵大きな草原であつた。荒々しく枯れ靡いてゐる草を押し分けて——もうその草原に來ると路は絶えてゐた——その一番高い所まで登つてゆくと、其處に兩人ともがつくり倒れてしまつた。

たのしみ〳〵手をつけずに持つて來た二合壜の口を開いて喇叭飲を始める頃になると、漸く私にも眼を開いて四方の遠望を樂しむ餘裕が出て來た。よく晴れた日で、前面一體には駿河灣が光り輝き、その左に伊豆半島、右手に御前崎が浮び、山の麓の海岸には沼津の千本松原からかけて富士川の川口の田子の浦、少し離れて三保の松原も波の間に浮んで見える。明るい大きな眺めではあるが

矢張り富士の見えないのが寂しかつた。その富士はツイ自分等の背後峯の向うに立つてゐる筈なのである。

酒の勢、腹の滿ちた元氣で、我等はまたその草原から上の森林の中へ入り込んで行つた。今來た道を沼津へ出やうとすればこそ夜にもなるが、頂上から最も手近な麓の村へ一直線に降りる分にはどうにか日のあるうちに降りられやう。頂上には小さなお宮があると聞くので、屹度何處へか通ずる道があるに相違ない。折角此處まで來て富士を見ぬのは何とも氣持の惡い話だといふ樣な事から、時計が既に午後の二時をすぎてゐるのにも構はず、それこそ脫兎の勢で登り始めたのであつた。

既に草原に絕えた路はそれ以上にある筈はなかつた。然し、大體の見當では其處の一つの尾根を傳つてさへ行けば十町か二十町の間に必ず頂上へ出るといふ見込をつけたのであつた。もう樹木を見るの紅葉を見るのと云ふのでなかつた。また、其處から上はやがて樹木は絕えて打續いた篠竹の原となつてゐた。一間から二間に伸びたその根の方を殆んど全く這ひ續けて分け登つたのであつた。

辛うじて頂上に出た。案の如く富士山とぴつたり向ひ合つて立つことが出來た。然し、最初考へたが如く、一絲掩はぬ富士の全山を其處から見ると云ふことは不能であつた。たゞ一片の蒲鉾を置いた樣にたゞ單純に東西に亘つて立つてゐるものと想像してゐたこの愛鷹山には、思ひのほかの奧

山が連り聳えてゐるのであつた。沼津邊からはたゞその前面だけしか見えぬのだが、その背後に寧ろ前面の頂上よりも高いらしい山嶺が三つ四つごた〳〵と重つてゐるのであつた。しかも自分等の立つた頂上からも最も手近に聳えた一つの峯は我等の立つてゐる山とは似もつかず削りなした樣な嶮しい岩山であつた。その切り立つた岩山を抱く樣にして、大きく眞白く、手に取る樣な眞近な空にわが富士山は聳え立つてゐるのであつた。しげ〳〵とそれを仰いで坐つてゐると、我等の登つて來たとは反對の山あひに幾疋か群れてゐるらしい猿の鳴くのが聞えて來た。

眞裸體の富士山を見やうといふねがひは前の愛鷹山で見ごとに失敗した。然し、何處かでさうした富士を見ることが出來るであらうといふ心はなか〳〵に消えなかつた。

そして寧ろ偶然に足柄と箱根との中間にある乙女峠を越えやうとしてその願ひを果したのであつた。私はその時箱根の蘆の湖から仙石原を經て御殿場へ出やうとしてこの峠にかゝつたのであつた。乙女峠の富士といふ言葉を聞いてはゐたが實はその時極めてぼんやりとその峠へ登つて行つたのであつた。當時の事を書いた紀行文を左に拔萃する。

登りは甚だ嶮しかつたが、思つたよりずつと近く峠に出た。乙女峠の富士といふ言葉は久しく私の耳に馴れてゐた。其處の富士を見なくてはまだ富士を語るに足らぬとすら云はれてゐた。

その乙女峠の富士をいま漸く眼のあたりに見つめて私は峠に立つたのである。眉と眉とを接する思ひにひた〳〵と見上げて立つ事が出來たのである。まことに、どういふ言葉を用ゐてこのおほらかに高く、清らかに美しく、天地にたゞ獨り寂しく聳えて四方の山河を統ぶるに似た偉大な山嶽を讃めたゝふることが出來るであらう。私は暫く峠の眞中に立ちはだかつたまゝ、靜かに空に輝いてゐる大きな山の峯から麓を、麓から峯を見詰めて立つてゐた。そして、若しその峠へ人でも通り合せてはといふ懸念から路を離れて一二町右手の金時山の方に登つて、枯芒の眞深い中に腰を下した。富士よ、富士よ、御身はその芒の枯穗の間に白く〳〵清く〳〵全身を表はして見えてゐて呉れたのである。

乙女峠の富士は普通いふ富士の美しさの、山の半ば以上を仰いでいふのと違つてゐるのを私は感じた。雪を被つた山嶺も無論いゝ。がこの峠から見る富士は寧ろ山の麓、即ち富士の裾野全帶を下に置いての山の美しさであると思つた。かすかに地上から起つたこの大きな山の輪廓の一線はそれこそ一絲亂れぬ靜かな傾斜を引いて徐ろに左に及び、其處に清らかな山嶺の一點を置いて、更にまた美しいなだれを見せて地上に降りて來てゐるのである。地に起り、天に及び、更に地に降る、その間一毫の掩ふ所なく天地の間に己れをあらはに聳えてゐるのである。

しかもその山の前面一帶に擴がつた裾野の大きさはまたどうであらう。東に雁坂峠足柄山があり、西に十里木から愛鷹山の界があり、その間に抱く曠野の廣さは正に十里、十數里四方にも及んでゐるであらう。しかもなほその廣大な原野は全帶にかすかな傾斜を帶びて富士を背後におほらかに南面して押し下つて來てゐるのである。その間に働いてゐる氣宇の爽大さはいよ〳〵背後の富士をして獨りその高さを擅ならしめてゐるのである。

伊豆の天城から見た富士もまた見ごとなものであつた。愛鷹からと云ひ乙女峠からと云ひ、贅澤を云ふ樣だが實は少々近過ぎる感がないではなかつた。丁度の見頃だとおもふ距離をおいて仰がるゝのはこの天城山からであつた。

天城も下田街道からでは恰好な場所がない。舊噴火口のあとだといふ八丁池に登る途中からは隨所に素晴しい富士を見る事が出來た。高山に登らざれば高山の高きを知らずといふ風の言葉を幼い時に聞いた記憶があるが、全く不意にその言葉を思ひ出したほど、登るに從つていよ〳〵高くいよ〳〵美しい富士をうしろに振返り〳〵その八丁池のある頂上へ登つて行つたのであつた。

天城もまた御料林である。愛鷹と比べて更らに幾倍かの廣さと深さとを持つた森林が山脈の峯から峯へかけて茂つてゐる。その半ばからは杉の林であるが、上は同じく落葉樹林である。私の登つ

たのは梢にまだ若葉の芽を吹かぬ春のなかばであつたが、鑛物化した様なその古木の林を透かして遙かに富士をかへりみる氣持は實に崇嚴なものであつた。

高山に登り仰ぎ見たか山の高き知るといふ言のよろし
さ

天地の霞みおどめる春の日に聳えかがやくひとつ富士
が嶺

わが登る天城の山のうしろなる富士の高きは仰ぎ見飽
かぬ

山から見た富士ばかりを書いた。最後にひとつ海を越えて見た富士を記してこの文を終る。これは曾て伊豆の西海岸をぽつ〳〵と歩いて通つた紀行の中から拔いたものである。

今度は獨りだけに荷物とてもなく、極めて暢氣に登つて行くとやがて峠に出た。何といふことはなく其處に立つて振返つた時、また私は優れた富士の景色を見た。いま自分の登つて來た樣な雜木林が海岸沿に幾つとなく起伏しながら連つてゐる。その芝山のつらなりの間に、遙かな末に、例のごとく端然とほの白く聳えてゐるのである。海岸の屈折が深いから無數の芝山の

間には無論幾つかの入江があるに相違ない。その汐煙が山から山を一面にぼかして、輝やかに照り渡つた日光のもとに何とも云へぬ寂しい景色を作つてゐるのである。現にいま老人と通つて來た阿良里と田子との間に深く喰ひ込んだ入江などは眼の醒むる樣な濃い藍を湛へて低い山と山との間に靜かに横はつて見えて居る。磯には雪の樣な浪の動いてゐるのも見ゆる。私は其儘其處の木の根につくねんと坐り込んで、いつまでも〳〵この明るくはあるが、大きくはあるが、何とも云へぬ寂びを含んだながめに眺め入つた。富士の景色で私の記憶を去らぬのが今までに二つ三つあつた。一つは信州淺間の頂上から東明の雲の海の上に遙かに望んだ時、一つは上總の海岸から、恐しい木枯が急に吹きやんだ後の深い朱色の夕燒の空に眺めた時、その他あれこれ。今日の船の上の富士もよかつた。然しそれにもまして私はこの芝山の間に望んだ寂しい姿をいつまでもよう忘れないだらうと思ふ。

この中に「信州淺間の頂上から云々」とある。その時その廣々とした雲海の上に聳えて私の眼についた二つの山があつた。一つは富士、これはその特殊の形からすぐ解つた。今一つは細く鋭く尖つた嶺の上にかすかに白い煙をあげてゐた飛驒の燒嶽であつた。

その燒嶽に昨年の秋十月、普通の登山者の絶え果てた時に私は登つて行つた。よく晴れた日で、

濛々と煙を噴きあげてゐるその頂上に立つて見てゐると、西に、北に、南に、東に、實に無數の高い山がうす紫の秋霞の靡いた上にとび〳〵に見渡された。その中に矢張りきつぱりと一目にわかる富士の山が遙かの〳〵東の空に望まれたのであつた。

野蒜の花

その一

酒の話。

昨今私は毎晩三合づゝの晩酌をとつてゐるが、どうかするとそれで足りぬ時がある。さればとて獨りで五合をすごすとなると翌朝まで持ち越す。

此頃だん〳〵獨酌を喜ぶ樣になつて、大勢と一緒に飲み度くない。つまり强ひられるがいやだからである。元來がいけるたちなので、强ひられゝばツイ手が出て一升なりその上なりの量を飲み納める事もその場では難事でない。たゞ、あとがいけない。此頃の宿醉の氣持のわるさはこの一二年前まで知らなかつたことである。それだけ身體に無理がきかなくなつたのだ。

對酌の時は獨酌の時より幾らか量の多いのを厭はない。つまり三合が四合になつても差支えない樣だ。獨酌五合で翌朝頭の痛むのが對酌だと先づそれなしに濟む。けれどその邊が頂點らしい。七合八合となるともういけない。

人の顏を見れば先づ酒のことをおもふのが私の久しい間の習慣になつてゐる。酒なしには何の話も出來ないといふ樣ないけない習慣がついてゐたのだ。やめよう〳〵と思ふ事も久しいものであつ

たが、どうやら此頃では實行可能の域にだけは入つた樣だ。何よりも對酌後の宿醉が恐いからである。

運動をして飲めば惡醉をせぬといふ信念のもとに、飲まうと思ふ日には自ら鍬を振り肥料を擔いで半日以上の大勞働に從事する創作社々友がいま私の近くに住んでゐる。この人はもと某專門學校の勅任教授をしてゐた中年の紳士であるが、さうして飲まれる量は僅かに一合を越えぬ樣である。その一合を飲むためにそれだけの骨を折ることは下戸黨から見ればいかにも御苦勞さまのことに見えるかも知れない。然し得難い樂しみの一つを得るがための努力であると見れば、これなども事實貴重な事業に相違ない。まつたく身體または心を働かせたあとに飲む酒はうまい。旅さきの旅籠屋などで飲むのゝうまいのも一に是に因るであらう。

旅で飲む酒はまつたくうまい。然し、私などはその旅さきでともすると大勢の人と會飲せねばならぬ場合が多い。各地で催さるゝ歌會の前後などがそれである。酒ずきだといふことを知つてゐる各地方の人たちが、私の顏を見ると同時に、どうかして飲ましてやらう醉はせてやらうと手ぐすね引いて私の一擊一笑を見守つてゐる。從つて私もその人たちの折角の好意や好奇心を無にしまいため强ひてもうまい顏をして飲むのであるが、事實は甚ださうでない場合が多いのだ。これは底をわ

ると兩方とも極めて割の惡い話に當るのである。

どうか諸君、さうした場合に、私には自宅に於いて飲むと同量の三合の酒を先づ勸めて下さい。それで若し私がまだ欲しさうな顏でもしてゐたらもう一本添へて下さい。それきりにして下さい。さうすれば私も安心して味はひ安心して醉ふといふ態度に出ます。さうでないと今後私はさうした席上から遠ざかつてゆかねばならぬ事になるかも知れない。これは何とも寂しい事だ。

献酬といふのが一番いけない。それも二三人どまりの席ならばまだしもだが、大勢一座の席で盃のやりとりといふのが始まると席は忽ちにして亂れて來る。酒の味どころではなくなつて來る。これも今後我等の仲間うちでは全廢したいものだ。

若山牧水といふと酒を聯想し、創作社といふと酒くらひの集りの樣に想はれてる、といふことを折々聞く。これは私にとつて何とも耳の痛い話である。私は正直酒が好きで、これなしには今のところ一日もよう過ごせぬのだから何と云はれても止むを得ないが、創作社全體にそれを被せるのは無理である。早い話が此頃東京で二三回引續いての會合があり、出席者はいつも五十人前後であつた。その中で眞實に酒好きでその味をよく知つてるといふのは先づ和田山蘭越前翠村に私、それから他に某々青年一二名位ゐのものである。菊池野菊八木錠一鈴木菱花の徒と來ると一滴も口にすることが出來ないのだ。そしてその他の連中は唯だ浮れて飲んで騒ぐといふにすぎない。にや〳〵しながら嘗めてゐるのもある。酒徒としてはいづれも下の下の組である。一度も喧嘩をしないだけ先づ下の上位ゐには踏んでやつていゝかも知れぬ。噂だけでも斯ういふ噂は香ばしくない。出來るだけ速くその消滅を計り度い。心から好きなら飲むもよろしい。何を苦しんでかこれを稽古することがあらう。一度習慣となるとなか〳〵止められない。そしてだらしのない、いやアな酒のみになつてしまふのだ。

全國社友大會の近づく際、特にこれらの言をなす所以である。

旅さきでのたべものゝ話。

折角遠方から來たといふので、たいへんな御馳走になることがある、おほくこれは田舍での話であるが。

これもたゞ恐縮するにすぎぬ場合がおほい。酒のみは多く肴をとらぬものである。もつとも獨酌の場合には肴でもないと何がなしに淋しいといふこともあるが、誰か相手があつて呉れゝばおほくの場合それほど御馳走はほしくないものである。

念のために此處に私の好きなものを書いて見ると、土地の名物は別として、先づとろゝ汁である。これはちひさい時から好きであつた。それから川魚のとれる處ならば川魚がたべたい。鮎、いはな、やまめなどあらばこの上なし。鮒、鮠、鯉、うぐひ、鰻、何でも結構である。一體に私は海のものより川の魚が好きだ。但しこれは海のものよりたべる機會が少ないからかも知れない。

それから蕎麥、夏ならばそうめん。芋大根の類、寒い時ならば湯豆腐。香のものもうまいものだ。土地々々の風味の出てゐるのはこの香の物が一番の樣に思ふがどうだらう。

田舍に生れ、貧乏で育つて來た故、餘り眼ざましい御馳走を並べられると膽が冷えて、食慾を失ふおそれがある。まことに勿體ない。ないがしろにされるのは無論いやだが、徒らに氣の毒なおもひをさせられるのも心苦しい。

飯の時には炊きたてのに、なま卵があれば結構である、それに朝ならば味噌汁。

その二

女人の歌。

『どうも女流の歌をば多く採りすぎていかん、もう少し削らうか』

と私が云へば、そばにゐた人のいふ。

『およしなさいよ、女のひとのさかりは短いんだから』

いやさかと萬歳。

『十分ばかりお話がしたいが、いま、おひまだらうか』

といふ使が隣家から來た。

ちやうど緣側に出て子供と遊んでゐたので、

『いゝや、ひまです』

とそのまゝ私の方から隣家へ出かけて行つた、隣家とは後備陸軍少將渡邊翁の邸の事である。土地の名望家として聞え、沼津ではたゞ「閣下」とだけで通つてゐる。私を訪ぬるために沼津驛で下車した人が若し驛前の車に乘るならば、

「閣下の隣まで」

と云へば恐らく默つて私の家まで引いて來るであらう。首から上に六箇所の傷痕を持つ老將軍である。

翁の私に話したいといふ事は「いやさか」と「萬歳」とに就いてゞあつた。日本で何か事のある時大勢して唱和する祝ひの聲はおほよそ「萬歳」に限られてゐる。第一これは外國語であり、而かもその外國語にしても漢音呉音の差により一は「バンゼイ」と發音さるべく、一は「マンザイ」と發音されねばならぬのにかゝはらず、現在の「バンザイ」ではどちらつかずの禍語となつてゐる。ことにその語音が尻すぼまりになつて、つまり「バンザイ」の「イ」が閉口音になつてゐるために、陰の氣を帶びてゐる。めでたき席に於て祝福の意味を以て唱和さるべき種類のものとしてはどの點から考へても不適當であるといふのである。

それも他に恰好な言葉が無いのならば止むをないが、わが國固有の言葉として斯る場合に最もふさはしい一語がある。即ち「いやさか」である。「彌榮え」の意である。これは最初を「イ」と口を緊めておいて、やがて徐ろに明るく大きく「ヤサ、カァ」と開き上げて行く。

どうかして「萬歳」の代りにこの「いやさか」を擴め度い。聞けば君は世にひろく事をなしてゐる人ださうだから、君の手によつてもこれを行つて貰ひ度い、それをいま頼みに行かうと思つてゐたのだ、と翁は語られた。

これは筧克彦博士が初めて發議せられたものであつたとおもふ。翁もさう云はれた。そして翁は

多年機會あるごとにこの實地宣傳を試みられつゝあるのださうだ。

何かで筧博士のこの説を見た時、私は面白いと思つたのであつた。端なくまた斯ういふところで思ひがけない人からこの話を聞いて、再び面白いと思つた。然し、一方は口馴れてゐるせいか容易に呼び擧げられるが、頭で考へる「い、や、さ、か」の發音は何となく角ばつてゐて呼びにくいおもひがした。その事を翁に云ふと、翁は言下に姿勢を正して、おもひのほかの大きな聲で、その實際を示された。思はず額を上ぐるほどの、實に氣持のいゝものであつた。

「いッ」と先づ唇と咽喉と下腹とを緊め固めて、一種氣合をかける心持で、そして徐ろに次ぎに及び、最後の「か」で再び腹に力を入れて高々と叫び上げるのださうである。

私は悉く賛成して、そして出來るだけの宣傳に努める事を約して歸つて來た。社友にも同感の人が少くないと思ふ。若し一人々々の力の及ぶ範圍に於てこれを實地に行つて頂けば幸である。

全國社友大會の適宜な場合に渡邊翁に音頭をとつていたゞいて先づその最初を試み度く思ふ。

梅咲くころ。

今年は梅がたいへんに遲かつた。

きさらぎは梅咲くころは年ごとにわれのこころのさびしかる月

私はちらりほらりと梅の綻びそめるころになると毎年何とも云へない寂しい氣持になつて來るのが癖だ。それと共に氣持も落着く。

好かざりし梅の白きを好きそめぬわが二十五の春のさびしさ

この一首が恐らく私にとつて梅の歌の出來た最初であつたらう。房州の布良に行つてゐた時の詠である。

年ごとにする驚きよさびしさよ梅の初花をけふ見つけたり

うめ咲けばわがきその日もけふの日もなべてさびしく見えわたるかな

これらは『砂丘』に載つてゐるので、私の三十歳ころのものである。

うめの花はつ〳〵咲けるきさらぎはものぞおちゐぬわれのこころに

梅の花さかり久しみ下褪せつ雪降りつまばかなしかるらむ

梅の花褪するいたみて白雪の降れよと待つに雨降りにけり

うめの花あせつつさきて如月はゆめのごとくになか過ぎにけり

これらはその次ぎの集『朝の歌』に出てゐる。

梅の木のつぼみそめたる庭の隈に出でて立てればさびしさ覺ゆ

梅のはな枝にしら〳〵咲きそめてつめたき春となりにけるかな

うめの花紙屑めきて枝に見ゆわれのこころのこのごろに似て

褪せ褪せてなほ散りやらぬ白梅のはなもこのごろうとま
れなくに

その次ぎ『白梅集』には斯うした風にこの花を歌つたものがなほ多い。

昨年はことに梅を詠んだものが多かつた。ほめ讃へたものもあつたが矢張り淋しみ仰いだものが多かつた。

春はやく咲き出でし花のしらうめの褪せゆく頃ぞわびし
かりける

花のうちにさかり久しといふうめのさけるすがたのあは
れなるかも

ところが今年はまだ一首もこの花の歌を作らない、もう二月も末、恐らくこの儘に過ぎてしまふ事であらう。朝夕の惶しさがこの靜かな花に向ふ事を許さぬのである。

その三

『山櫻の歌』が出た。私にとつて第十四冊目の歌集に當る。

此處にその十四冊の名を出版した順序によつて擧げて見よう。

海の聲（明治四十一年七月）　生命社
獨り歌へる（同　四十三年一月）　八少女會
別離（同　年四月）　東雲堂
路上（同　四十四年九月）　博信堂
死か藝術か（大正　元年九月）　東雲堂
みなかみ（同　二年九月）　籾山書店
秋風の歌（同　三年四月）　新聲社
砂丘（同　四年十月）　博信堂
朝の歌（同　五年六月）　天弦堂
白梅集（同　六年八月）　抒情詩社
寂しき樹木（同　七年七月）　南光書院
溪谷集（同　七年五月）　東雲堂

くろ土　（同　十年三月）　新潮社

山櫻の歌　（同　十二年五月）　新潮社

となるわけである。この間に『秋風の歌』まで七歌集の中から千首ほどを自選して一冊に輯めた

行人行歌　（大正四年四月）　植竹書院

があつたが間もなく絶版になり、同じく最初より第九集『朝の歌』までから千首を拔いた

若山牧水集　（大正五年十一月）　新潮社

との二冊がある。

處女歌集『海の聲』出版當時のいきさつをばツイ二三ケ月前の『短歌雜誌』に書いておいたから此處には略くが思ひがけない人が突然に現はれて來てその人に同書の出版を勸められ、中途でその人がまた突如として居なくなつたゝめ自然自費出版の形になり、金に苦しみながら辛うじて世に出したものであつた。私が早稻田大學を卒業する間際の事であつた。

『獨り歌へる』は當時名古屋の熱田から『八少女』といふ歌の雜誌を出して中央地方を兼ね相當に幅を利かしてゐた一團の人たちがあつた。今は大方四散して歌をもやめてしまつた樣だが鷲野飛燕同和歌子夫妻などはその頃から重だつた人であつた。その八少女會から出版する事になり、豫約の形でたしか二百部だけを印刷したものであつた。形を菊版にしたのが珍しかつた。

程なく私は當時東雲堂の若主人西村小徑（いまの陽吉）君と一緒に雜誌『創作』を發行することになり、その創刊號と相前後して『別離』を同君方から出すことになつた。意外にこれがよく賣れたので、その前の二冊はほんの內緒でやつた形があり、かたゞ〳〵で世間ではこの『別離』を私の處女歌集だと思ふ樣な事になつた。また、內容も前二冊の殆んど全部を收容したものであつた。これの再版か三版かが出た時に金拾五圓也を貰つて私は甲州の下部溫泉といふに出向いた事を覺えて居る。歌集で金を得たこれが最初である。

『創作』の毎月の編輯に間もなく私は飽いて來た。そしていはゆる放浪の旅が戀しく、三四年間で日本全國を廻るつもりで先づ甲州に入り、次いで信州に廻つた。かれこれ半年もそんなことをしてゐるうちにまた東京が戀しくなつて歸つて來て出版したのが『路上』である。これは當時小石川の竹早町に主として古本を買つてゐた博信堂といふ店の主人が或る紙屑屋から古人尾崎紅葉の未發表の原稿を手に入れたといふのでそれで大に當てる積りで急に出版を始め、案外にも失敗して困つてゐた頃太田水穗さんの紹介でその店から出すことになつたのであつた。これには珍しく油繪の口繪が入つてゐる。私の歌集に肖像寫眞以外斯うした口繪の入つてゐるのはこの一冊だけである。この口繪に就いて思ひ出す。出版する少し前に山本鼎君と一緒に數日間下總の市川に遊びに行つてゐた。

或日同君が江戸川べりの榛の若芽を寫生すると云つて畫布を持ち出したのについて行き、その描かれるのを見てゐるうちに私は草原に眠つてしまつた。それを見た同君は急に榛の木をやめて眠つてゐる私を寫生してしまつた。サテ東京へ引上げようとなつて宿屋の拂ひが足りず、その繪を其處に置いて歸つた。それを博信堂の主人と共に幾らかの金を持つて出懸けて受取つて來て三色版にしたのであつた。原畫は私が持つてゐたのだが、富田碎花君がいつしか持ち出し、それをまたその愛人だかゞ持ち出し、思ひがけない何處か長崎あたりへ行つてゐるといふ話をあとで聞いた。

『死か藝術か』に就いても思ひ出がある。喜志子と初めて同棲して新宿の遊女屋の間の或る酒屋の二階を借りてひつそりと住んでゐた。その頃彼女は遊女たちの着物などを縫つて暮してゐたのでそんな所に住む必要があつたのだ。一緒になつて幾月もたゝぬところに私の郷里から父危篤の電報が來た。其處で周章へて歌を纒めて東雲堂へ持ち込み、若干の旅費を作つて歸國したのであつた。で、この本の校正をば遠く日向の尾鈴山の麓でやつたのであつた。最初の校正刷を郵便屋の持つて來た時、私は庭の隅の据風呂に入つてゐて受取つた。そして濡れた手で封を切つてそれを見ながら、何となしに涙を落したことを覺えて居る。

郷里には一年ほどゐた。一時よくなつた父がまた急にわるくなつて永眠したあと、いつそ郷里で小學校の教師か村役場にでも出て暮らさうかなどゝも考へたのであつたが、矢張りさうもならず、五月ごろであつた、非常に重い心を抱いてまた上京の途についた。そしてその途中、前から手紙などを貰つてゐた伊豫岩城島の三浦敏夫君を訪ふことにした。先づ伊豫の今治に渡り、それから瀬戸内海の中の一つの小さな島に在る同君宅を訪ねて行つた。勤めらるゝまゝに同家の別莊風になつた一軒に暫く滯在してゐた。海の上に突き出しになつた樣な部屋は實に明るくて靜かであつた。フツと私は其處で郷里に歸つてゐた間に詠んだ歌を一冊に纒めて見たいと思ひついた。そして荷物を解いてノートを取り出し一首々々清書し始めたのであつたが、それは私にとつて意外にも苦しい事業である事を知つた。郷里の一年間は異樣に緊張した感傷的な、また思索的な時間を私に送らせたのであつた。だから詠んだ歌にしろ、いつか平常の埒を放れて一首が四十四五文字もある樣なものになつたり、雅語から放れて口語になつたり、今までにない變體なものばかりが出來てゐた。それを、その郷里から離れてそんな一つの島の岸の靜かな所で見直し始めたので、周圍の環境が急變したゝめに、己れ自身自分の心の姿に驚いたのであつた。一首を寫し二首を清書してゐるうちに、全く息のつまる樣な苦しさを覺えて來た。後には飯が食へなくなつた。それを見て三浦君がひどく心配し、では私が清書しませうと云つて、大半彼が代つて寫しとつて呉れたのであつた。それを持つて上京

して、當時『ホトトギス』を發行してゐた籾山書店に頼んで出版したのが『みなかみ』であつた。この歌集は私のものゝ中でも最も紀念すべきものであるのである樣に思はるゝ。その前の『死か藝術か』あたりから多少づゝ變りかけてゐた私の詠歌態度が、この集に於て實に異樣に緊張して變つて來てゐるのである。『みなかみ』が出ると世間で例の破調問題が八釜敷くなり、短唱だの何だのといふものが行はるゝ樣になつた。

『みなかみ』の次ぎに出したのが『秋風の歌』であつた。

『みなかみ』を瀬戸内海の島で編輯してゐた時のことで書き落した一事がある。餘りに急變した自分自身の歌の姿に驚いた私は、一首を書いてはやめ、二首を清書しては考へ込み、一向に爲事の捗らぬその間にまた行李を解いて萬葉集を取り出してぽつ〳〵と讀み始めた。心を靜めたいためと、ひとつは古來の歌の姿をさうした場合にとつくりと眺め直して見度いためであつた。そしてこの事は一層私に歌集清書の筆を鈍らしたのであつた。

とかくして出來上つた『みなかみ』の原稿を持つて上京した私は、程なく小石川の大塚窪町に家を借り、一時信州の里へ歸してあつた妻子（その間に長男が生れてゐた）を呼んで、初めて家庭らしい家庭を構ふることになつた。そして其處に永い間の獨身時代の自由や放縱やまたは最近一二年間の歸省時代の妙に緊張してゐた生活と異つた朝夕が始まつた。鎭靜があり、疲勞があつた。さうした一年間のあひだに詠まれたものが『秋風の歌』である。これには『みなかみ』の奔放緊張は急に影を消して、いかにも懶い寂寥が代つて現れて居る。この本は友人郡山幸男君の經營してゐた新聲社といふのから出したのであつたが、程なく閉店したゝめ、同君の手により他の何とかいふ本屋の手にその紙型は渡つて今でも其處から出版されてゐるさうである。散文集『牧水歌話』も亦た同樣であつた。

『秋風の歌』で見るべきは、最初『海の聲』あたりから『路上』に及ぶまで殆んど感傷一方で詠んで來たものが『死か藝術か』に及んで（その名の示すが如く）多少の思索味を加へて來、『みなかみ』で一層その熱を加へてやがて本書に及んでるのであるが、これには熱叫するといふ樣なところがなく、たゞ在るがままの自分を見詰めて歌つてゐるといふ形に表れてゐる事などであらう。

大塚窪町に住んでゐる間に妻が病氣になつた。轉地を要するといふので相模の三浦半島に移り住んだ。大正三年の二月末であつた。そして其處で詠んだものを輯めたのが『砂丘』である。これにはいかにも物蔭に隱れて勞れを休めてゐるといふ樣な、か弱い感傷から詠まれたものが大部を占めて居る。春の末から夏にかけての景象を歌つたものが多く、いはゞ「夏の疲勞」とも謂ふべき歌集

であつた。前に『路上』を出した博信堂主人が一度悉く失敗した後、琴の音譜の本を出して大に當て日本橋の方に引越して開業してゐる店から出版したのであつた。今でもその當時の様にこの店が繁昌してゐるかどうか其後一向に消息をしらない。

次ぎが『朝の歌』である。『砂丘』と同じく三浦半島北下浦の漁村で詠んだ歌が大半を占め、東北地方の旅行さきで出來たものが加はつてゐる。同じ三浦半島で詠んだものではあるが、前の『砂丘』とは歌の性質がすつかり變つてゐる。前と違つて歌に生氣がある。しかも『みなかみ』の様に神經質のそれでなく、おほどかな靜かな力を持つた生き〳〵しさであると思つて居る。この歌集あたりから私の詠風といふ様なものがほゞ一定して來たのではないかと考へらるゝ所がある。最近の著『くろ土』『山櫻の歌』はまさしくこの『朝の歌』直系の詠みぶりであると見ることが出來るのである。

さういふ所から前の『みなかみ』とはまた異つた意味で私には忘れ難い一冊である。これは神樂坂に天弦堂といふを開いてゐた中村一六君の書店から出したのであつたが、これも程なく閉店し、紙型は他へ轉賣せられてしまつた。同じ店から出した散文集『和歌講話』また然りである。

いつまでもその漁村に引込んでゐるわけにゆかず、大正五年の夏から私だけ上京して本郷の下宿に住んで原稿などを書いてゐた。その間に出來た歌を輯めたのが『白梅集』である。これはまた歌の姿が『朝の歌』とは急に變つてゐるのが不思議なほどだ。ひどく神經衰弱的で、そしてすべてが絶望的な主觀で滿ちてゐる。謂はゞ『みなかみ』をきたなくした様なもので、それだけまた鋭くなつたとはいへるであらう。

これは妻の歌との合著になり、內藤鋲策君の抒情詩社から出したものであつた。當時妻も恢復して上京し、小石川の金富町に住んでゐた。

『寂しき樹木』はその次ぎ、巣鴨の天神山に移つた頃、出したものであつた。これはよく『砂丘』の詠みぶりに似通つたもので、卽ち夏の輝やかしさとその光の中に疲れて居る自分の心とを詠んだ歌が一冊の基調をなしてゐる。細いけれど、何處にか光を含んだものとしてこの本を振返ることが出來る。これは本郷邊の印刷所に勤めてゐた青年が（その以前籾山書店にゐた關係から歌集出版などに眼をつけてゐたと云つてゐた）突然訪ねて來て叢書の中の一編として出したいからと云つて急に原稿を纒めさせられたものであつた。彼はひどく病身で、それに初めての事ではあり、事ごとにまごついて原稿を渡してから出版まで隨分な時間がかかり、ためにその半年ほど後に東雲堂から同じく歌集叢書の一編として出す事になつた『溪谷集』の方が先に町に出てしまつたのであつた。しかも彼はこの一冊を（その前に吉井勇君の『毒うつぎ』といふのがあつた）出すと直ぐ死んでしま

つた。そしてこの本もそれなりになつてしまつた。印税の約束で出版した『秋風の歌』『砂丘』『朝の歌』『寂しき樹木』、それに散文集二冊、すべて初版を出すか出さぬに本屋の都合でその版權が行衞不明になつてしまふなど、よく〳〵の貧乏性に生れて來たものと苦笑せざるを得ない。

その『寂しき樹木』と前後して出たものに『溪谷集』がある。『朝の歌』と比べれば歌の柄の大きさに於て劣り、清澄さに於て――狹く迫つてゐることに於いて優つて居るであらう。これは主として二つの連作から成つてゐると見ていゝ。卽ち一つは秋の秩父の溪谷を巡り歩いて詠んだものと、一つは伊豆の土肥温泉に滯在してその海濱の早春を詠んだものとである。

其處で自分の歌集の出版が一寸途切れて居る。それまでは必ず一年に一冊、どうかすると二冊づゝも出して來てゐたのであるが、『溪谷集』を出してからまる三年の間何物をも出してゐない。そして大正十年三月に出したのが『くろ土』であり、二年おいて同十二年五月出版のものが卽ち最近の『山櫻の歌』となるのである。この二冊に就いては多く諸君の知悉せらるる所だらうと思ふので筆を略く。

若葉の頃と旅

櫻の花がかすかなひかりを含んで散りそめる。風が輝く。その頃から私のこゝろは何となくおちつきを失つてゆく。毎年の癖で、その頃になると必ずの様に旅に出たくなるのだ。また、大抵の年は何處かへ出かけてゐる。

櫻の花の散りゆくころ、やはらかく萌えわたる若葉の頃、その頃の旅の好みを私は海よりもおほく山に向つて持つ。山と云つても、青やかな山と山との大きな傾斜が落ち合ふ様な、深い溪間が戀しくなる。

上州の吾妻川は澁川町で沼田の方から來た利根川と落ち合つてゐるが、その澁川町から十里ほど溯つたあたりに普通に關東耶馬溪と呼びなされてゐる溪谷がある。兩岸は切り立つた様な斷崖で、その斷崖には意外なほど多くの樹木が生えてゐる。その相迫つた斷崖の底に極めて細く深く青み湛へた淵は、時にまた雪白な飛沫をあげた奔湍となつて流れ下る。

溪流そのものも矢張り他に見られぬ面白さを持つては居るが、私はことにその流れを挾む兩岸の斷崖に茂つて居る木立を愛するものである。樹は多く年を經た老樹で、土氣とぼしい岩から岩の間に、殆んど鑛物化した様なその根を張り枝を伸ばして、形あやしく立つて居る。私が初め其處を見たのは秋の末、落葉の頃であつた。いはゆる寒巖枯木の風情は充分に眺められたが、それを見るにつけても若葉の頃がなほ一層にしのばれた。で、その翌年の五月、はる〴〵とまた其處へ出かけて、山櫻が咲き、山櫻が散り、とりどりの木の芽が萌え、躑躅が咲き、藤の花の咲き出すまで、二十日ほども其處に程近い川原湯湯泉に泊つてゐて、毎日々々その溪間の眺めを樂しんだものであつた。

川原湯温泉から直ぐその不思議な眺めを持つ峽谷に入つて出はづれるまで約一里、出はづれると遙かに大きな吾妻川の流域が見渡された。原野とも云ひたいこの廣大な溪谷にもも〴〵とした若葉の呼吸が萌え立つてゐるのであつた。

朝づく日峯をはなれつわが歩む溪間のわか葉青みかゞやく

朝づく日さしこもりたる溪の瀨のうづまく見つゝ心しづけき

溪合にさしこもりつゝ朝の日のけぶらふところ藤の花咲けり

荒き瀨のうへに垂りつゝ風になびく山藤の花の房長から

溪間と云へばおほく其處に多い温泉を見逃がすわけにはゆかぬ。谷にそつた川原湯温泉は吾妻川に臨んだ斷崖の上に在つて、非常に靜かな、景色もいゝ所である。其處から、少し下つて中之條町より左折した一支流の谷間には四萬温泉がある。また、澁川から利根川の方へ溯ればその本流に沿うて十幾個所かの温泉が出てゐるのだ。私の其處を廻り歩いたは秋であつたが、若葉の頃、ことに細かな雨のそゝぐ曙など、人知らぬそれら谷間の湯にひつそり浸つてゐるのは決して惡くあるまいと思ふ。

東京近くの溪では秩父であらう。信越線熊谷驛から入つて三峰山に登る間の溪流、それから東京山手線の池袋驛から武藏野を横切つて飯能に到り、其處から沿うて上つてゆく名栗川の溪流、共に秩父の山から出て、前のはやゝ大きく、後者は極めて小さい流れではあるが、小さいなりにいかにも清らかなすが〳〵しい溪である。名栗川の上流には名栗鑛泉がある。杉木立の青々した中に、ちよろ〳〵と流れる水を控へて二軒の湯宿があつた。

朝ばれのいつかくもりてあま雲の峰に垂りつつ蛙鳴くなり

下ばらひ清らになせし杉山の深きをゆけばうぐひすの啼く

つぎつぎに繼ぎて落ちたぎち杉山のながき峽間を落つる溪見ゆ

しらじらとながれてとほき杉山の峽の淺瀨に河鹿なくなり

湖もいゝ。山の奥の靜かな湖、新樹がひそかに影をひたして、羽虫の群がひく〳〵水の上にまひ、小魚がをり〳〵跳ね、郭公が岸の木立の中で啼く。さうして景情を私は榛名山の上の湖で心ゆくまで味つた事がある。

その湖には伊香保温泉を經て登つてゆくのだ。伊香保の若葉のよさは多くの人が知つて居ることゝおもふ。温泉町附近の木立の深いのもよく、其處から見渡した前面の廣々しい雜木原の新綠は全く心を躍らせた。人はよく伊香保の紅葉といふが、紅葉は何と云つても感じが乾いてゐる。枯れてゐる。

其處から湖までたしか二里か二里半の登りであつたと思ふ。その間、多くは松や落葉松の植林地

を行くのであるが、その林の中に郭公がよく啼いた。松林を通り越すと、一里四方もありさうな廣い草原が見出された。其處の山窪の上の空には夏雲雀が無數に啼いてゐた。その草原を通り過ぎると湖の輝きが岸の木立がくれに見えて來るのだ。

湖岸に在る宿屋も氣持のいゝものであつた。宿の前の湖でとれた魚や蜆をいろいろに料理してたべさせてくれたのも嬉しかつた。私の行つた日の夕方からはら〳〵と雨が落ちて來て、翌朝はまたこの上ない晴であつた。

みづうみのかなたの原に啼きすます郭公の聲ゆふぐれ聞
ゆ

湖ぎはにゆふべ霧たち霧のかげに魚の飛びつゝ郭公きこ
ゆ

吹きあぐる溪間の風の底に居りて啼く郭公の煙らひきこ
ゆ

となりあふ二つの溪に啼きかはしうらさびしかも郭公聞
ゆ

それは山上の湖、これは例の『あやめ咲くとはしほらしや』の唄で潮來あたりの水の上を船で廻つたも同じく初夏の頃であつた。香取の宮から河とも湖ともつかぬ所を漕いで鹿島の宮へ渡り、更らに浪逆(なさか)の浦を潮來へ横切る時には小雨が降つてゐた。『潮來出島の眞菰のなかで』といふ眞菰や蒲の青々した蔭にはあやめはやゝ時過ぎてゐたが、藺の花の濃紫が雨に濡れて咲き亂れてゐた。舟はあやめ踊を以て聞えて居る潮來の廓の或る引手茶屋の庭さきの石垣下に止つた。そして船頭の呼ぶ聲につれて茶屋の小女は傘を持つていそ〳〵舟まで迎ひに來たのであつた。

明日漕ぐと樂しみて見る沼の面の闇のふかみに行々子の
啼く

わが宿の灯かげさしたる沼尻の葭のしげみに風さわぐな
り

苫蔭にひそみつつ見る雨の日の浪逆の浦はかきけぶらへ
り

雨けぶる浦をはるけみひとつ行くこれの小舟に寄る浪聞
ゆ

さきに私は若葉の頃になれば旅をおもふといふことを書いた。さういふ言葉の裏にはその季節に啼く鳥の聲、山ふかく棲むいろいろな鳥の啼聲をおもふ心がかなり多分に含まれてゐるのを自分では感じてゐる。

先づ郭公である。次いで杜鵑である。筒鳥である。呼子鳥である。その他山鳩の啼く音、駒鳥の啼く音、それからそれと思ひ出されて來て、斯う書いてゐながらも何處やらにそれらの鳥のそれ〴〵の寂しい聲の聞えてゐるのを感ずるのだ。まつたく若葉のころの山にはいろ〳〵な鳥が啼く。しかも何處にか似通つた韻律を持ち、その韻律の中にはまた同じ様な寂しさ親しさが含まれてゐるのを思ふ。杜鵑、駒鳥は鋭くて錆び、郭公、筒鳥、呼子鳥、山鳩のたぐひはすべて圓みを帶びた聲の、しかも消しがたい寂しさをその啼聲の底に湛へてゐる鳥である。筒鳥と呼子鳥とは同じものだといふ人もあるが、よく聞くと矢張り違ふ。筒鳥は大きく、呼子鳥の聲は小さい。初め私はこれを親鳥雛鳥のちがひだと思ふたが、耳を澄ませば確かに違つて居る。筒鳥は大きく、呼子鳥は小さい。一は晝間の日の光の照りかがよふ溪間によく、一は日暮方の木立の奥に聞くべき鳥である。杜鵑は空を横切る姿がよく、思はずも聞きつけたその一聲二聲が甚だいゝ。續けば或は耳につくかも知れない。郭公のたぐひには私は終日耳を傾けてなほ飽きない。

それらの鳥を最も多く聞いたのは山城の比叡山々中の古寺に泊つてゐた時であつた。彼處は全山が寺領で、それこそ空を掩ふ大きな杉がぎつちりと生ひ茂り、銃獵を許さぬのであゝまで鳥が多いのだらうと思はれた。然し、少し山深い所に行けば大抵の所ではこのうちのどれかは聞ける。郭公はなかなか姿を見せぬ鳥だといふが、上州の草津から信州の澁へ白根山の中腹を縫うて越した時、其處の噴火の山火事あとの落葉松林の梢から梢へ移る姿を見た。年老いた案内者は、『はアあれかね、あれはハツポウ鳥だよ』と事もなげに云ひすてた。澁峠の頂上に近づくと五月の中ばすぎといふに雪は一面に栂や樅の植林を埋めつくし、その梢ばかりが僅かに表はれてゐる荒涼たる原野の様な中で、杜鵑と郭公とはかたみがはりに啼いてゐたのであつた。

山深いところなどで不圖聞きつけた松風の音や遠い谷川のひゞきに我等はともすると自分の寄る邊ない心の姿を見るおもひのすることがある。然し、松風や水のひゞきは終に餘りに冷たく、餘りに寄る邊ないおもひがしないではない。それに比べて私は遥かにこれらの鳥の啼く音に親しみを持つのである。カツコウ、カツコウと啼くあの靜かな寂しい温かい聲を聞いてゐると、どうしても私は眼を瞑ぢ頭を垂れ、其處に自分の心の迷ひ出でゝ居る寂しさ温かさを覺えずにはゐられないのだ。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

芭蕉の閑古鳥はたしかに郭公鳥の事であらねばならぬ。東北の或る地方ではまたこの鳥を豆蒔鳥とも呼ぶさうだ。ソレあの鳥が啼く、豆を蒔けといふのであらう。いゝ名だとおもふ。

海も強ちにいけないのではない。海ならば岬が好きだ。また、島もいゝ。入江も若葉にふさはしく、奥深い港もこの頃静かである。外洋そのものはどうも秋の風の冴えた頃がいゝ様に思はれる。

紀州の熊野浦、勝浦の港に入らうとする頃であつた。五月雨の雲の断間に遙かの山腹に奈智の瀧の見えた時の感興を忘れ得ない。そしてその勝浦港の港口、崎山の茂みの蔭に在る赤島温泉に二三日雨に降りこめられながら鰹の大漁に舌鼓を打つたことも思ひ出さるゝ。

瀬戸内海の中でも鯛漁の本場だと云はれてゐる備前沖の直島に鯛網を見に行つたも五月であつた。島は極めて小さい島だが、其處に崇徳上皇の流され給うた遺跡があつた。島の八幡宮の神官に案内せられて其處へ行くと、何のそれらしい面影もなく、たゞ一面に小松の立ち並んでゐる浪打際の山の蔭であつた。伸び揃うた小松のしんの匂ひが寂しい心を誘ふのみであつた。琴彈濱といふ所で鯛を取つて、これも折からの雨に濡れながら松蔭の海人の小屋で、さま〴〵に料理して貪り喰うた事も忘れ難い。夜に入つて小松ばかりの島山の峯づたひに船着場まで歸らうとすると、ちやうど晴れそめた望の夜の月が頭上にあつた。うち渡す島から島への眺めに時を忘れて、定期の發動機船に乘り遅れ、わざ〴〵小舟をしたてゝ備前地までその月の夜を漕がせた事をも思ひ出す。

繁山の岬のかげの八十島をしまづたひゆく小舟ひさし

き

したゝかにわれに喰はせよ名にし負ふ熊野が浦はいま

鰹時

むさぼりて腹な破りそ大ぎりのこれの鰹の限りは無け

む

琴彈の濱の松かぜ斷えぬると見れば沖邊を雨のゆくな

り

山や海の事ばかり書いてゐた。京都の嵯峨から御室、嵐山から清涼寺大覺寺を經て仁和寺に到るあたりの青葉若葉の靜けさ匂はしさを何に譬へやう。單に青葉若葉と云はない。あのあたり一面に

おほい松の林の松の花、蕪村が歌うた

若竹やゆふ日の嵯峨となりにけり

の篁つゞきの竹の秋の風情、思ひ起すだに醉ふ樣な心地がする。

また、新樂師寺唐招提寺の古い御寺をたづね歩いて、過ぎ去り過ぎゆく『時』のかをりに身を沈め、奈良の春日の森の若葉の中に入り行く心を誰に告げ得やう。鹿の子の群れあそぶ廣い〳〵馬醉木(あしび)の原は漸くあの可憐な白い花に別れやうとする頃である。若草山のみどりは漸く深く、札所九番の南圓堂の鐘の音に三笠山の峯越しの雲の輝きこもる頃である。

吾子つれて來べかりしものを春日野に鹿の群れをる見れば

くやしき

葉を喰めば馬も醉ふとふ春日野の馬醉木が原の春すぎにけり

奈良見人つらつら續け春日野の馬醉木が原に寢てをれば

見ゆ

つばらかに木影にうつれる春日野の五月の原をゆけば鹿

鳴く

思ひ起し、書きつらねて行けばまことに際がない。

私のこの文章を書いてゐるのもまた旅さきに於てゞある。伊豆天城山の北の麓、狩野川の上流に當る湯が島温泉にもう十日ほど前から來てゐるのだ。來た頃に咲きそめた山ざくらは既に名殘なく散つて、宿の庭さきを流るゝ淺川に鳴く河鹿の聲が日ましに冴えてゆく。晴れた日に川原に落つる湯瀧に肩を打たせながら見るとなく、仰ぎ見る山の上の雲の輝きは何と云つてももう夏である。

彼處か此處か、行つて見度いところを心に描いてゐると、なか〳〵斯うじつとしてゐられない氣持である。旅にゐてなほ旅を思ふ、自づと苦笑せずにはゐられない。(四月十一日、湯が島湯本館にて)

枯野の旅

○

乾きたる
落葉のなかに栗の實を
濕りたる
朽葉がしたに橡の實を
とりどりに
拾ふともなく拾ひもちて
今日の山路を越えて來ぬ

長かりしけふの山路
樂しかりしけふの山路
殘りたる紅葉は照りて
餌に饑うる鷹もぞ啼きし

上野の草津の湯より
澤渡の湯に越ゆる路
名も寂し暮坂峠

○

朝ごとに
つまみとりて
いただきつ

ひとつづゝ食ふ
くれなゐの
酸ぱき梅干

これ食へば
水にあたらず
濃き霧に卷かれずといふ

朝ごとの
ひとつ梅干
ひとつ梅干

○

草鞋よ
お前もいよいよ切れるか
今日
昨日
一昨日

これで三日履いて來た
履上手の私と
出來のいゝお前と
二人して越えて來た
山川のあとをしのぶに
捨てられぬおもひもぞする
なつかしきこれの草鞋よ

○

枯草に腰をおろして
取り出す參謀本部
五萬分の一の地圖

見るかぎり續く枯野に
ところどころ立てる枯木の
立枯の楢の木は見ゆ

路は一つ
間違へる事は無き筈
磁石さへよき方をさす

地圖をたゝみ煙草とり出で
元氣よくマツチ擦るとて
大きなる欠伸をばしつ

○

頼み來し

その酒なしと
この宿の主人云ふなる

破れたる紙幣とりいで
お頼み申す隣村まで
一走り行て買ひ來てよ

その酒の來る待ちがてに
いまいちど入るよ温泉に
壁もなき吹きさらしの湯に

冷たさよわが身を包め

冷たさよ
わが身をつゝめ

わが書齋の窓より見ゆる
遠き岡,岡のうへの木立
一帶に鬱み靜もり
岡を掩ひ木立を照し
わが窓さきにそゝぐ
夏の日の光に冷たさあれ

わが凭る椅子
腕を投げし卓子
脚重くとゞける疊
部屋をこめて動かぬ空氣

すべてみな氷のごとくなれ

わがまなこ冷かに澄み
あるとなきおもひを湛へ
勞れはてしこゝろは
森の奥に
古びたる池の如くにあれ

あゝねがふ
わが日の安らかさ
わが日の靜けさ
わが日の冷たさを

夏の寂寥

わが家の、
北に面した庭に、
南天、柘榴、檜葉、松、楓の木が
小さな木立をなしてゐる。
南天の蔭には、
洗面所の水が流るゝため、
虎耳草、秋海棠、蔦朶など、
水氣を好む植物が、
一かたまりに茂つて、
あたりは一面の苔となつてゐる。
その中の柘榴の木に、
今年はひどく花がついた。
こまかな枝や葉の茂みから、
清水でも滲み出る樣に、

眞紅な花が咲き擴がつた。
初め一輪二輪と葉がくれに咲き、
やがてその葉の色をも包んで、咲き盛ると、
いちはやくまた一輪二輪と散り出した。
厚い花瓣の中に無數の蘂をちぢらせた
眞紅な花が、
一つ二つと散り出した。
それを眞先きに見付けたのは、
私の子供たちだ。
五歳と八歳の二人の娘は、
毎朝早起をしてその花を拾ひ競うた。
そして二三日のうちに飽いてしまつた。
代つてその夥しい落花を拾ひ始めたのは、
私の年若な書生だ。

耳のとほい無口な小柄な彼は、
誰に云ひつけられたでなく、
その木の蔭にしやがんでは、
ひつそりと拾ひとつて塵取の中に入れた。
いよいよ散る眞盛りとなると、
彼も終ににや〳〵と笑ひながら、
熊手を持つて來て、
うるほひ渡つた青苔を剝がぬ樣に、
その上にうづだかい落花を掻き寄せた。
その庭は、
離室の私の書齋からよく見える。
苔に落ちた花も見え、
枝垂れ咲いた軒端の花もよく見えた。
子供の拾ふのも可愛いゝと見、

書生の拾ふのもいとしいと見てゐた。
が、
流石にその夥しい花も散り盡くる時が來た。
一朝ごとに減つてゆくその落花をば、
いつか書生も捨ておく樣になつた。
けふ、
ふと私はその庭におりて行つて、
柘榴の木の下に立つた。
減つたとは云つてもまだ其處等一面に花びらは散つてゐた。
ただ古び汚ちてきたなくなつただけだ。
茂つた老木の枝には、
これはまたおもひのほかに、
殘つてゐる實がすくない。

みな今年のは空花(あだばな)であつたらしい。
柘榴の茂み檜葉の茂みを透いて、
紺の色の空が見えた。
浮雲ひとつ無い空だ、
めらめらと燃える様にとも、
または、
死にゆく靜けさを持つたとも、
いづれとも云へる眞夏の空だ。
十本たらずの庭木の間に立つて、
ぼんやりとその空を仰ぎながら、
ぼんやりと呼吸(いき)する、
長い呼吸の間に混つて、
何とも云へぬ冷い氣持が、
全身を浸して來るのを私は覺えた。

名も知れぬ誰やらが歌つた、
土用なかばに秋風ぞ吹く、
といふあの一句の、
荒削りで微妙な、
丁度この頃の季節の持つ『時』の感じ、
あれがひいやりと私の血の中に湧いたのであつた。

夏のよろこび

底深い群青色の、表ほのかに燻りて弓形に張り渡したる眞晝の空、其處には力の滿ち極まつた靜寂の光輝があり、悲哀がある。

朝燒雲、空のはたてに低く細くたなびきて、かすけき色に染まりたる。野に出でゝ見よ、滴る露の中に瓜の花と蜂の群とが無數に喜び躍つてゐる。

向日葵の花、磨き立てた銅盤の輝きを持つて、によつきりと光と熱との中に咲いてゐる。歩み移る太陽の方にかすかに面を傾くるといふにもこの花のあはれさが感ぜられる。づばぬけて大きいだけになほ。

夜。空氣も濡れ、燈火も濡れ輝いてゐる。ほのかに汗ばむアイスクリームの湯氣。

晝寢。したゝかに吸ひ太りたる蚊のよちよちとまひゆける下、疊よ、氷の如く冷かなれ。

釣

ソレ、君と通つて
此處なら屹度釣れると云つた
あの淀み
富士からと天城からとの
二つの川の出合つた
大きな淀みに
たうとう出かけて行つて釣つて
見ました
かなり重い錘でしたが
沈むのによほどかゝる
四尋からの深さがありました
とろりとした水面に
すれ〳〵に釣竿が影を落す
それだけで私の心は大滿足でした

山の根はいゝが
惜しいことに
釣つてゐる上に道がある
なるたけ身體を
小松の蔭にかくしてゐるのだが
竿だけは上から眼につく
「あたりますかナ」
一人の男が上に蹲踞んで云ふのです
「イヤ一向……
一體此處では何が釣れるのです」
この私の問には
向うで困つたやうです
「さア……
うなぎ

なまづ
ふな
まア、まるた位ゐでせうナ……
餌は何です」
「みゝずです」
「みゝずなら
何にでもいゝ」
と云つてのそりと大きな男は立ち上りました
そして云ひ添へました
「どうも此頃
あたらなくなりましたよ」
「ですかねェ……
左様なら」
私は振返つて云ひました

そのうち
こまかな雨が來ました
身體のめぐりの
曼珠沙華が次第に濡れて
なんとも云へぬ赤い色です
それが水にも映つてる
對岸の藪の向うでは
見えはしないが
蟲送りでせう
かん、かん、かんと秋らしい鉦が聞える
富士から愛鷹にかけては
いちめんに塗りつぶした様な雲で
私の釣竿からも
たうとう雫が落ち出しました

虻と蟻と蟬と

光を含んだ綿雲が、軒端に見える空いつぱいに輝いて、庭木といふ庭木は葉先ひとつ動かさず、それ〴〵に雲の光を宿して濡れた樣に靜まつてゐる。蟬の聲はその中のあらゆる幹から枝から起つてゐる樣に群り湧いて、永い間私の耳を刺して居た。

數日續いた暴風雨のあとで、今朝屆いた雜誌を一冊載せたばかりの机の上には冷い濕氣が浸みてゐた。讀むともなく開いた表紙の折目の蔭になつた隙間に口に含んだ煙草の煙を吹き込むと雜誌の向側から直ぐ眞白な濃い煙がさアつと机のおもて一面に擴がつて出た。そして机のしめりに浸み込む樣にペツトリと木地にくつ着いたまゝ這ひ擴がつてゆくのみで少しも上へは昇らない。もう一度私は同じ樣に折目の下から煙を吹いた。前の煙のあとを追うて浸み擴がつたそれは、やがてよれ〳〵に小さな渦卷を作りながら僅かに上に昇らうとする。二つ、三つと小さな渦は出來たが、矢張り上には立たなかつた。一二寸の高さに昇つたかと思ふと、くづるゝ樣に下に靡いて擴がつた。渦卷は山の形に、下に這ふ煙は信濃あたりの高い山から山の間に見る雲の海の形にも似て眺められて、私は幼い靜かな興味を覺えながら幾度となくその戯れを繰返した。

不圖落付かぬ何やらの音が聞えた。紙とガラスの二重になつてゐる窓の障子の間にまひ込んだ何やらの羽蟲が立つる音である。疲れ果てたそして極めて靜かなその場の氣持を壞さない樣に、私はわざ〳〵座を立つてその蟲を逃さうとした。見ると、それは大きな虻であつた。一度も二度も今朝がたから私を螫して逃げて行つたそれである。

波立つ胸で私はその少し前に用意して來てゐた蠅叩きを取つた。そして一打ちにその大きな虻を打ち落した。あり〳〵と強過ぎる力で打たれた蟲は、片羽をもがれ、腸を出して死んでしまつた。

そのきたない死骸を見て一時當惑した私はすぐそれを可愛がつてゐる蟻に與へようと思つた。離室になつてゐる私の書齋の石段には、常に三四種類の蟻が來て餌を涉つてゐた。眼にも入らぬ埃の樣な迫ふにも迫はれぬ小さな薄赤い蟻はよく机から本箱の隅までも這ひよつて來た。ぶつ〳〵胴體が三つに區切れて長さ七八分から一寸にも及ぶ大きな黑蟻もよく机のめぐりにやつて來て私を驚かした。常に鋭く尻を押つ立てて歩くやゝ小さい黑蟻は好んで人を螫し、またこれに螫されると必ず二三日は脹れて痛かつた。これ等のほかに、長さ一分ほどのほつそりした赤黑い蟻がゐた。この蟻は部屋にも上らず、どうかして着物に附いても容易に螫すことをしなかつた。で、私は餌さへあればこの見たところも他よりも可愛い蟻に與へるのを樂しみとしてゐた。

降りこめられてゐたあとの日和で、三段になつた石段にはありとあらゆる蟻が出揃つて駈け廻つてゐた。辛うじてその中に私の目指す蟻の一疋を見出した私は、その忙しげに歩いてゆく鼻先に虻

の死骸を置いた。考へ深さうにその大きな餌のめぐりを一周した彼女は、くるりと向きを變へると恐しい速力で或る方角へ駈けだした。思ひがけぬこの大收獲を報告し、少しも速く巣へ運搬するためにその仲間を呼びに走つたのである。

報告に行つた留守の間に他の蟻の族が幾度となくその周圍にやつて來た。私は力めてそれらを餌に近附けさせぬ樣に用心した。この日の私の疲れた心はさうした場合に當然起る兩方の蟻の間の爭鬪を見るのがいやであつた。やがて、一つの石段の角の所からいまの一疋と思はれるのが姿を出した。と見ると、そのあとに引續いてぞろ〳〵ぞろ〳〵と長い列を作つてうねる樣にその仲間がやつて來た。

やれ〳〵と私も微笑しながら其處を離れた。そしてそのまゝ茶の間に行つて夙くに時間の過ぎて居る藥を一服飲んで來た。再び離室に歸つて机に向はうとしながら一寸その石段を覗いて見て驚いた。ほんの僅かの間に、其處には既う私の見るを厭つた大爭鬪が石段の半ば以上に亙つて開かれてゐた。埃の樣な赤い小蟻、尻を立てた黑蟻、それに最初から餌を運んでゐた蟻、この三種族が眞黑になつて虻の死骸を中に嚙み爭つてゐるのである。むらむらと湧いた肝癪から私はまだ其儘其處に在つた蠅叩きを取るや否や、ぴしやりとその黑い蠕のかたまりに一擊を喰はした。そして續けさま

にぴしや〳〵と叩きつけて一切を其處から遠くはたき落してしまつた。

僅かの事にも波立ち易くなつてゐる自分の心持を鎭めるために、私は心を入れて机の上の雜誌を讀まうとした。耳に入るは蟬の聲である。さながら軒端から射す雲の光の中に電氣でも通つて居る樣に、ひり〳〵ひり〳〵と耳から頭に響いて聞えて來た。

空想と願望

噴火口のあとともいふべき、山のいたゞきの、さまで大きからぬ湖。

あたり圍む鬱蒼たる森。

森と湖との間ほぼ一町あまり、ゆるやかなる傾斜となり、青篠密生す。

青篠の盡くるところ、幅三四間、白くこまかき砂地となり、渚に及ぶ。

その砂地に一人寢の天幕を立てゝ暫く暮し度い。

ペンとノートと、

愛好する書籍。

堅牢なる釣洋燈、

精良なる飲料、食料。

石楠木咲き、

郭公、啼く。

誰一人知人に會はないで

ふところの心配なしに、

東京中の街から街を歩き、

うまいといふうまいものを飲み、且つ食つて廻り度い。

遠く望む噴火山のいただきのかすかな煙のやうに、

腹這つて覗く噴火口の底のうなりの様に、

そして、千年も萬年も呼吸を續ける歌が詠み度い。

遠く、遠く突き出た岬のはな、

右も、左も、まん前もすべて浪、海、

僅かに自分のしりへに陸が續く。

そんなところに、いつまでも、いつまでも立つてゐたい。

いつでも立ち上つて手を洗へるよう、
手近なところに清水を引いた、
書齋が造り度い。

咲き、散り、
咲き、散る
とりどりの花のすがたを、
まばたきもせずに見てゐたい。
萌えては枯れ、
枯れては落つる、
落葉樹の葉のすがたをも、
また。

山と山とが相迫り、

迫り迫つて
其處にかすかな水が生れる。
岩には苔、
苔には花、
花から花の下を
傳ひ、滴り、
やがては相寄つて
岩のはなから落つる
一すぢの絲のやうな
まつしろな瀧を、
ひねもす見て暮し度い。

いつでも、
ほほゑみを、

眼に、
こころに、
やどしてゐたい。

自分のうしろ姿が、
いつでも見えてるやうに、
生き度い。

窓といふ
窓をあけ放つても、
蚊や
蟲の
入つて來ない、
夏はないかなア。

日本國中の
港といふ
港に、
泊つて歩き度い。

死火山、
活火山、
火山から
火山の、
裾野から
裾野を、
天幕を擔いで、
寢て歩きたい。

日本國中にある
樹のすがたと、
その名を、
知りたい。

おもふ時に、
おもふものが、
飲みたい。

欲しい時に、
燐寸よ、
あつて呉れ。

煙草の味が、

いつでも
うまくて呉れ。

或る時に
可愛いゝやうに、
妻と
子が、
可愛いゝと
いゝ。

おもふ時に
降り、
おもふ時に
晴れて呉れ。

眼が覺めたら
枕もとに、
かならず
新聞が
來てるといゝ。

庭の畑の
野菜に、
どうか、
蟲よ、
附かんで呉れ。

麥酒が

いつも、
冷えてると
いゝ。

酒の讃と苦笑

それほどにうまきかとひとの問ひたらば何と答へむこの

酒の味

眞實、菓子好の人が菓子を、渇いた人が水を、口にした時ほどのうまさをば酒は持つてゐないかも知れない。一度口にふくんで咽喉を通す。その後に口に残る一種の餘香餘韻が酒のありがたさである。單なる味覺のみのうまさではない。

無論口であぢはふうまさもあるにはあるが、酒は更らに心で嚙みしめる味ひを持つて居る。あの「醉ふ」といふのは心が次第に酒の味をあぢはつてゆく狀態をいふのだと私はおもふ。斯の酒のうまみは單に心に味覺を與へるだけでなく、直ちに心の營養となつてゆく。乾いてゐた心はうるほひ、弱つてゐた心は蘇り、散らばつてゐた心は次第に一つに纏つて來る。

私は獨りして飲むことを愛する。

かの宴會などゝいふ場合は多くたゞ酒は利用せられてゐるのみで、酒そのものを味はひ樂しむといふことは出來難い。

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒は靜かに飲むべかりけり

酒飲めば心なごみてなみだのみかなしく頰を流るるは何ぞ

かんがへて飲みはじみたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ

われとわが惱める魂の黑髪を撫づるとごとく酒は飲むなり

酒飲めば涙ながるるならはしのそれも獨りの時にかぎれり

然し、心の合うた友だちなどゝ相會うて杯を擧ぐる時の心持も亦た難有いものである。

いさいさと友に盃すすめつつ泣かまほしかり醉はむぞ今夜

語らむにあまり久しく別れゐて我等ありけりいさ酒酌ま

む

汝が顔の醉ひしよろしみ飲め飲めと強ふ：この酒などか
は飲まぬ

朝の酒の味はまた格別のものであるが、これは然し我等浪人者の、時間にも爲事の上にもさまで
に嚴しい制限の無い者にのみ與へられた餘德であるかも知れぬ。雨、雪など、庭の草木をうるほし
てゐる朝はひとしほである。

時をおき老樹のしづく落つるごと靜けき酒は朝にこそあ
れ

普通は晩酌を稱ふるが、これはともすれば習慣的になりがちで、味は薄い。私は寧ろ深夜の獨酌
を愛する。

ひしと戸をさし固むべき時の來て夜半を樂しくとりいだ
す酒

夜爲事の後の机に置きて酌ぐウヰスキーのコプに蚊を入

るるなかれ

疲れ果て眠りかねつゝ夜半に酌ぐこのウヰスキーは鼻を
燒くなり

鐵瓶のふちに枕しねむたげに德利かたむくいざわれも寢
む

醉ひ果ててはは世に憎きもの一もなしほとほと我もまたあ
りやなし

一刻も自分を忘るゝ事の出來ぬ自己主義の、延いて其處から出た現實主義物質主義に凝り固まつ
てゐる阿米利加に禁酒令の布かれたは故ある哉である。

洋酒日本酒、とりぐ〳〵に味を持つて居るが、本統におちついて飲むには日本酒がよい。

サテ、此處まで書いて來るともう與へられた行數が盡きた。

初め、酒の賛を書けといふ手紙を見た時、我知らず私は苦笑した。なぜ苦笑したか。

要するに私など、自分の好むものにいつ知らず救はれ難く溺れてゐた觀がある。朝飯晝飯の膳にウヰスキーかビールを、夕飯の膳にはまた改めていはゆる晩酌を、といふ風に酒びたりになつてゐる者に果して眞實の酒の賛が書けるものだらうか。

いま一つ苦笑して苦笑の歌數首を書きつけこの稿を終る。

その一。

一杯を思ひきりかねし酒ゆゑにけふも朝より醉ひ暮したり

なにものにか媚びてをらねばならぬ如き寂しさ故に飲めるならじか

醉ひぬればさめゆく時の寂しさに追はれ追はれて飲めるならじか

その二、これは五六年前、腎臓を病み醫者より絶對の禁酒を命ぜられた時の作。

酒やめてかはりに何か樂しめといふ醫者が面に鼻あぐらかけり

彼しかもいのち惜しきかかしこみて酒をやめむと下思ふらしき

癖にこそ酒は飲むなれこの癖とやめむ易しと妻宣らすなり

宣りたまふ御言かしこしこの癖とやめむとは思へ酒やめがたし

酒やめむそれはともあれ永き日のゆふぐれごろにならば何とせむ

朝酒はやめむ晝酒せんもなしゆふがたばかり少し飲ましめ

酒無しに喰ふべくもあらぬものとのみ思へりし鯛を飯のさいに喰ふ

おろか者にたのしみ乏しとぼしかるそれの一つを取り落
したれ
うまきもの心に並べそれこれとくらべ廻せど酒に如かめ
や
人の世にたのしみ多し然れども酒なしにしてなにのたの
しみ

歌と宗教

私は宗教といふものを持たない。また、それを知らない。知るべき機會にまだ遭遇しないでゐるのである。

既成宗教に對する概念も極めて漠たるもので、寧ろ古いお寺とかお宮とか佛像とか、または昔の多くの殉教者たちの傳說などに親しみを感じてゐる位ゐのもので、全く宗教といふことに就いて云々する資格はないのである。

然し斯ういふ心持は或はその宗教といふものに通じてゐるのではあるまいかといふことを折々考へる事がある。それは「歌」に對する私の心情である。

歌に對する私の考へを極く簡單に云ふと、歌は自分を知りたいために詠むもの、守り育てたいために詠むもの、慰め樂しませ勵ますために詠むものと私は思つて居る。

自分の生れて來てゐること、生きて行かうとしてゐること等に氣のついてゐる人は餘り多くあるまい樣におもはれる。多くはたゞ其處に置かれてあるとだけにぼんやりと生きてゐるので、オヤ〳〵これが自分か、これが眞實の自分かと自分の姿に對して眼を見張る人すらも少ない樣に思はれてならない。

それに反して歌を求むる心のうちには多少とも確に自分自身といふものに氣づいてゐる心が動いてゐるのを感ずる。また、何か知ら自分の思つてゐることを云ひ現はしてみたいといふ心の下には必ずその「自分」といふものが動いてゐねばならぬ筈である。

斯くして漸く自分といふものゝあるのを知る。さうして其處に見出でた唯一無二の自分といふものに對して次第に親しみを感じ始めるのはこれは自然である。親しみを感ずると共にその自分を一層濁りのないものに、美しいものに、深い大きいものに進めてゆきたい心の起るのもまた自然であるといはねばならぬ。

一首々々と拙い歌を作り重ねて行きつゝあることは、要するにこの自分といふものをもつとよく知らう、もつとよくしやうといふねがひから出てゐる樣に私には思はるゝのである。斯ういふ風に云つて來るといかにも概念的に理窟つぽく聞えるのを思ふが實は無自覺ながらに自づとさういふ傾向をとつて來てゐる樣に思はれてならないのである。

私の曾つて詠んだ一首に、

わがこゝろ澄みゆく時に詠む歌か詠みゆくほどに澄めるこゝろか

といふのがある。

まつたく歌に詠み入つてゐる瞬間は、普通の信者たちが神佛の前に合掌禮拜してゐる時と同じな、或はそれより以上であらうと思ふ法悦を感じてゐるのである。

おそらく私はこの歌の道を自分の信仰として一生進んでゆくであらうとおもふ。さうしていま自分の前に横たはつて居る歌の道はいよ〳〵靜かにいよ〳〵寂しく、そしていよ〳〵杳かに續いてゐるのを感ずるのである。

自己を感ずる時

生の歡びを感ずる時は、つまり自己を感ずる時だとおもふ。自己にぴつたりと逢着するか、或はしみ〴〵と自己を嚙み味つてゐる時かだらうとおもふ。

さういふ意味に於て私にとつては矢張り歌の出來る時がそれに當る樣である。それも、うまく出來て呉れる時である。

歌が思ふ樣に出來る時は萬事萬物すべてが無意味でなくなつて來る。自分を初め、自分の周圍に在るすべてがいきいきと生きて來る。自分を中心としてめい〳〵が光を放つてゐる樣な明るさを感ずる。自分を中心として全(すべて)が成り立つてゐる樣な力を感ずる。初めて、我此處に在り、といふ歡びが五體の中に湧いて來るのを感ずる。

なまけ者と雨

降るか照るか、私は曇日を最も嫌ふ。どんよりと曇つて居られると、頭は重く、雨手足はだるく眼すらはつきりとあけてゐられない様な鬱陶しさを感じがちだ。無論爲事は手につかず、さればと云つてなまけてゐるにも息苦しい。

それが靜かに四邊を濡らして降り出して來た雨を見ると、漸く手足もそれ〴〵の場所に歸つた様に身がしまつて來る。

机に向ふもいゝし、寢ころんで新聞を繰りひろげるもよい。何にせよ、安心して事に當られる。

雨を好むこゝろは確に無爲を愛するこゝろである。爲事の上に心の上に、何か企てのある時は多く雨を忌んで晴を喜ぶ。

すべての企てに疲れたやうな心にはまつたく雨がなつかしい。ひとつ〳〵降つて來るのを仰いでゐると、いつか心はおだやかに凪いでゆく。なまけてゐるにも安心してなまけてゐられるのをおもふ。

雨はよく季節を教へる。だから季節のかはり目ごろの雨が心にとまる。梅のころ、若葉のころ、または冬のはじめの時雨など。

梅の花のつぼみの綻びそむるころ、消え殘りの雪のうへに降る强降のあたゝかい雨がある。櫻の花の散りすぎたころの草木の上に、庭石のうへに、またはわが家の屋根、うち渡す屋並の屋根に、列を亂さず降り入つてゐる雨の明るさはまことに好ましいものである。しやあ〳〵と降るもよく、ひつそりと草木の葉末に露を宿して降るもよい。

わが庭の竹のはやしの淺けれど降る雨見れば春は來にけり

しみじみとけふ降る雨はきさらぎの春のはじめの雨にあらずや

窓さきの暗くなりたるきさらぎの强降雨を見てなまけをり

門出づと傘ひらきつゝ大雨の音しげきなかに梅の花見つ

ぬかるみの道に立ち出で大雨に傘かたむけて梅の花見

つ

わがこころ澄みてすがすがし三月のこの大雨のなかを
歩みつゝ

しみじみと聞けば聞ゆるこほろぎは時雨るる庭に鳴き
てをるなり

こほろぎの今朝鳴く聞けば時雨降る庭の落葉の色ぞお
もはる

家の窓たゞひとところあけおきてけふの時雨にもの讀
み始む

障子さし電燈ともしこの朝を部屋にこもればよき時雨
かな

など、春の初めの雨と時雨とを歌つたものは私に多くあるが、大好きの若葉の雨をばどうしたも
のかあまり詠んでゐない。僅かに、

うす日さす梅雨の晴間に鳴く蟲の澄みぬる聲は庭に起
れり

雨雲のひくくわたりて庭さきの草むら青み夏むしの鳴
く

などを覺えてゐるのみである。

夕立をば二三首歌つてゐる。

飯かしぐゆふべの煙庭に這ひてあきらけき夏の雨は降
るなり

はちはちと降りはじけつゝ荒庭の穂草がうへに雨は降
るなり

俄雨降りしくところ庭草の高きみじかき伏しみだれた
り

澁柿のくろみしげれるひともとに瀧なして降る夕立の
雨

一日のうちでは朝がいゝ。朝の雨が一番心に浸む。眞直ぐに降つてゐる一すぢごとの明るさのく

つきりと眼にうつるは朝の雨である。

眺むるもよいが、聽き入る雨の音もわるくない。ことに夜なかにフッと眼のさめた時、端なくこのひゞきを聽くのはありがたい。

わが屋根に俄かに降れる夜の雨の音のたぬしも寢ざめて
聽けば
あららかにわがたましひを打つごときこの夜の雨を聽け
ばなほ降る

雨はよく疲れた者を慰むる。

あかつきの明けやらぬ闇に降りいでし雨を見てをり夜爲
事を終へ

遠山の雲、襞から襞にかけておりてゐる白雲を、降りこめられた旅籠屋の窓から眺める氣持も雨のひとつの風情である。

山が若杉の山などであつたらば更らにも雨は生きて來る。

紀伊熊野浦にて。

船にして今は夜明けつ小雨降りけぶらふ崎の御熊野の見
ゆ

下總犬吠岬にて。

とほく來てこよひ宿れる海岸のぬくとき夜半を雨降りそ
ゝぐ

信濃駒ケ嶽の麓にて。

なだれたち雪とけそめし荒山に雲のいそぎて雨降りそゝ
ぐ

上野榛名山上榛名湖にて。

山のうへの榛名の湖の水ぎはに女ものあらふ雨に濡れつ
つ

常陸霞が浦にて。

苫蔭にひそみつゝ見る雨の日の浪逆の浦はかき煙らへり

雨けぶる浦をはるけみひとつゆくこれの小舟に寄る浪聞

ゆ

平常爲事をしなれてゐる室内の大きなデスクが時々いやになつて、別に小さな卓を作り、それを廊下に持ち出して物を書く癖を私は持つて居る。火鉢の要らなくなつた昨日今日の季候のころ、わけてもこれが好ましい。

廊下に窓があり、窓には近く迫つて四五本の木立が茂つてゐる。なかの楓の花はいつの間にか實になつた。もう二三日もすればこの鳥の翼に似た小さな實にうすい紅ゐがさして來るのであらうが、今日あたりまだ眞白のまゝでゐる。その實に葉に枝や幹に、雨がしとしと降つてゐる。昨日から降つてゐるのだが、なか〳〵止みさうにない。

楓の根がたの青苔のうへをば小さい辨慶蟹の子が二疋で、さつきから久しいこと遊んでゐる。

ゆきあひてけはひをかしく立ち向ひやがて別れてゆく子

蟹かな

貧乏首尾無し

貧しとし時にはなげく時としてその貧しさを忘れてもを
る
ゆく水のとまらぬこゝろ持つといへどをりをり濁る貧し
さゆゑに

小生の貧困時代は首尾を持つてゐない。だからいつからいつまでとそれを定める由もない。そんな狀態であるために殆んどまたそれに對する感覺といふものをも失つて居る觀がある。從つてオイソレとその記憶を持ち出して來ることが困難である。止むなくこれを細君にたづね相談して見た。

流石に彼女にはあの時はあゝであつた。あそこでは斯うであつたといふ相當に生々しい感傷がある樣である。然しそれとても尋ねられたから思ひ出した程度のもので、要するに亭主同樣この永續的貧乏に對しては極めてノン氣であるらしい。

早稻田の學校を出たのはたしか廿四歲であつた。學校にゐる間も後半期は鄕里からの送金途絕えがちであつたので半分自ら稼いで過してゐた。學校を出ると程なく京橋區の或る新聞社に勤めた。

月給は廿五圓であつた。社命で止むなく大嫌ひの洋服を月賦で作つたが、ネクタイを買ふ錢がなく、それ拔きで着て出てゐたところ――さうだ、靴をば永代辭雄君のを借りて穿いたのだつた――社の古老田村江東氏が見兼ねて自分のお古を持つて來て結んで呉れた。居ること約半年、社內に動搖があつて七人ほど打ち揃うて其處を出た。そしてまた間もなく同區內の他の新聞社に出ることになつた。ところが前のと違つてどうもその社內の空氣が面白くなく、前社同樣廿五圓の月給をば二箇月分か貰つたが出社して事務をとつたのは僅々五六日であつた。

それから暫く浪人してゐてやがて短歌中心の文藝雜誌『創作』を京橋の東雲堂から發刊する事になつた。編輯を續けること四五ヶ月、漸く雜誌の基礎も定まる樣になると月並で煩雜なその仕事がイヤになり、それをば他の友人に讓つておいて所謂「放浪の旅」に出た。三四年間の豫定で、各地の歌人を訪ねながら日本全國を廻つて來ようといふのであつた。

先づ甲州に入り、次いで信州に廻つたところ、運わるく小諸町で病氣に罹つた。そして其處の或るお醫者の二階に二ヶ月ほども厄介になつてゐた。出立早々病氣に罹つた事が、いかにも出鼻を挫かれた氣持で、折角企てた永旅もまたイヤになつて東京へ引返して來、當時月島の端に長屋住居をしてゐた佐藤綠葉君の家に身を寄せた。初冬の寒い頃であつた。或る日彼の細君から「若山さん、

二圓あるとお羽織が出來ますねェ」と云つて嘆かれた事を不圖いま思ひ出した。その前後であつたのだらう、北原白秋君の古羽織を借りたが借り流しにしたかの事も續いて思ひ出されて來た。

それから再び『創作』の編輯をやることになり、飯田河岸の、砲兵工廠の眞向ひに當る三階建の古印刷所の三階の一室を間借して住む事になつた。あのどろ〳〵に濁つた古濠の上に傾斜した古家屋の三階のこととて、二三人も集つて坐りつ立ちつすればゆらつくといふ實に危險千萬なものであつたが――實際小生が其處を立退くと直ぐその家は壞されてしまつた――その時はさうした變なところが妙に自分の氣持に合つてゐたのだ。その前後が最も小生の酒に淫してゐた頃で、金十錢あれば十錢、五錢あれば五錢を酒に代へ飲んでゐた。イヤ、それだけでなく帽子が酒になり、帶までもそれに變つた。

さうしてその頃小生の詠んでゐた歌は次の様なものである。

正宗の一合壜のかはゆさは珠にかも似む飲まで居るべし

わが部屋にわれの居ること木の枝に魚の棲むよりうらさびしけれ

誰にもあれ人見まほしき心ならむ今日もふらふら街出であるく

其處此處の友は今しも何をして何想ふならむわれ早やも寢む

わだつみの底に青石搖るゝよりさびしからずやわれの寢覺は

明けがたの床に寢ざめてわれと身の呼吸することのいかにさびしき

寢ざむれば うすく眼に見ゆわがいのちの終らむとする際の明るさ

夜深く濠に流るゝ落し水聞くことなかれ寢ざむるなかれ

かなしくも命の暗さきはまらばみづから死なむ砒素をわが持つ

青海のひゞくに似たるなつかしさわが眼の前の砒素に
あつまる

あゝした落ちつかぬ朝夕を送つてゐながら斯ういふ小綺麗な歌ばかりを詠んでゐたといふことが今から見るといかにも滑稽の感を誘ふのである。

サテ、斯うして順々に書いてゐたのでは結局一種の自叙傳を書くことになつてゆく。間を端折つて結婚後の事を少し書き添へておきたい。すべて貧乏史の續きならぬはないが、多少その間に色彩の變化がある樣であるからである。

我等が結婚したのは小生の廿八歳の時であつた。當時彼女は新宿の女郎屋の間に在る酒屋の二階を借りて、其處で遊女たちの着物を縫つて身を立てゝゐたので取りあへず其處に同棲する事になつた。謂はゞ亭主が女房の許に寄食した形であつた。小生は小生でその頃休刊してゐた以前からの雜誌『創作』を自分の手で復活經營したく頻りと金を集めることに腐心してゐたのであつた。折も折、其處へ小生の鄕里から父危篤の電報が來て九州の日向まで歸らねばならぬことになつた。病氣は中風で次第に永引き、終には其儘眠つてしまつた。かたゞ〳〵で約一年ばかりも鄕里に留り、大正二年六月上京して小石川の大塚窪町にさゝやかな一戸を構へた。その時はもう長男が生れてゐた。

其處で或る金主がついていよ〳〵其の雜誌を再興する事になつた。なるにはなつたがなか〳〵思ふ樣に成績が擧らず、小生の受くる報酬なども一向に定つてゐなかつた。それに妙に小生の家には來客が多かつた。毎日五人か十人、而も一向にこちらの事にはお察しのつかぬ人たちだつた。小生自身もまた前の頽廢期間の惰力から逃れ得ずに相手さへあれば二日でも三日でも酒に浸つて醒めなかつた。從つて雜誌の方の仕事も進まず金主との間も面白くない、間に在つて唯だもう困るのは細君ばかりであつた。初めに云つた彼女の記憶といふのは概ねこの大塚窪町時代に係つてゐるのも無理ならぬ話である。幸にツイ近所に同じ樣に貧しい友人が住んでゐた。中の一人の若い畫工などは一圓でも二圓でも金が手に入れば必ず先づその一割を以て鹽を買ひ、五分を以て胡麻を買ひ、殘り八割五分の金で米を買つて置く。米と胡麻鹽とさへあれば人間決して死なゝいといふのがこの人の云分であつた。そしてさう云ひながら我等の間には明朝の米今夜の米の貸借が行はれてゐたのである。斯うした貧しい同志が相隣つて住んでゐた事はお互ひにとつて少なからぬ力であらねばならなかつた。

細君はたうとう病氣になつた。つてを求めて雜司ヶ谷に在る或る慈善病院に入れたが次第に永引

き、やがて醫師のすゝめで相州三浦半島に轉地した。その頃流石に小生自身も疲れてゐたのでいつそ一緒に行くがよからうと一家して移つて行つた。此處に來ると細君は非常に安らかな氣持になつたらしい。代つて苦しんだは小生である。轉地と共に雜誌も休刊したので、一定の收入といふものから全然離れてしまつた。せつせと書く原稿料とても知れたもので、歌の選料亦た然りであつた。歌人仲間が短冊會を起して金を慥へ、細君の藥代として送つてよこして呉れたもその時であつた。が、此處でもまた一人貧しい友達が出來た。これは寧ろ我等のあとを追つて移つて來た樣な人たちで、同じく親子三人連で、そして同じく細君は病んでゐた。

この夫婦の貧乏は我等よりもつとひどかつた。「オイ、これをこれだけ借りてゆくよ」と云つて主人公自身、我等の借りてる部屋の隅の炭箱から木炭を一掴み抱へて行つた姿など、今でもまだ眼の前にある心地がある。

三浦を引上げたは大正五年の暮であつた。

そしてその後をなほ語るとすればそれは寧ろ日常生活の貧乏といふより雜誌發行者としての窮貧談になる。即ち多く印刷工場を相手としての苦鬪史である。休刊してゐた『創作』をその年から自分自身の手でまた〳〵再興して今日まで續けて來てゐる道中の話となるのである。

然し、どうしたものか小生には實のところ貧乏といふものがさほどには苦にならない。よく〳〵の貧乏性に生れて來てゐるのか、その時〳〵ですぐ忘れてしまひ得る幸福な性質を持つてゐるのか、その場はとにかく、その前後などを考ふることに於て、さほどには苦にならない。もう歳も歳だし、子供も大きくなつたし、それに三界無宿の身で、今少し何とか考へねばならぬのだが、考へるつもりではゐるのだが、どうもまだ身にしみて來ない。おしまひまでこれで押してゆくのかも知れない。

若葉の山に啼く鳥

今月號の或雜誌に佛法僧鳥のことが書いてあつた。棲むところはきまつてゐて夏のあひだだけ啼く鳥なのかと思つてゐたら、遠く南洋の方から渡つて來て秋になればまた海を渡つて歸つて行く鳥であるさうだ。

私たちの結婚した年であつたから恰度今から十一年前にあたる、武藏の御嶽山に一週間ほど登つてゐた事がある。山上のある神官の家に賴んで泊めて貰つてゐた。ある夜、私は其處の厠に入つてゐた。普通の家のよりずつと廣い厠であつた。良い月の夜で、廣やかな窓から冴えた光がいつぱいに射しこんでゐた。其處へ聞きなれぬ鳥の聲が聞えて來た。何でもツイ厠に近い樹の梢からであつた。

私の癖の永い用を足して自分の部屋に歸つたが、閉め切つた雨戸を漏れてなほその澄んだ聲が聞えて來る。ランプの灯影にじいつと耳を傾けてゐたが、僅の定つた時をおいて續けさまに聞えて來るその鳥の聲のよさに私はたうとう立ちあがつて戸外へ出た。そしてあの樹であらうと思つてゐた何やら大きな樹の根がたに歩み寄つた。然しその時は其處とは少し離れた他の樹の梢にその聲は移つてゐた。足音を忍ばせてその樹へ近づいて行つたが、それを知つたかどうか、またその先の杉の樹に啼き移つてゐた。毎晩霧の深いに似ず、その夜はまつたくよく晴れて、見渡す峰といふ峰は青

みを帶びてくつきりと冴え、眼下の谷を埋めて立ち並んでゐる杉の一本一本の梢すらも見分けられさうな月夜であつた。其處へその鳥の聲だけがたつた一つ朗かに冴えて響いてゐるのである。鋭いといふでなく、圓みを持つた、寂びた聲で、幾分の濕りを帶びながら石の上を越え落つる水の樣になめらかに聞えて來るのである。

次第に昂奮した心で私は飽くことなくその聲を追うて山の傾斜の落葉の上を這ひながら立ち込んだ杉の樹の根から根を傳つて行つた。どうかその聲の落ちて來る眞下でとつくりと聽き入りたかつたからである。けれど一聲か二聲を啼き捨てゝは次の樹へ移るこの鳥にはとても追つくことは出來なかつた。ほどほどで諦めてぴしよぴしよの朽葉を踏みながら宿の庭まで歸つて來ると、相變らず月はよく冴え、恰も其の月の夜の山や川の魂でゝもあるかの樣に私にとつては生れて初めて耳にするこの不思議な鳥の聲は澄んで寂しく聞えてゐたのであつた。翌朝、この事を宿の人に訊くと、それは佛法僧ですと敎へて呉れた。

驚きと昂奮とが先に立つて私はその時の鳥の聲がどんな風であつたかを明瞭に覺えてゐない。それから數年後のある初夏に山城の比叡山に登り、山上にある或る古い寺に滯在してゐた時、これによく似た鳥を聞いた。寺の僧に訊くと彼は筒鳥だと答へた。これを聞いたのは多く晝であつた。晝

といつても午前三時頃から啼き出すので、谷には雲がおり空には月の冴えたなかに聞いたこともあつたのである。その時に書いた紀行の中にこの鳥のことを斯う書いてゐる。

日が闌けて木深い溪が日の光に煙つた樣に見ゆる時何處より起つて來るのだか、大きな筒から限りもなく拔け出して來る樣な聲で啼きたてる鳥がある。初めもなく終りもない、聽いてゐれば次第に魂を吸ひ取られてゆく樣な、寄るべない聲の鳥である。或時は極めて間遠に、或時は釣瓶打に烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれてどうかして一目見たいものと幾度も木の雫に濡れながら林深くわけ入つたが終に見ることが出來なかつた。筒鳥といふのがこれである。

この筒鳥といふのが若かしたら佛法僧ではあるまいかと私は思つてゐる。右に引いたある雜誌には佛法僧の姿を『鳩より心持小さく羽毛全體綠色勝ち、頭は淡黑色、嘴は朱色をして短く末端が少しく曲り、脊と腹は綠色、それにコバルト色の冴えた斑があり、翼は碧綠色をして約七寸ばかり、翼と尾の端は黑く濡れ羽色をしてゐる』と記したあとにその啼き聲を書いて『ホツホー、ホーホーホーホー』といふ風に啼くとしてある。これだと私の聞いた筒鳥とよく似てゐるのだ。

然し、いづれにせよこの鳥の啼き聲は到底文字などに書き現せるものではない。聲に何の輪廓がない。まつたく初めもなく終りもない。そしてこの鳥の啼いてゐる間、天も地もしいんとする樣な靜けさを持つた寂びた聲である。

これに似たものに郭公がある。これは『カツコウ、カツコウ』と二聯の韻を持つて啼きつゞける。筒鳥よりも一層寂びしく迫つた調子を帶びてゐる。同じく明け方から晴れた日の晝にかけて啼く。降る日は聲が少い。雨にふさふのは山鳩であらう。

もう一つ、呼子鳥がある。これは一層よく筒鳥に似てゐる。矢張り文字には書けないが、先づ『ポンポンポンポンポン』と云つた風に啼きつゞける。筒鳥より聲も調子も小さく聞える。これは夕暮方によく啼いたとおもふ。

すべて若葉に山の煙るころから啼きそめる鳥である。榛名山に登る時、ずつとうち續いた小松の山の大きな傾斜に松のしんがほのぼのと匂ひ立つてゐるなかに聞いた郭公なども忘られ難い。奥州で豆蒔鳥と呼ぶのはこの郭公のことらしい。

若葉といひ、松のしんといひ、うちけぶつた五月晴の空といひ、そんなことを思ひ浮べると、どうしてもこれらの深山の鳥の啼く聲が身に浸み響いて來てならない。いま手をつけてゐる忙しい爲事を果したら早速三河の鳳來寺山に登るつもりである。この山は古來佛法僧の棲むので名高い山で

ある。身延の奥の院七面山あたりにも啼いてゐることゝおもふ。

秋風の音

いちはやく秋風の音をやどすぞと長き葉めでゝ蜀黍は植う

私は蜀黍の葉が好きである。その實を取るのが望みならば餘り肥料をやらぬ方がよい。然し、見ごとな葉を見ようとならばなるたけ多く施した方がよい。

書齋の窓に沿うた小さな畑に私は毎年この蜀黍を植ゑる。今年はその合間々々に向日葵を植ゑて見た。兩方とも丈の高くなる植物で、一方はその葉が長く、一方はその花が大きい。

一年中さうではあるが、夏は別して私は朝が早い。大抵午前の三四時には窓をあけて椅子に倚る此頃だともう三時半には戸外がうす明るくなつて來る。そのさやかな東明の微光のなかに、伸びるだけ伸びつくしたこの二つの植物が、一つは黒ずんで見えるまでの青い葉を長々と垂れて立ち、一つは今朝にも咲き出でた様に鮮かな純黄色の大輪の花を大空に向けて咲いてゐるのを見ると、まつたく眼のさめる思ひがするのである。窓からさした電燈の光で見ると、蜀黍の葉の兩側には點々として露の玉が宿つて居り、なほよく見るとその葉のまんなかどころにちよこなんと一疋の青蛙が坐つてゐる。不思議にこの葉にはこのお客様が來てゐるものである。

じいつとそれらに見入つてゐると、その畑の中から蟋蟀の鳴く音が聞ゆる。もうこの蟲が鳴き出したかと思つてゐると、遠くでは馬追蟲の澄んだ聲も聞えて來るのである。

夏の末、秋のはじめの斯うしたこゝろもちはいかにも靜かで佗しいものである。

愛鷹山の根に湧く雲をあした見つゆふべ見つ夏のを
はりとおもふ

明けがたの山の根に湧く眞白雲わびしきかなやとび
とびに湧く

畑なかの小みちを行くとゆくりなく見つゝかなしき
天の川かも

沼津の町から私の住んでゐる香貫山の麓まで田圃の路を十町ほど歩いて來ることになる。をり〳〵町に出て酒を飲む。客と共にすることもあり、獨りの時もある。そしてそれは多く夜で、その歸りは大抵夜なかの一時となり二時となる。

たゞ獨りして歸つて來る氣持を私は好む。

歸つて來る路の片側に小さな井手が流れてゐる。ほんのちよろ〳〵とした小ながれにすぎぬが、水は清らかで、水邊には珠數草と螢草とが青々と茂つてゐる。

醉つた身體の重い足取で、その井手のそばに通りかゝると、珠數草の根を洗ひながら流れてゐる水のせゝらぎが耳につく。一度、小用をするか何かでそれに耳をとめて以來、いつか癖となつて通りかゝるごとに氣を附ける樣になつたのかも知れぬ。晝間や、用事を持つた時には殆んど忘れてゐる小流が、さうした場合にのみ必ずの樣に耳について來る。

下駄をぬいで揃へてそれに腰をおろす。足は自づと螢草の茂みにだらりと垂れることになるのである。さうして何を見るともなく、聽くともなく、幾らかの時を過す。時としては一時間の前後もさうしてぼんやりしてゐることがある。水の音の靜かなのが身に泌みるのではあらうが、さればとてわざ〳〵それを聽かうとするでもない。たゞさうして醉つた身體を休めて風に吹かれるのが嬉しいのらしい。夜なかの一時二時となるともう人も通らない。廣い田圃のたゞ中に煙草を吸ふのも忘れてさうした時間を送ることは酒の後でなくては出來ず、また夜なかでなくては出來ぬ話である。

野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆなり

うるほふとおもへる衣の裾かけてほこりはあがる月

夜の路に

天の川さやけく澄みぬ夜更けてさし昇る月の影は見

えつつ

路ばたの木槿は馬に喰はれけり（芭蕉）

この句は私の大好きな句である。延いて木槿の花も好きなものゝ一つとなつた。

秋の來たのを知らせる花で先づ咲き出すのはこの木槿であらう。夏のうちから咲くのであるが、彼の『土用なかばに秋風ぞ吹く』のこゝろもちで、どんな暑い盛りに咲いてゐてもこの花には秋のこゝろが動いてゐる。紫深い、美しくてさびしい花である。

走り穂の見ゆる山田の畔ごとに若木の木槿咲きならびたり

畑の隈風よけ垣の木槿の花むらさき深く咲き出でにけり

梅の花櫻の花

きさらぎは梅咲くころは年ごとにわれのこころのさび
しかる月

梅の花が白くつめたく一輪二輪と枯れた様な枝のさきに見えそむる。吹きこめた北の風西の風がかすかな東風にかはらうとする。その頃になるときまつて私は故のない憂鬱に心を浸されてしまふ。

眼をあけてゐるのもいやだが、而かも心の底は明るく冷やけく澄んで居る。爲事のいやになるのもこの頃である。煙草のいゝのを喫ひたくなるのもこの頃である。

あたりの木々も、常磐樹ならば金屬の様に黒く輝き、落葉樹ならばたゞ明るく靜けく枯れた様に立つてゐる。根がたの草はみなひとしく枯れ伏してうすら甘いその頃の日ざしを含んでゐる。さうしたなかに一りん二りんと咲き出づる梅の初花を私は愛する。

年ごとにする驚きよさびしさよ梅の初花を今日見出でたり

梅咲けばわがきその日もけふの日もなべてさびしく見えわたるかな

梅の花はつはつ咲けるきさらぎはものぞおちゐぬわれのこころに

然し何と云つても春は櫻である。それもお花見場所の埃つぽいのは花のおもひがせぬ。靜かな庭に咲き出でた一本二本、雨の後などとりわけて鮮けく、照り澄んだ日ざしのなかにほくらほくらと散り澄んで輝いてゐるのもいゝ。

夕霽(ゆふあがり)暮れおそきけふの春の日の空のしめりに櫻咲きたり

雨過ぎししめりのなかにわが庭の櫻しばらく散らであるかな

ひややけき風をよろしみ窓あけて見てをれば櫻しじに散りまふ

春の日のひかりのなかにつぎつぎに散りまふ櫻かがやけるかな

さういふうちにも私はほんとうの山櫻、單瓣の、雪の様に白くも見え、なかにかすかな紅ゐを含んだとも見ゆる、葉は花よりも先に萌え出でて單紅色の滴るごとくに輝いてゐる、あの山櫻である。これは都會や庭園などには見かけない、どうしても山深くわけ入らねばならぬ。

うす紅に葉はいちはやく萌え出でて咲かむとすなり山ざくら花

花も葉も光りしめらひわれのうへに笑み傾ける山さくら花

かき坐る道ばたの芝は枯れたれやすわりてあふぐ山さくら花

うらうらと照れるひかりにけぶりあひて咲きしづもれる山さくら花

刈りならす枯萱山の山はらに咲きかがよへる山さくら花

温泉宿の庭

旅と云つても、ほんの一夜泊の話なのですが――。

私のいま住んでゐます沼津から程近く、その六七ケ所の温泉があります。なかの吉奈温泉から、病氣でいま此處に來てゐる、おひまならお遊びにおいで下さいませんかといふ思ひがけない手紙がF――さんから來ました。F――さんは我々の歌の社中の人で、そして踊りの師匠として世に聞えた婦人なのです。夙うから病氣入院中の事をば知つてゐたが、もう湯治に出かけられる樣になられたかと喜びながら私は早速家を出て、夕方早くその宿に着きました。

田舍に似合はぬ大きな宿ですが、その最も奥まつた一室がF――さんの部屋でした。きちんと片附いたなかに思つたよりもなほ元氣よく美しく坐つておゐでゞした。緣側からすぐ小さな池となり、池の向うが築山、築山の向うはもう天然の山で峻しい坂に欝蒼と樹木が茂り、その茂みの中には他處から引かれたのでせう、きれいな岩を傳うて愛らしい瀧となつて流れ落ちてゐました。

少し位なら歩き度いとの事で食事後、打ち連れて近所を散歩しました。宿から一二町も歩くとすぐ眞青な稻田で、稻田の向うに溪が流れてゐました。もう八月に入つてゐましたに何といふ螢の多

さだつたでせう、稻田のうへ一面、それこそ歩いてゐる我等の顏にも來てあたりさうに、點りつ消えつ靜かに〳〵まひ遊んでゐるのです。それでゐて私にはたゞ美しいとか見ごとだとかいふより何やらしみじみした寂しいものに眺められたのでした。矢張りもう秋の螢といふ樣な感じが何處かに動いてゐたに相違ありません。螢の話、歌の話など、一つ二つ語り合つてほど〳〵に宿に歸り、やがて私は私の部屋に引き上げました。部屋は築山や池を中に斜めにF――さんの所と向き合つてゐました。そとから入れば流石に部屋は暑苦しく、一度入つた蚊帳から出て、緣側に腰をかけてゐると、山から降りてくるひや〻かな風、瀧のひゞき……

みじか夜をひゞき冴えゆく築庭の奥なる瀧に聽き恍け
てゐる

燈火のとゞかぬ庭の瀧のおとを獨り聽きつゝ戸を閉し
かねつ

翌日は半日あまりF――さんの部屋で遊びました。そして、眼前の景物を題に一首二首と詠むことになりました。F――さんにも面白いのが出來たのでしたが、惜しい事にはいま思ひ出せません。

水口につどへる群のくろぐろと泳ぎて鮒も水もひかれり

いしたたきあきつ蛙子あそび恍け池にうつれる庭石の影

まひおりて石菖のなかにものあさる鶺鴒（いたたき）の咽喉の黄いろき見たり

庭石のひとつひとつに蜥蜴ゐて這ひあそぶ晝となりにけるかな

或る日の晝餐

或る日の午前十一時頃、書き惱んでゐる急ぎの原稿とその催促の電報と小さな時計とを机の上に並べながら私は甚だ重苦しい心持になつてゐた。

机に兩肱をついて窓のそとを見てゐると頻りに櫻が散つてゐる。小さな窓から見える間に一ひらか二ひらか、若しくははら〳〵とうち連れて散り亂れてゐるか、その花片の見えない一瞬間だに無い樣にひら〳〵、ひら〳〵、はら〳〵と散つてゐる。曇り日の濕つた空氣の中に何となく冷い感觸を起しながら、あとから〳〵と散つてゐる。割合に古木の並んだ庭さきのその木の梢にはまだみつちりと咲きかたまつてゐるのだが、今日はもう昨日の色の深みはない。見るからにほの白く褪せてゐる。その褪せた花のかたまりの中から限りもなげに小さな花びらが散り出して來るのである。

『今年の櫻もけふあたりが終りかナ』

さう思ひながら私はたうとうペンを原稿紙の上に置いて立ち上つた。そして窓際の椅子に行つて腰掛けた。見れば窓下の庭も、庭つゞきの畑も、いちめんに眞白になつてゐる。たま〳〵あたりの木等に冷い音を立てながら風が吹いて來ると、ほんとに眼の前に渦を卷いて花の吹雪が亂れたつのである。

少し身體を前屈みにすると眞白な櫻木立の間に香貫山が見える。その圓みのある山を包んだ小松の木立もこの數日急に春めいて來た、といふより夏めいて來た。山いちめんの小松原の色がありありとその心を語つてゐる。黑みがかつたうへにうす白い綠靑を吹いてゐるのである。

何といふことなく私の心は靜かに沈んで行つた。そして頻りに山の靑いのが親しくなつた。時計を見るとかれこれ十二時である。あれこれと考へたすゑ、私は椅子を立つた。

茶の間に來て見ると妻は裁縫道具を片づけてゐた。晝飯を待つて兩人の小さな娘はもうちやんと其處に來て坐つてゐる。

『濟まないが、お握りを三つほど拵へて呉れないか、海苔に包んで……』

不思議さうにこちらを見上げた妻は、やがて笑ひながら、

『何處にいらつしやるの』

と訊いた。

『山に行つてお晝をたべて來やうと思ふ。ウヰスキーがまだ殘つてゐたね』

その長い壜を取り出して見ると、底の方に少し殘つてゐた。それを懷中用の小型の空壜に移して、坐りもせずに待つてゐると眞黑な握り飯が出來て來た。

『おさいが何もありませんが……』

『澤庵をどつさり、大切りにして入れておいて呉れ』

それらを新聞紙に包んで抱へながら裏木戸から畑の中へ出た。

畑つゞきにその山の麓まで私の家から五丁と離れてゐないのだ。畑には大抵百姓たちが出てゐた。麥は穗を孕み、豌豆には濃い紫の花が咲いてゐる。附近の百姓家からでも來るのか、そんな畑の中にも櫻の花片の散つてゐるのが見られる。古い寺の裏を通りすぎて登りかゝる道はこの海拔六百六十尺の小山に登る四つ五つの道のうち、最も嶮しい道である。然し、それが私の家からは一番近い。

小山ながら海寄りの平野に孤立して起つた樣な山なので、この頂上からは四方の遠望が利く。北東には眞上に富士が仰がれる。が、その山の形よりその裾野の廣いのを眺めるのに趣きがある。次第高になつてゆく愛鷹と足柄との山あひの富士の裾野がずつと遠く、ものゝ五六里が間は望まれるのである。然し、その日は私は頂上まで行き度くなかつた。其處ではどうしても氣が散りがちであるからだ。そして中腹の、やゝ窪みになつた所に行つて新聞包を置いた。

其處には矢張り他の場所と同じく一面の小松が生へて、松の下には枯草が程よく地を覆うてゐる。よく私の行く所なので多分私が吸ひすてたに相違ない煙草の吸殼などが枯草のかげに落ちてゐる。蜜柑の皮の乾びたのも見えた。其處からは海を見るに都合がいゝ。ことに廣い駿河灣一帶よりも直

ぐ眼の下に見える江の浦の細長い入江を見るに恰好な所に當つてゐる。

『やれ〳〵』

何といふ事なく獨り言を云ひながら、私は其處につき坐つた。そして煙草に火を點けた。

入江を越した向うの伊豆の連山には重い白雲が懸つてゐた。上は濃く、下は淡く、そしてその淡いところだけがかすかに動いてゐる樣に見えた。山かげの入江の海はいかにも冷く鎮び果てゝ、何處をたづねても小波ひとつ立つて居やうとも思はれなかつた。不思議とまた、いつもは必ず二つか三つ眼につく發動船も小舟も一向に影を見せなかつた。入江に沿うたこちら側の長い松原の蔭には蓼ばかりが散り殘つてゐる樣な桃の畑が濕り深い空氣の中に氣味惡い赤味を帶びて連り渡つてゐた。

ふところから小さな壜を取り出すと一二杯續けてウヰスキーを飲んだ。重い曇りの底を吹くともなく吹いてゐる風は、ことに山の上だけに相當に寒かつた。一杯二杯と續けてゐるうちに、ぽつりと冷いものが額に當つた。氣をつけると袖にも足袋にも小さな雨が降つてゐる。然し眞上の空は青みこそ無けれいかにも明るく晴れてゐるので、私はそのまゝぼんやりと海を見ながら盃をなめてゐた。幾らかづゝ廻つてゆく酒の醉は次第に心を靜かにし、眼さきを明らかにしてゆくのであつた。

が、終にあたりの葉の深い松の木を探してその蔭に引込まねばならなかつた。急に雨の粒が大きく荒くなつて來たのである。然し、一度落ち着いた心持を撥き立てるほどの降りかたでもなかつた。松の蔭に入ると、惜しいことには海は見えなくなつた。そして、小松のことで、眞直ぐにしやんと坐つてゐることも出來なかつた。前くぐみになりながら片手に持つた小壜の酒は不思議な位ゐ減りかたが遲かつた。壜を持つたまゝ、片手で新聞包を開いて澤庵をつまみ握飯にも手をつけるのだが、それでもなか〳〵盡きなかつた。

次第にあたりの松の葉が濡れて行つた。それ〴〵の小松のそれ〴〵の枝のさきにはいづれにも今年の新しいしんがほの白く伸びてゐる。淡い綠のうへに白い粉を吹いた樣なその柔かなしんのさきには、また、必ず桃色か紅色の小さな玉が三つか四つづゝ着いてゐた。露ほどの大きさで紅色の美しいのもあり、既に松かさの形をして紅ゐの褪せてゐるのもあつた。それに微かに雨がそゝいでゐるのである。また、枯草の中には眞紅なしどみの花が咲いてゐた。濡れた地べたにくつ着いたまゝ、勿體ない清らかな色が咲いてゐる。

帽子のさきに垂れてゐる松の葉のさきからぽつり〳〵と雫が垂りだした。まだ然し羽織の袖は充分には濡れて來ない。幾度かすかして見る壜の底にはまだ少量の酒が殘り、寧ろ海苔の握飯の方が先に盡きかけた。心はいよ〳〵靜かに明るく、あたりの木も草も、眞直ぐに降る山窪の雨の白さも、みな極めて樂しい眺めとなつて來た。

『燕！』

私は思はず聲に出して、自分の前の山合にまひ降りてはまた高くまひ上つてゆく小さな鳥に眼をとめた。まつたくそれは今年初めて見る燕の鳥であつた。

『來たなア』

さう思ひながら私は松の蔭から這ひ出して行つた。

一羽、二羽、三羽と續いてその身輕な鳥は眞青な小松の原を渡つてゐるのだ。

幸ひと雨は晴れて來た。急に輝いて見える伊豆の山の白雲の陰の海の色は山の根だけ日本刀の峰などに見る青みを宿し、片側の廣い部分にはさら〳〵として細かな波を立て始めてゐた。

桃

の

實

武藏から上野へかけて平原を横切つて汽車が碓氷にかゝらうとする、その左手の車窓に沿うて仰がるゝ妙義山の大岩壁は確かに信越線中での一異景である。丁度そのあたり、横川驛で汽關車は電氣に代る。そして十分か十五分の停車時間がある。辨當賣の喧しい聲々の間に窓を開いて仰ぐだけに、空を限つて聳え立つたこの異樣な山の姿が一層旅心地を新たにする樣だ。

驛から發車して間もなく、同じ左手にかなり強い角度を以て碓氷川へ傾斜してゐる桑畑か何ぞの中に坂本といふ舊い宿場が見下さるゝ。今は横川驛の影響でゝもあるか、幾らか賑つて居る樣に見ゆるが、まだ汽車が蒸氣汽關車の煤煙と共に碓氷の隧道に走り入つてゐた頃は、まるで白晒(しらさ)れた一本の脊髓骨の捨てゝある樣な、荒れ果てた古驛であつた。明治四十一年の眞夏、私は輕井澤を午後に立つて碓氷の舊道を歩いて越え、日沒頃にその坂本に入つた。碓氷峠を挾んで西と東、輕井澤と共に昔の中山道では時めいた宿場だつたに相違ない其處なので一軒位ゐはあるであらうとあてにして來た宿屋がまるで無かつた。たゞ一軒、蔦屋といつたと思ふ、木賃宿があつた。爺さんと婆さんとに一度斷られたのを無理に賴んで泊めて貰ふことになつた。

酒を取つて來て貰つたが、酸くて飲めない。麥酒を賴んだが、そんな物はないといつて取合はない。せめて葡萄酒でもと今度は自分で探しに出たが、全く何も無かつた。そして代りに燒酎を買つて來た。酸くないだけでも遙かにましであつた。夏も火を斷たぬ大圍爐裡で爺さんを相手に飲んで床に入つた。宿は爺婆だけで、他に誰もゐなかつた。息子も娘もあるのだが、土地には何もする用がないので皆出稼ぎに行つてゐるのださうだ。

ほんのとろ〳〵としたと思ふと眼が覺めた。湧く樣な蚤の襲擊である。一度眼が覺めたと共に、もうどうしても眠れない。時計を見るとまだ宵の口だ。私は戸をあけて、月の出た石ころ道を少し歩き下つてまた燒酎を買つて來た。も少し醉つて眠らうとしたのである。

翌朝、まだ月のあるうちにその宿を立つた。そして近道をとつて妙義山へ登らうとした。一度碓氷川を渡つて少しゆくと、また一つの谷を渡らねばならなかつた。其處には橋が流れ落ちてゐた。二三日前の豪雨のためで、まだ其時の水量が相當に殘つてゐた。殘りは爺さんの置土產にしようと思つて買つて來た燒酎をあらかた私は飲んでしまつてゐたので、其頃もまだ充分に醉つてゐた。普通ならばあと戻りをしたであらうが、その醉が躊躇なく私を裸體にした。そして頭に着物と荷物とを押し頂いて、しかも下駄を履いたまゝその谷川の瀨の中へ入つて行つた。

山谷の事で、流の中に隱れてゐる石は二抱へ三抱の荒石ばかり、少年の頃の經驗からその岩の頭を拾つて足を運ばうとしてゐたのであつたが、洪水の名殘は思ひのほかに激しく、僅か七八歩も踏

み出したと思ふと、忽ち私は途方に暮れた。そして自信力の失せると共に、何の事もなく私は横倒しに倒れてしまつた。倒れたまゝ三四間が間くる〳〵と押し流された。辛うじて瀬の中に表れた大きな岩と岩との間に躓み止つた時には、私の手には帶でくるんだ着物だけが僅かに殘つてゐた。書籍手帳其他を入れた手馴の旅行袋も、帽子も下駄も、面白い勢ひで二三間さきをくる〳〵と流れて行きつゝあつたが、もう手を出す勇氣は無かつた。見れば其處から七八間下を確氷川の本流が中高に白渦を卷きながら流れ下つてゐた。其處まで落ちてゆけば、荷物はおろか、自分自身の運命も大抵想像出來るのであつた。

這ひ上つた岩は自分の渡らうとした向う岸に近かつた。必死の覺悟で、再び流れの中に入つてゆくと、速く下駄をぬけばよかつたと悔まれたほど、意外に樂に渡り上ることが出來た。渡り上ると共に濡れた着物を乾かす智慧も出ず、長い間私は石の上につき坐つて息を入れた。そして束ねたまゝで雫の垂れるそれを着て——財布と時計とが袂の中から出て來たのが無闇に嬉しく勇氣をつけて呉れた——とぼ〳〵と歩き出した。

其處は妙義の麓の、かなり深い雜木林に當つてゐた。雨のあとの、それでなくとも濕つぽい林の中の道を濡れそぼたれた白地の浴衣で、下駄も履かず、びしや〳〵びしや〳〵歩いてゆく姿は、われながら年若いあはれな乞食を想はせられた。幸ひに人に逢はなかつたが、半道も歩いた頃、向うから大きな笠を提げて來る年寄の百姓を見た。初め彼は氣がつかなかつたが、行き違はうとする頃になつて私の姿を見て喫驚した。お互ひに默禮して行き違ひさまに見るとその笠には桃がいつぱい入れてあつた。何の氣なく行きすぎたが、私は急にその爺さんに聲がかけて見度くなつた。そして、其儘振返つて見ると、爺さんも丁度こちらを見ようとした所であつた。

『ア、ちよつと、お爺さん！』

爺さんは明らかにびくりとした。が、流石に私の聲を聞いて走り出すまでにはならなかつた。返事はしなかつたが、立止つて不安さうに振返つた。

『その桃を二つ三つ賣つて呉れませんか』

さう云ひながら、二三歩私は歩き戻つた。

『桃かね』

爺さんもさう云つて、無理に笑はうとした。

『今朝、宿屋で御飯を待たずに出て來たのでおなかがすいて困るのです。それに、其處の谷で斯んなになつて……』

袂をあげて見ると、まだしと〳〵と濡れてゐた。

『ハ、ア、さうかね、其處の谷でかね……』

爺さんの聲も漸く落ちついて來た。そして私が財布をとり出すと、

『二つ三つなら錢はいらねェ、たゞ上げますべえよ』

と齒の無い、皺深い顏で、ニコ〳〵と笑ひながら片手で桃を掴んで呉れた。

『いゝえ、それぢア困る……、ではこれだけ取つといて下さいな』

つまみ出した十錢銀貨もまだ露つぽかつた。

『うゝん、そんなにヤいらねェ、おつりもねェ』

爺さんは惶てゝ手を振つた。

『ではもう二つこれを下さい。』

と手づから私は桃を取つた。そして、何といふことなく爺さんを其處に呼びとめておく事が氣の毒になつたので、

『どうも難有う、お蔭で元氣が出ましたよ、左樣なら！』

と帽子のない頭を下げながら、急ぎ足に歩み出した。爺さんはなほ暫く立つてゐたが、やがてこれも、あちら向きにしよぼ〳〵と歩き出した。

私は惶てゝ一つの桃に齒をあてた。大口に嚙み缺かれた桃の頭は、實に滴る樣な鮮かな紅ゐの色をしてゐた。全く打ち續けてその汁を啜る取る樣に私は口をつけた。

一つ二つと夢中に嚙んで、ひよつと上を見るといつか疎らになつた林の眞上いつぱいに例の妙義の岩山が眞黑い樣に聳え立つてゐるのが見えた。

春の二三日

くもり日は頭重かるわが癖のけふも出で來て歩む

松原

三月××日

千本松原を詠んだなかの一首に斯んな歌があつたが、けふもまたその頭の重い曇り日であつた。朝からどんよりと曇つてゐた。

非常に急ぎの歌の選をやつてゐたが一向に氣が乘らない。五首見ては一ぷく、十首見ては一服と煙草ばかり吸つていつの間にか書近くなつてゐたところへ、近所の服部さんの宅から使が來た。庭の紅梅が過ぎかけたから見にいらつしやい、一緒にお晝をたべませういふ事である。赤インキのペンをさし置いて早速立ち上つた。そして使の人の歸つて行くうしろからてく〳〵と歩いて行つた。

紅梅はまだ眞盛りであつた。かなりの老木で、根もとから直ぐこまぐ〳〵と八方に枝を張り渡した、丈の餘り高くない木にいちめんに咲いてゐる。花もまた枝と同じくこまぐ〳〵と小さく瘦く咲いてゐるのである。花の向うには低い杉の生垣、生垣を越しては直ぐ香貫山の麓が見える。全山ことごとく小松原であるこの山も麓の方には稀に櫟林や萱の原がある。紅梅を見越しての麓の原はちやうどその櫟の林となつてゐた。まだ落ちやらぬその木の枯葉の背景が、その紅ゐの花をひどく靜かなものに見せてゐる樣であつた。紅梅のめぐりには尙ほ四五本の白梅が半ば散りかけて立ち並んでゐる。

お晝は目下伊豫の松山から來訪中で、近く此家の主人と結婚さるべき櫻井八重子嬢の手料理であつた。障子をあけ放つには少々寒さのきびし過ぎる今日の日和であるだけに温い酒の味は一層であつた。少し健康を害して暫く東京より歸鄉中である主人公にはお構ひなく、私は殆んど手酌で手早く杯を重ねて行つた。

その書齋には犬養木堂翁の額がかゝつてゐた。國民黨宣傳部理事である人の書齋に翁の筆のあるのは當然として、またその筆致のよしあしは別として、私にはその文句が目についた。たゞ大きく『不惑不懼不憂』と書いてある。その靜かな境地を思ひ浮べながらその事を云ふと、イヤ、それはこれを書いた當人と思ひ合せるとなほ一層この言葉が生きて來るといふことであつた。さう答へなから服部さんは、

『さうだ、古奈の犬養さんの別莊に或る軸物の箱書が頼んであるんだが、食事が濟んだらそれを受取りかたゞ〳〵古奈まで遊びに行つて見ませんか、そして其處の温泉に一つ入つて來ませう、犬養さんは來てゐませんが兎に角もう出來てる筈です、行つて見ませう、八重さんも行きませんか。』

と云ひ出した。

一先づ沼津の町へ出て、其處から自動車で古奈に向つた。里程三四里、程なく二升庵の門前に着いた。小さな岡の根に、高田早苗、鈴木梅四郎兩氏の別莊と相並んで名前は前から知つてゐたこの二升庵は在るのであつた。まだ附近の開けなかつた昔、米二升さへ持つて來れば誰でも泊めるといふのでこの珍らしい庵の名はつけられたものだそうだ。

箱書は出來てゐた。蓋には漢文で、由來箱書などは卑俗な茶人共の爲す業である、それを自他ともに新人を以つて許す服部純雄君が求めてくるとは以つての外の話である、大隈侯病篤しと稱へられ余もまた病褥にある日、といふ風な事が細字で認められてあつた。

甚だ失禮だとは思ひながら、その留守宅の湯殿に滾々と湧いてゐる温泉に身を浸した。彼の老政治家が何か事を案ずる際には常に人目を避けてこの別莊に籠ると云ふ。必ずこの湯槽の縁の石に頭を凭せて靜かに思ひを纒めらるゝに相違ないなどと思ふと、同じ温泉でもこの清らかな湯がよそならぬものゝ樣に思ひなされて、たゞ靜かにたゞつゝましく浸つてゐた。

やがて待たせてあつた車に乘つて、夕闇の降りて來た下田街道を徐ろに走らせた。道は田圃の中にあつて、直く且つ平かである。湯上りのつかれごころで三人とも多く無言のまゝの車の窓に、近く右手に赤々とうち廣がつた野火のほのほが見渡された。箱根山の枯草を燒くものである。

四月×日

東海道五十三次のうち丸子の宿はとろゝの名物と云ふことをば古い本でも見、現在でも作つてゐることを人から聞いてゐた。そのとろゝ汁が私は大の好物である。あまり暇くならぬうち一度是非行つて見たく、ついでに其處の宇津の谷峠をも越えて見たいと思ふうちにいつか桃の花が咲いて來た。ぐず〳〵してはゐられないと急に思ひ立つて、其の頃私の宅に來て勉强してゐた村松道彌君を連れ朝まだ月のある頃に沼津の町を過ぎて千本松原に入り込んだ。松原の中に通じてゐる甲州街道をずつと富士川まで歩いて行かうといふのである。どうしてこの松原の中の道を甲州街道と云ふか、或はまだ東海道の出來ぬ以前に此處にこの道があり、末は駿州から富士川にでも沿ふて甲州の方へ入つてゐたものかも知れぬ。兎に角現在の汽車道は昔の東海道に沿ひ、その東海道は沼津から富士川の岸に到るまで三四里の間この千本松原に沿うてゐる。そしてその松原の中に細々として甲州街道と稱へらるゝこの小徑がついてゐるのだ。街道とは名ばかりで、ほんの漁師共の通ふにすぎぬものではあるが、五町十町と私はこの松原の蔭を歩くのが好きであつた。そしていつかこの小徑のは

づれまで、云ひかへれば富士川の川口で盡きてゐる松原のはづれまでぽつ〳〵と歩いて見度いものと思つてゐた。名物の名殘を喰ひに今は亡んだ宿場まで出かけるならいつそ汽車をよして歩くがよく、歩くならば月並な東海道を歩くよりこの人知れぬ驛道を行つた方がよからうと云ふ兩人の間の相談からではあつたが、要は靜かな海岸沿ひの長い〳〵松原を歩き盡したいといふにあつた。

松原に入つた頃はまだ薄暗らかつた。松はたゞしつとりと先から先に立ち並んで、ツイ左手近く響いてゐる浪の音もあるかなしかの風ぎである。やがて空の明るむにつれて、高高と枝を張つてゐる松の梢を透して眞白な富士が見えて來た。そして同じくその右手の松の根がたに低く續いた紅ゐの色が見え出した。今をさかりに咲き揃つた桃の畑である。松原の幅は百間から二百間、その間にほゞ中央にではあるが、時には右寄り左寄に我等の歩く徑が通じてゐる。その徑の都合で深い木立を透して花を望むことにもなり、時には松原から出て眞向ひにこの美しい畑と相向ふことにもなる。畑の幅もおほよそ二三町のもので、それが續きも續いたり、松原の見ゆる限りは同じ樣にこの燃え立つた花の畑が東西かけてうち續いてゐるのである。一體に靜浦沼津から原にかけ、桃の名所と聞いてゐたが、斯うまであらうとは思はなかつた。花がなければ桑の畑も同じに見ゆるので、今まで氣がつかなかつたものであらう。何しろ、この松をとほしての桃の花見は今日の旅に思ひがけぬ附

錄なので、兩人とも早や何とならぬ旅めいた浮かれ心地になつて松原の中の徑を急いだ。

が、何しろ濱の松原である。歩いてゐる小徑はすべて濱から續いた石ころ道で、しかも砂氣のない拳大の小石ばかりが揃つてゐる。初めは快く歩き出したものゝ、ものゝ一里も歩いて來ると早や草鞋の裏が痛くなつた。『濱へ出て見ようか』と云ひながら松原を左に拔けて、白々とした荒濱に出て見ると駿河灣の輝きが眼の前にあつた。麗かな日ざしに照らされた海面からは靄とも霞ともつかぬものがいちめんに片靡きに湧き立つて、左手向うに突き出てゐる伊豆半島の根にかけうつすらと棚引いてゐる。それと向ひ合ふ筈の御前崎のあたりは全く霞み果てゝ影も見えず、僅かに手近の三保の松原が波の光の上に薄墨色に浮んで見える。ちら〳〵と寄する小波も全くこんな大海の岸であるとは思はれぬ風ぎである。見てゐる瞳は自づと瞑ざされ吐く呼吸は自づと長くいつか長々と身體をも横たへたい氣持となる。

また松原の中の小徑に歸つて歩き出したが、桃の花は相變らず其處に美しく見えてゐるが、兎に角に痛い足の裏である。なまなかにいま投げ出して休んだゝけ、一層に痛みを感じ出して來た。終に我を折つて桃畑の向うに町の家並の見え出したを幸ひにそちらへ向けて松原から出てしまつた。そしてその町の取つ着きから平坦を極めた廣やかな大道を伸び伸びとして歩き出した。即ち其處は

五十三次のうち沼津の次ぎに當る原の宿であつたのだ。

一筋町の細長い其處を離れると、いよ〳〵廣重模様の松並木が道の兩側に起つて來た。並木を通して右手眞上には富士、左には今までと反對に桃畑を前にした松原が見えてゐる。道のよさに歩みも早く、いつか鈴川近くなつたが、おほかた田子の浦はこの邊に當ると聞いてゐたので道を左に折れ、この邊よほど木立の疎くなつた松原を拔けて濱へ出て見た。濱の砂は先程休んだあたりの小石原と違つてこまかい眞砂であつた。そして濱はずつと廣くなつてつぎ〳〵に低い砂丘が起伏して居る。松原つゞきの小松が極めてとび〳〵にそれらの砂丘に散らばり、所によつてはそれとも見えぬ瘦麥が矢張り畝をなして植ゑられてゐた。一帶の感じが何となく荒寥としてゐて、田子の浦といふ物優しい名の聯想とは全く異つてゐるのを感じた。振向くと見馴れた富士の姿も沼津あたりとは違つて距離も近く高さも高く仰がるゝのであつた。傍へに富士川があり、前にこの山を仰ぎ背後に駿河灣を置いた眺めは太古にあつては一層雄大なものであつたに相違ないと思はれた。

思はず長い時間を其處で費し、また街道に出て暫く行くと道はやゝに海岸を離れて愛鷹山の根に向ふ形になる。そしてその向うに吉原宿の町が見えてゐる。なるほど此處では廣重の繪の左富士を想はす角度にその山を仰ぐのであつた。然し、我等は吉原には行かず、鈴川驛から汽車で富士川を

渡り、蒲原の宿で降りて、またてく〳〵と歩き出した。

蒲原から由比にかけては道は直ちに海に沿うた山の根をゆくのであつた。海岸には土地名物の櫻海老がうす赤く乾し並べられ、山には一帶に植え込まれた蜜柑畑の間に、とび〳〵に山櫻が咲いてゐた。由比を出拔くる時、惜しい事に薩陀峠の舊道を越すのを忘れて、汽車沿ひの磯端を歩いてしまつた。そして汽車の隧道のあるあたりでは、浪打際に降りて手を洗つたり貝を探したりして戯れた。

今日は興津泊りの豫定であつたが、先づ其處の園藝試驗場に知人を訪ねてみると伊豆の方へ旅行して留守だといふので、まだ日は高しいつそ靜岡まで伸して置かうと急ぎ足に宿はづれの清見寺に詣で、早速汽車に乘つてしまつた。日は高くとも、もう脚の自由はきかなくなつてゐたのだ。

靜岡驛を出ると細かい雨が降つてゐた。思ひがけぬ事であつたが、惡い氣持はしなかつた。驛前通りの宿屋によつて、湯上りの勞れた脚を投げ出しながらちび〳〵酒を呑んでゐると、雨はいよいよ本降りになつて來た。丁度宿屋の前に何やらの神社があつて四五本の櫻がその庭に咲き綻び、しよぼ〳〵と雨に濡れ、まだうす明るい夕方の灯に映つてゐる眺めなど、何だか久しぶりに旅に出てゐる樣な氣持を誘つて自づと銚子の數を增して行つた。

遲い夕飯を終つた頃、幸ひ雨間となつてゐたので出て七間町あたりを彷徨ひ、カフエパウリスタといふ名を見附けて其處へ寄つた。ひどく醉つた末、明朝訪ねるつもりであつた法月俊郎君方に電話をかけると、彼は驚いて弟浩二君と共に其處へやつて來た。そして更らに一杯飲み直し、十二時すぎて宿に歸つた。

朝眠が覺めるとばしや〳〵といふ雨の音である。どうしやうかと、枕のまゝで永い間村松君と今日の事やら無駄話をしてゐたが、幾らかづゝ明るんで來る空を頼みに、豫定通りに出懸けることにきめた。法月君方に立寄つたが、濡草鞋を解くがめんどうさに店先に立話をして別れて行かうとすると、それでは私も丸子まで出かけませう、幸ひその側に吐月峯がありますから其處へも寄つて見ませうといふ。吐月峯とは可笑しな名だと思ひながら問ひかへすとさういふ名のお寺で、もとその寺から例の灰吹を作り始めたとかいふことだといふ。

びしや〳〵と三人雨の中を歩き出したが、明るむどころかます〳〵ひどい降りである。我等はどうせ濡れる覺悟の尻端折だが、足駄ばき長裾の法月君にはいかにも氣の毒であつた。名物の安倍川餅屋が安倍川橋の袂にあつて、大きな老木の柳のみどりがその門におぼらかにそよいでゐた。法月君にすゝめられたが、先づ〳〵先きの芋汁を樂しみに餅だけは割愛する事にして橋にかゝつた。隨分長い橋である。横飛沫の傘の蔭から見る川上の方にこれもこの邊の名所の木枯の森といふのが川原の中に見えた。

歩くこと二里ばかり、丸子の宿は低い藁屋の散在してゐる樣な古驛であつた。宿はづれの小川の橋際に今は唯だ一軒だけで作つてゐるといふとろゝ汁屋にとろゝを註文しておいて其處から右折、四五町して吐月峯に着いた。先づ小さな門を捲うてゐる深々しい篁が眼についた。そしてその篁の蔭には一二本づゝの椿と梅とが散り殘つて、それに幾羽とない繡眼兒が啼き群れてゐた。門を入ると、泉水から續いた裏の山に山櫻の大きいのが二本ばかり、二分三分咲きかけてゐるのが見えた。花も苦もいゝが、ことに雨に濡れていよ〳〵柔らかな薄紅色にそよいでゐる若葉が何ともいへず美しかつた。法月君と知合らしい住職は留守であつたが、通された部屋で暫く休んだ。寺とは云つても謂はゞ庵で、造りも小さく、年代も餘程古寂びてゐた。土地の有志たちは目下この由緒ある建物のすたれるのを惜んでとり〴〵に修繕費募集中であるさうだ。

庭も同じく小さなものであるが如何にも靜かに整つた寂びたものであつた。一帶の造りが京都の銀閣寺の庭に似てゐるのでその事を法月君に話すと、この庵を結んだ人は足利義政に愛せられた人で、現に庭先を圍んでゐる篁の竹などもわざ〳〵嵯峨から持つて來て植ゑたものなのださうだ。か

すかに池に音を立てゝ降り頻つてゐる雨を、またその雨の中に折々忍び音に啼いてゐる小鳥を聽いてゐると、もうとても宇津の谷峠を越して行く氣分がなくなつてしまつた。

先のとろゝ汁屋に歸つてその名物を味つた。とろゝ屋と云へばよく聞えるが實際は一繕飯屋が好みに應じて作るとろゝ汁なのである。それにもう季も過ぎてゐるし、確かに名物に何とやらの折紙ではあつたが、ツイ窓際近く迫つてゐる山に白雲の去來するのを眺めて一杯二杯と重ねてゆく地酒の味と共に矢張り拙いと出ひ切ることの出來ぬものではあつた。

青年僧と叡山の老爺

一週間か十日ほどの豫定で出かけた旅行から丁度十七日目に歸つて來た。さうして直ぐ毎月自分の出してゐる歌の雜誌の編輯、他の二三雜誌の新年號への原稿書き、溜りに溜つてゐる數種新聞投書歌の選評、さうした爲事にとりかゝらねばならなかつた。晝だけで足らず、夜も毎晩半徹夜の忙しさが續いた、それに永く留守したあとのことで、訪問客は多し、やむなく玄關に面會御猶豫の貼紙をする騒ぎであつた。

或日の正午すぎ、足に怪我をして學校を休んでゐる長男とその妹の六つになるのとがどや〳〵と私の書齋にやつて來た。來る事をも禁じてある際なので私は險しい顏をして二人を見た。

『だつてお玄關に誰もゐないんだもの、……お客さんが來たよ、坊さんだよ、是非先生にお目にかかりたいつて。』

坊さんといふのが子供たちには興味を惹いたらしい。物貰ひかなんどのきたない僧服の老人を想像しながら私は玄關に出て行つた、一言で斷つてやらう積りで。

若い、上品な僧侶が其處に立つてゐた。あてが外れたが、それでもこちらも立つたまゝ、

『どういふ御用ですか』

と問うた。

返事はよく聞き取れなかつた。やりかけてゐた爲事に充分氣を腐らしてゐた矢先なので、

『え？』

と、やや聲高に私は問ひ返した。

今度もよくは分らなかつたが、とにかく一身上の事で是非お願ひしたい事があつて京都からやつて來た、といふ事だけは分つた。見ればその額には汗がしつとりと浸み出てゐる。これだけ云ふのも一生懸命だといふ風である。何となく私は自分の今迄の態度を耻ぢながら初めて平常の聲になつて、

『どうぞお上り下さい』

と座敷に招じた。

京都に在る禪宗某派の學院の生徒で、鄕里は中國の、相當の寺の息子であるらしかつた。幼い時から寺が嫌ひで、大きくなるに從つていよ〳〵その形式一方僞禮一點張でやつてゆく僧侶生活が眼に餘つて來た。學校とてもそれで、父に反對しかねて今まで四年間漸く我慢をして來たものゝ、もうどうしても耐へかねて昨夜學院の寄宿舍を拔けて來た。どうかこれから自分自身の自由な生活が營み度い。それには生來の好きである文學で身を立て度く、中にも歌は子供の時分から何彼と親し

んでゐたもので、これを機として精一杯の勉强がしてみたい。誠に突然であるけれど私を此處に置いて、庭の掃除でもさせて呉れ、といふのであつた。

折々斯うした申込をば受けるので別にそれに動かされはしなかつたが、その云ふ所が眞面目で、そしてよほどの決心をしてゐるらしいのを感ぜぬわけにはゆかなかつた。

『君には兄弟がありますか』

『いゝえ、私一人なのです』

『學校はいつ卒業です』

『來年です』

『歌をばいつから作つてゐました』

『いつからと云ふ事もありませんが、これから一生懸命にやる積りです』

といふ風の問答を交はしながら、どうかしてこの昂奮した、善良な、そしていつこくさうな青年の思ひ立ちを翻へさせやうと私は努めた。別に歌に對して特別の憧憬や信念があるわけでなく、唯だ一種の現狀破壞が目的であるらしいこの思ひ立ちを矢張り無謀なものと見るほかはなかつたのだ。

然し、青年はなか〳〵頑固であつた。永い間考へ拔いて斯うして飛び出して來た以上、どうしても目的をば貫きます、先生が許して下さらねばこれから東京へなり何處へなり行きます、と云ひ張つてゐる。

私は彼を散歩に誘うた。初めはほんのかりそめごとにしか考へなかつたのだが、あまりに彼の本氣なのを見ると次第にこちらも本氣になつて來た。そしていろ〳〵自宅の事情を聞き、彼の性質をも見てゐると、どうしても彼を此處で引き止めねばならぬ氣になつて來た。氣持を變へるため、散歩をしながら若し機會があつたら徐ろにそれを說かうと、出澁ぶるのを無理に連れだつて、わざと遠く千本濱の方へ出かけて行つた。

其處に行くのは私自身實に久しぶりであつた。松原の中に入つてゆくと、もう秋といふより冬に近い靜けさがその小松老松の間に漂うてゐた。海も珍しく風いでゐた。入江を越えた向うには伊豆が豐かに横はり、炭燒らしい煙が二三ケ所にも其處の山から立昇つてゐるのが見えた。

砂のこまかな波打際に坐つて、永い間、京都のこと、其處の古い寺々のこと、歌のこと、地震のこと、それとはなしにまた彼の一身のことなどを話してゐるうちに、いつか上げ潮に變つたと見えて小波の飛沫が我等の爪先を濡らす樣になつた。では、そろ〳〵歸りませうか、と立ち上る拍子に

彼は叫んだ。

『ア、見えます〳〵、いいですねェ』

と。先刻からまちあぐんでゐた富士が、漸くいま雲から半身を表はしたのだ。昨夜の時雨で、山はもう完全にまつ白になつてゐた。

『ほんとうにいゝ山ですねェ、何と云つたらいゝでせう』

私はそれを聞きながら思はず微笑した。漸く彼が全てを忘れて、青年らしい快活な聲を出すのを聞いたからである。

歸つて來ると、子供たちが四人、門のところに遊んでゐた。そして、

『ヤ、歸つて來た〳〵』

と云ひながら飛びついて來た、一人は私に、一人はその若い坊さんに、といふ風に。

『なぜ斯んな羽織を着てんの？』

客に馴れてゐる彼等は、いつかもうその人に抱かれながらその墨染の法衣の紐を引つ張り、斯うした質問を出して若い禪宗の坊さんを笑はすほどになつてゐた。

その翌朝であつた。日のあたつた縁側でいま受取つた郵便物の區分をしてゐると、中から一つの

細長い包が出て來た。そしてその差出人を見ると、私は思はず若い坊さんを呼びかけた。

『これは面白い、昨日君に話した比叡山の茶店の老爺から何か來ましたよ、また短冊かな』

さう云ひながらなほよく見ると、表は四年も昔に引越して來た東京の舊住所宛になつてゐる。スルト、こちらに越して來てから一度の音信もしなかつたわけである。中から出たのは一枚の短冊と一本の扇子であつた。

短冊には固苦しい昔流の字で、

『うき沈み登り下りのみち行を越していまては人のゆくすゑ、粟田』

と書いてある。粟田とは彼の苗字である。變だなア、といひながら一方の扇子の方を取つて見ると何やら書いた紙で包まれてある。紙には矢張粟田爺さんの手らしく、

『失禮ながら呈上仕候』

とある。中を開いてみると、

『粟田翁の金婚式を祝ひて』

といふ前書きで、

『茶の伴や妹背いそちの雪月花、佳鳴』

と認めてある。

『ホホオ！』

私は驚いた。

『あのお爺さん、金婚式をやつたのかね』

『へ、ヱ、もうそんなお爺さんですか、でもねヱ、よく忘れずに斯うして送つて呉れますわネヱ』

いつか側に來てゐた妻も斯う云つた。

さうすると短冊の、『うき沈み……』も意味が解つて來る。念のために裏をかへしてみると、『大正十二年』と大きく眞中に書いて、下に二つに割つて『七十六歳、六十五歳』と並べて書いてあるのであつた。

大正七年の初夏であつた。私は京都に遊んで、比叡山に登つてすぐ降りて來るといふでなく、暫く滯在したい希望で、山上の朝夕をいろいろ心に描きながら登つて行つたのであつた。登りついたのは夕方で、人に教はつてゐた通り、大勢の人を泊めて呉れるといふ宿院といふに行き、取次に出た老婆に滯在のことを賴んだ。ところが老婆の答は意外であつた。今はたゞ一泊の人を泊めてあげるだけで、滯在の人は一切泊めることはならぬ規則によつてゐるのぢや、といふのだ。イヤ、今ま

でよく滯在させて貰つたといふ話を聞き、その積りで登つて來たので是非さうして貰ひたい、と賴むと、今までは今までや、ならんというたらならんのぢや、といふ風で、まご〳〵するとその夜の泊りも許されまじい有樣となつた。止むなく、私はどうか今夜だけ、と賴んで漸く部屋に通された。老婆がその通り、給仕に出た小僧も亦た不愉快千萬な奴で、遙々樂しんで來たこの古めかしい山上の幻の影は埒もなくくづれてしまつた。

で、翌朝夜が明けるのを待つて病院を出た。すぐ下山しようとしたが、斯んな風では恐らく二度とこの山に登る氣にもなれまい、來たを幸ひ、普通一遍の見物だけでもやつて行かうと踵を返して、根本中堂からずつと奥の方へ登つて行つた。當山の開祖傳敎大師の遺骨を納めてあるといふ淨土院へゆく路と四明ヶ嶽へ行く路との分れ目の所に一軒の茶店のあるのが眼についた。その時のことを書いておいたものがあるのでその文章を此處に引いて見よう。

ちやうど通りかかつた徑が峠みた樣になつてゐる處に一軒の小さな茶店があつた。動きやまぬ霧はその古びた軒にも流れてゐて、窺いてみれば薄暗い小屋の中で一人の老爺が頻りに火を焚いてゐる。その赤い火の色がいかにも可懷しく、ふら〳〵と私は立ち寄つた。思がけぬ時刻の客に驚いて老爺は小屋の奥から出て來た。髪も頰鬚も半分白くなつた頑丈な大男で、一口二口話し合つ

てゐるうちにいかにも人のいい老爺であることを私は感じた。そして云ふともなく昨夜からの愚痴を云つて、何處か爺さんの知つてる寺で、五六日泊めて呉れる様な所はあるまいか、と聞いてみた。暫く考へてゐたが、あります、一つ行つてきいて見ませう、だが今起きたばかりで、それに御覧のとほり私一人しかゐないのでこれからすぐ出かけるといふわけにはゆかぬ、追つ附け娘たちが麓から登つて來るからそしたら直ぐ行つて聞合せませう、まア旦那はそれまで其處らに御參詣をなさつてゐたらいいだらうといふ思ひがけない深切な話である。私は喜んだ。それが出來たらどれだけ仕合せだか分らない、是非一つ骨折つて呉れる様にと頼み込んで、サテ改めて小屋の中を見廻すと駄菓子に夏蜜柑煙草などが一通り店さきに並べてあつて、奥には土間の側に二疊か三疊ほどの疊が敷いてあるばかりだ。お爺さんはいつも一人きり此處にゐるのか、ときくと、夜は年中一人だが、晝になると麓から女房と娘とが登つて來る、と云ひながら、ほんの隱居爲事に斯んなことをして居るが馴れて見れば結局この方が氣樂でいいと笑つてゐる。小屋のうしろは直ぐ深い大きな溪で、いつの間にか此處らに薄らいだ霧がその溪いつぱいに密雲となつて眞白に流れ込んでゐる。空にもいくらか青いところが見えて來た。では一廻りして來るから何卒お頼みすると云ひおいて私は茶店を出た。

その頼みは叶つたのであつた。叶つて私の泊る事になつた寺は殆んど廢寺にちかい荒寺で、住職もあるにはあるのだが麓の寺とかけ持ちで殆んどこちらに登つて來ることもなく、平常はただ年寄つた寺男が一人居るだけであつた。それだけに靜寂無上、實に好ましい十日ばかりを私は深い木立の中の荒寺で過すことが出來た。

その寺男の爺といふのがひどく酒ずきで、家倉地面から女房子供まで酒に代へてしまひ、今では木像の朽ちたが如くになつてその古寺に坐つてゐるのであつた。耳も殆んど聾であつた。が、同じ酒ずきの私にはいい相手であつた。毎日酒の飲める様になつた老爺の喜びはまた格別であつた。旦那が見えてからお前すつかり氣が若くなつたぢアないか、と峠茶屋の爺やにひやかされるほど、彼はいそ〳〵となつて來た。峠茶屋の爺やもまたそれが嫌ひでなかつた。

私の滯在の日が盡きて明日はいよ〳〵下山しなくてはならぬといふ夜、私は峠茶屋の爺やをも招いてお寺の古びた大きな座敷で最後の盃を交し合つた。また前の文章の續きを此處に引かう。

寺の爺さんは私の出した幾らでもない金を持つて朝から麓に降りて、實に克明にいろ〳〵な食物を買つて來た。酒も常より多くとりよせ、その夜は私も大いに醉ふ積りで、サテ三人して圍爐裡を圍んでゆつくりと飲み始めた。が、矢張り爺さんたちの方が先に醉つて、私は空しく二人の醉

ぶりを見て居る樣なことになつた。そして口も利けなくなつた二人の老爺が、よれつもつれつして醉つてゐるのを見てゐると、樂しいとも悲しいとも知れぬ感じが身に湧いて、私はたび〳〵泣笑ひをしながら調子を合せてゐた。やがて一人は全く醉ひつぶれ、一人は剛情にも是非茶屋まで歸るといふのだが、脚がきかぬので私はそれを肩にして送つて行つた。さうして愈々別れる時、もうこれで旦那とも一生のお別れだらうが、と云はれてたうとう私も涙を落してしまつた。

その峠茶屋の爺さんが卽ち今度金婚式を擧げた栗田翁であるのだ。その時、山から京都に降りると共處の友だちが寄つて私のために宴會を催して呉れた。その席上で私は山の二人の老爺のことを話した。するとその中の二三人が其後山に登つてわざ〳〵茶屋に寄り、斯く〳〵であつたさうだナといふ話をした。へええ、さういふ人であつたのかと云つて爺さんひどく驚いたといふことをその人から書いてよこした。それから程なく、古い短冊帖に添へて、これは昔から自分の家に傳はつて居るものであるが、中に眼星しい人の書いたものが入つてゐはせぬか、どうか見て呉れと云つてよこした。これが栗田淺吉といふ名を知つた初めであつた。

短冊帖には三十枚も貼つてあつたが、私などの知つてゐる名はその中にはなかつた。斯ういふことに詳しい友だちにも持つて行つて見て貰つたが、當時の公卿か何かだらうが名の殘つてゐる人はゐないといふことであつたのでその旨を返事し、なほ自分自身のものを一二枚添へてやつたのであつた。それらのことを、昨日千本濱で京都附近の話の出た時に、その若い坊さんにしたのであつた。其處へこの短冊と扇子とが送つて來たのだ。爺さん、まだ頑丈であの山の上の一軒家に寢起きしてゐるのであるかとおもふと、いかにもなつかしい思ひが胸に上つて來た。すると、あの寺男の爺さんはどうしてゐるであらう。

さういふことを考へてゐると、若い坊さんは急に改つて兩手をついた。そして、昨日からのお話で、今度の自分の行爲が餘りに無理であることが解つた、自分の一生の志願を全然やめ樣とは思はぬが、とにかく今の學校だけは卒業して年寄つた父をも安心させます、では早速ですがこれから直ぐお暇します、といふ。さうすると私も妻も、わづか一日のうちに親しくなつてしまつた幼い子供たちも、何だか名殘が惜しまれて、もう二三日遊んで行つたらどうかと、勸めたけれども、學校の方がありますので、と云つて立ち上つた。家內中して門まで送つて出た。帽子もない法衣のうしろ姿を見送りながら私は大きな聲で呼びかけた。

『歸つたら早速比叡に登つて見給へ、さうしてお爺さんに逢つてよろしく云つて下さい』

東京の郊外を想ふ

日向の山奥から出て來て先づ私の下宿したのは麹町の三番町であつた。其處の下宿屋から早稲田の學校まで、誰かに最初教へて貰つた一すぢ道を眞直ぐに往復するほか、一寸した廻り道をもようせずに通つてゐたのが二三ヶ月以上も續いた。散歩をすると云へば靖國神社の境内から九段坂を降りて神田の表神保町の本屋を見て歩く、僅かにそんなことであつた。そのほかに遠出をするといふのは田舍者にとつて如何にも億劫な、恐しいことであつたのだ。

それが、或日どうしたことであつたか、大方受持教授の休講の時間でゝもあつたらうとおもふ、ふら〳〵と學校を出て穴八幡の境内に入り、更らにその森つゞきの木の下道（あとでその森が戸山學校であることを知つた）をくゞつて出外れて見て驚いた。おもひもかけぬ大きな平野が其處に開けてゐたのである。

まつたくその時の驚きはいま考へても可笑しい樣である。何しろ山と山との間の峽谷に生れて、今まで曾てさうした大きな野原をば見た事がなかつたのである。しかもそれが二三ヶ月以上もぐつしりとかぢりついて離れなかつた自分の學校のツィうしろから開けてゐようとは、夢にも思ひがけぬところであつたからである。

驚きのあまり、授業の事をも忘れて私は恐る〳〵なほその小徑を野原の方へ歩いて行つた。そして行き着いたのが戸山が原の欅林であつたのだ。驚きはいつか一種の哀愁に變つて、足音をぬすむ樣にして私は其處に群立してゐる木から木の間の下草を踏み分けて歩き廻つたものであつた。明治三十七年初夏のことであつた。

さうした大發見をした二三日後、私は直ぐ三番町を引上げて、今は早稲田高等學院が建つてゐる穴八幡下に在つた下宿に移つて來た。そして毎日々々私の戸山ヶ原散歩は始まつたのであつた。

斯ういふ記憶を呼び出しながら現在の戸山ヶ原を見ると如何にもうら寂しい。その頃は四方野つゞきの、ほんとうの野原の一部であつた。今は工場や住宅に圍まれて野原といふよりたゞの空地といふに過ぎぬ場所になつてしまつた。自づと人出が多いので、下草は踏み荒され、堆かゝつた落葉なども今は殆んど見るよしがない。

代々木の原は戸山ヶ原より更らに粗野な感じを持つてゐた。が、今ではたゞ土埃を捲きあぐる赭土原となり終つてゐる。僅かにその傍の明治神宮の境内に幾分の面影を忍ぶことが出來やうか。

大正二年三年の頃、小石川の大塚窪町に住んでゐた。其處の近くには護國寺の森があつた。寺と皇族墓地との境の窪みが小さな池とも沼ともつかぬものになつてゐて、其處に初夏ならば藤の花が

咲いて垂れてゐた。これは恐らく今でもあるだらう。其處を出て少し行くと東京市經營の廣い養樹園があつた。公園とか並木とかに植うべき樹木を育つる場所である。殆んど全てが落葉樹であつたゝめ、若芽のころ、落葉のころ、實に柔かな親しい眺めを持つてゐた。園の中に二三條の路があつて自由に通れることになつてゐた。今は全部これが石も土も眞新しい墓地の原と變つてゐる。

それを出外れると鬼子母神の森、これも入口の例の大欅の並木から舊墓地内の杉の落葉など、なつかしいものであつた。私の學生時代のころ、この森に來て杜鵑を聞いたこともあつた。(書き落したが前の皇族墓地では春のころよく雉子が鳴いた、これは恐らく今でも聽く事が出來るだらう。)

其處までぶら〳〵歩いて來ると、若し空でもよく晴れてゐたならば、いよ〳〵自宅に歸るのがいやになつて、もう少し歩かうといふことになる。そして目白橋を渡つて、左折、近衞公のお邸に行き當つて右折、一二丁もゆくととろ〳〵とした下り坂になつた其處の窪地全體が落合遊園地といふものになつてゐた。それこそ誰も知らない遊園地で、窪地の四方をば柔かな雜木林がとり圍み、中には小さな池があり、池の中の築山には東屋なども出來てゐた。

また、遊園地に入らずにその入口の處から左に折れてゆく下り坂があつた。其處もほそ長い窪地になつてゐて、いろ〳〵な雜木のなかに二三本の朴の木が立ち混り、夏の初めなどあの大きな白い花が葉がくれに匂つてゐたものである、降りきつた右手の所に、藤の古木があるので藤稻荷と呼ばれてゐる稻荷の祠があつた。(今でもこれはあるだらう。その境内も一寸した高みになつてゐた。其處から丘づたひに左は林右は畑といふ處を歩いたのもいゝ氣持であつた。そして此處の丘にはこの邊に珍らしい松の木立があつた。ほんのぱらぱらとした小さなものであつたが、東京の北から東にかけて郊外では全く珍らしいものであつた。今は稻荷の側からかけて幾軒かの大きな別莊になつてゐたとおもふ。

その丘を降りた所に氷川神社といふがあり、神社の境内に小さな茶店なども出てゐる事もあつた。もう少し歩かうとそのまゝ丘に添うて西北へゆく。

この邊は右に雜木の丘を、左に田圃や畑を見てゆく丘の根の路となつてゐるのだ。(一三年前からこの邊は向う十四五町がほどにずらりと立派な別莊が建ち並んでしまつた。)斯くして歩くことなほ二三十町ほどで中野の藥師さまに着くのであつた。藥師さま附近の一二軒の小料理屋なども鄙びていゝものであつた。

ぱら〳〵松の小さな木立を珍しいと書いたが、東京の西部の郊外にはそれが到る所に茂つてゐた。

即ち澁谷、目黒あたりから西へ入り込んだ丘陵の上にだ。

池袋雜司ヶ谷戸山ヶ原板橋附近の郊外は總じて平地で、其處に茂つてゐるものは櫟であつた。そしてその下草には芒が輝いてゐた。が、西の方の目黒附近では丘と窪地との交錯が極めて複雜に相交はり、其處に生へてゐるのは松であり、孟宗竹の藪であつた。無論楢櫟等武藏野らしい雜木もその間に立ち混つてはゐるけれど。

そしてこちらの郊外の背景をなすものは遠く西の空に浮んでゐる富士山の姿であることを忘れてはならぬ。何處からでも大抵は見えるこの山ではあるが、ことに此處等の赤松林の下蔭、幾つか連つた丘陵の一つのいたゞきから望み見る姿は、たゞの野原であるのより遙かに趣きが深いのだ。

さう書くと、ほんの赤土の崖の上である樣な東の郊外田端の高みから望む筑波のことをも書かねばならぬ。同じく西の郊外から見る野の末の秩父の連山、よく晴れゝば其處まで見る事の出來る甲州信州上州地かけての遠山の事などをも。

駿河灣一帶の風光

駿河灣一帶の風光といふとどうしても富士山がその焦點になる。久能山より仰ぐ富士、三保の松原龍華寺の富士、薩陀峠の富士、田子の浦の富士、千本松原の富士、牛臥から靜浦江の浦にかけての富士など說明を付けるのがいやになる位ゐもう一般的に聞えた名勝となつてゐる。名物にうまいものなしの反對で、以上とりぐ〳〵にみな見られる景色であるだけに却つて筆の執りにくいおもひもするのである。

なかで私の一番好きなのは田子の浦の富士である。田子の浦といふと何となく優美な——例へば和歌の浦とか須磨の浦とかいふ風の小綺麗な海濱を豫想しがちであるが、事實はひどく違ふ。意外な廣さ大きさを持つた砂丘の原であるのである。

九十九里が濱の荒涼は無いが、東海道沿ひの松並木から續いて、ばらばら松の丘となり、やがて草も木もない白茶けた砂丘となり、ところどころにうねりを起しながらおほらかな傾斜をなした大きな濱となつてゐるのである。濱の廣さは、ばら〳〵松の丘から浪打際まで六七町から十町あまりあるであらう。西はすぐ富士川の河口となり、東はずつと弓なりに四里近くも打ち續いた松原となつて居る。松原の東のはづれには狩野川の河口があり、河口に近く沼津の千本濱があるのである。

薩陀峠などを含む由比清原あたりの裏の山脈は富士川の西岸で盡き東の岸からは浮島が原の平野となつてずつと遠く箱根山脈の麓まで及んで居る。その平野の東寄りの奥に愛鷹山（あたかやま）がある。沼津あたりからはこの山が丁度富士の前に立ちはだかつて見えるのであるが、田子の浦から見るのだと、恰かも富士の裾野の東のはづれに寄つてしまつて、殆んど富士の全景に關係がなくなつてゐる。つまり廣大な裾野の西のはづれから東のはづれを前景にして次第に高く鋭く聳えて行つた富士山の全體が仰がるゝわけである。

富士山は何處から見ても正面した形で仰がるゝ山であるが、わけてもこの田子の浦からは近く大きく眞正面に仰がるゝ思ひがする。豐かに大地に根ざして中ぞら高く聳えて行つた白麗朗のこの山が恰も自分自身の頭上へ臨んでゐるかの樣な親しさで仰がるゝのである。何の技巧裝飾を加へぬ、創造そのまゝの富士山を見る崇嚴を覺ゆるのである。繪でなく彫刻でなく、また蒔繪や陶器の模樣でない山そのものの富士山を仰ぐことが出來るのである。

人影とても見當らぬ砂丘の廣みのまんなかに立つて、ぢいつとこの山を仰いでゐると、そゞろに遠い昔の我等の祖先の一人が此處を通りかゝつて詠み出でたといふ古い歌を思ひ出さゞるを得ない。

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き、駿河なる富士の高嶺を、天の原振りさけ見れば、渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず、白雲もいゆき憚り、時じくぞ雪は降りける、語りつぎ

言ひつぎ行かむ、富士の高嶺は、

田子の浦ゆうち出て見れば眞白くぞ富士の高嶺に雪は降りける

この歌の時代には四邊に人家もなく田畑もなく、恐らくたゞうち續いた原野か森林であつたらうとおもふと、砂丘のはづれで響いてゐる浪の音なども一層身にしみて聞きなされる。

三保あたりから見るのも惡くはないが、入江だの丘陵だのといふ前景が付いて却つて富士山を小美しく小さなものにしてゐる。ともすれば模樣繪の富士山にしてしまふ恐れがあるのである。

前景のあるを嫌ふと云つた。もう一ヶ所前景なしに富士山を見るに恰好な場所がある。それは御殿場の南に當る乙女峠である。御殿場から箱根の仙石原や蘆の湖方面に越ゆる峠で、御殿場驛から二里あまりもあらうか。

其處で見た富士山の事をば私は曾て書いておいた。それを此處に引く。仙石原から御殿場へ越えた時の事である。

登りは甚だ嶮しかつたが、思つたよりずつと近く峠に出た。乙女峠の富士といふ言葉は久しく私の耳に馴れてゐた。其處の富士を見なくてはまだ富士を語るに足らぬとすら云はれてゐた。その乙女峠の富士をいま漸く眼のあたりに見つめて私は峠に立つたのである。眉と眉とを接するおもひにひた〳〵と見上げて立つ事が出來たのである。まことにどういふ言葉を用ゐてこのおほらかに高く、清らかに美しく、天地にたゞ獨り聳えて四方の山河を統ぶるに似た偉大な山嶽を讃めたたふることが出來るであらう。私は暫く峠の路の眞中に立ちはだかつたまゝ靜かに空に輝いてゐる大きな山の峯から麓を、麓から峯を見詰めて立つてゐた。（中略）

乙女峠の富士は普通いふ富士の美しさの、山の半ば以上を仰いでいふのと違つてゐるのを私は感じた。白妙に雪を被つた山嶺も無論いゝ。が、この峠から見る富士は寧ろ山の麓、即ち富士の裾野全帶を下に置いての山の美しさであると思つた。かすかに地上から起つたこの大きな山の輪廓の一線はそれこそ一絲亂れぬ靜かな傾斜を引いて徐ろに天に及び、其處に清らかな山嶺の一點を置いて、更にまた美しいなだれを見せながら一方の地上に降りて來てゐるのである。地に起り、天に及び、更に地に降る、その間一毫の掩ふ所なく天地の間に聳えて居るのである。しかもその山の前面一帶に擴がつた裾野の大きさはまだどうであらう。東に雁坂峠足柄山があり西に十里木から愛鷹にかけての山ざかひがあり、その間に抱く曠野の廣さは正に十里、十數里四方にも及んでゐるであらう。なほしかもその廣大な原野は全體にかすかな傾斜を帶びて富士を背後におほらかに南面して押しくだつて來てゐるのである。その間に動く氣宇の爽大さは

いよいよ背後の富士をしてその高さを擅ならしめてゐるのである。

幼い形容詞が多くお羞しい文章であるが、初めて乙女峠から富士を見た時は私はまつたくこの通りに感じたものであつた。此處の富士も田子の浦と同じく、その裾野を置くほかは何等の前景を持たぬ富士それ自身の眺めである。しかも山全體を一眸の裡に收め得ること亦た同じい。たゞ一方は海岸であり、一方は山上であるの相違だ。

乙女峠から眺めて十里四方にも及ぶであらうと云つた曠野は大野原と呼ばれてゐる。その大野原の奥、富士の根がたまで秋に一度初夏に一度私は出懸けて行つたことがある。その時々に詠んだ歌を此處に引いて其處から見た富士の説明に代へやう。

富士が嶺や麓に來りあふぐ時いよゝ親しき山にぞありける

富士が嶺の裾野の原のまひろきは言に出しかねつたゞに行き行く

富士が嶺に雲は寄れどもあなかしこわが見てをれば薄らぎてゆく

日をひと日富士をまともに仰ぎ來てこよひを泊る野のなかの村

草の穂にとまりて啼くよ富士が嶺の裾野の原の夏の雲雀は

雲雀の聲空に滿ち滿ちて富士が嶺に消殘る雪のあはれなるかな

張りわたす富士のなだれのなだらなる野原に散れる夏雲の影

夏雲はまろき環をなし富士が嶺をゆたかに卷きて眞白なるかも

以上、すべてその麓の近い處からのみ仰ぐ富士山を書いて來た。今度は少し離れた位置からの遠望を述べて見よう。富士は意外な遠國からも仰がれて、我知らず驚いた事が屢々あるが、此處には

駿河灣一帶の風光の約束のもとに、さまでは離れぬ遠望を書くことにする。

支那の言葉に、高山に登らざれば高山の高きを知らずといふのがあると聞いた。この言葉の眞實味をばよくあちこちの山登りをする時ごとに感じてゐたのであるが、伊豆の天城山に登つて富士を仰いだ時、將にそれを感じた。そしてそゞろに詠み出でた歌がある。

たか山の高きに登り高山の高き知るといふ言のよろし

さ

初め私は絶頂近くにあるといふ噴火口あとの八丁池といふを見るがために天城登りを企てたのであつた。そしてせつせと登つてゐるうちに不圖うしろを振返つて端なく自分の背後の空に、それこそ中天に浮ぶと云つた形でづばぬけて高く大きく聳えてゐる富士山を見出して、非常に驚いたのであつた。

ツイ眼下には狩野川の流域である伊豆田方郡の平野があつた。それを取り圍む形でやゝ遠く左寄りに眞城、達摩の山脈があり、近く右手に箱根連山があり、その中に城山、寢釋迦山、鳶の巣山、德倉山等の低きが相交はり、ずつと遠くには駿河信濃國境に連亙した赤石山脈が眞白に雪を被つて

つらなつてゐた。そして殆んど正面にこれも常よりは高く見ゆる愛鷹山が立ち、それの裾野の流れ落ちた所には駿河灣が輝いてゐた。それらの山や海を前景とし背景として、まつたく思ひがけない高い空に白々としてうち聳えてゐたのであつた。

三保あたりからは前景がうるさくていやだと前に言つたが、この位ゐの大きな前景となると少しも惡くなかつた。前景の大きさが、いよいよ富士の大きさを增した樣にも見えた。これもその時詠んだ數首の歌を引いて當時の自分の驚嘆を現はさうと思ふ。

わが登る天城の山のうしろなる富士の高きはあふぎ見飽かぬ

山川に湧ける霞の昇りなづみ敷きたなびけば富士は晴れたり

まがなしき春のかすみに富士が嶺の峯なる雪はいよゝ輝く

富士が嶺の裾野に立てる低山の愛鷹山はかすみこもら

ふ

愛鷹の裾曲の濱のはるけきに寄る浪白し天城嶺ゆ見れば

伊豆の國と駿河の國のあひにある入江の眞なか漕げる舟見ゆ

野や濱や山の上から見た富士山のみを書いて來た。海から見るそれをひとつ書いて見よう。

狩野川の河口、卽ち沼津の町から出て伊豆の西海岸の諸港を經、その半島の尖端に在る下田港まで行く汽船がある。この汽船の甲板に立つてゐたならば、そしてその日がよく晴れてゐたならば、殆んど到る所の海上からこの靈山が仰がるゝのである。海と空との間に唯一つ打ち聳えたこの山の姿の靜けさは麓に立つて仰ぐのと自づからまた別である。ことに富士のよく晴れる季節の秋から冬にかけてはこの伊豆西海岸には殆んど毎日西風が吹くために、紺碧な海上いちめんに白浪が泡立つてゐて一層の偉觀を添へる。またこの海岸線は斷崖絕壁といつた風のところが多く、どうかするとその斷崖の眞上に、またはその中腹に半ば隱れて見えたりすることがある。

サテ、富士の事ばかり書いて來た樣である。そのほかで附近の案內を書くとすると先づ江の浦附

近の入江であらうか。

これは全く模範的な入江だといふ氣のする處である。伊豆の大瀨崎と、狩野川々口以東の海岸の圍み合ふ入江は二三里ほどの奧まりを持つて居る。その入口に駿河地では牛臥靜浦があり伊豆地では西浦內浦があり、一番奧が卽ち江の浦となつてゐるのである。一帶に非常に深い海で、江の浦の岸邊でも底の見えぬ靑みを湛へて居る。海岸は曲折に富み、道路はその崎に沿ふことをせず、多く隧道を穿つて通じてゐるほどだ。海に臨んだ小山には多く松が茂り、小波もない深みの上に靜かに影を投げて居る。

江の浦は遠州灘駿河灣伊豆七島あたりへ出かくる鰹船の餌料を求めに寄るところで、小松の茂つた崎の蔭の深みには幾箇所となく大きな自然の生簀が作られ、其處に無數の鰯が飼はれて居る。で、普通の漁師町以上に整つた宿場をなしてゐるのであるけれど、いゝ宿屋が無い。江の浦から曲りくねつた海岸ぞひの路を更に一里半行くと三津といふ船着場があるが、其處は料理屋兼業其他の三四の宿屋があり、小さくはあるが洋式の三津ホテルといふもある。三津のまん前には淡島といふ小さな尖つた島があつて、その島のないめ横に例の富士山が海を前にして仰がるゝ。其處より背後の岡を越えて一里歩くと長岡溫泉がある。三津に斯うした土地不似合の料理屋宿屋のあるのは單に景色

がいゝといふばかりでなく、一つはこの長岡温泉があるためである。

この三津まで、沼津の御成橋の下から午前午後の二回乗合の發動機船が出る。狩野川の川口を出るとすぐ左折して蠶の這つた様な牛臥山を左に、靜浦の御用邸附近の深い松原を見て江の浦に入り、附近の山蔭に介在してゐる小さな舟着場二三箇所に寄つて三津で終るのである。航程約一時間半、舟賃三十五錢、最も簡易な入江見物が出來るわけである。

冬田中あらはに白き道ゆけばゆくての濱にあがる浪見ゆ（五首靜浦附近）

田につゞく濱松原のまばらなる松のならびは冬さびて見ゆ

桃畑を庭としつゞく海人が村冬枯れはてゝ浪たゞきこゆ

門ごとにだいだい熟れし海人が家の背戸にましろき冬の浪かな

冬さびし靜浦のはまの松原ゆ仰げる富士は眞しろ妙なり

うねり合ふ浪相打てる冬の日の入江のうへの富士の高山（二首靜浦より三津へ）

浪の穗や音に出でつゝ冬の海のうねりに乘りて散りて眞白き

舟ひとつありて漕ぐ見ゆ松山のこなたの入江藍の深きに（四首江の浦）

奥ひろき入江に寄する夕潮はながれさびしき瀨をなせるなり

大船の蔭にならびてとまりせる小舟小舟に夕げむり立つ

砂の上にならび靜けき冬の濱の釣舟どちは寂びて眞白き

富士川の鐵橋を過ぎて岩淵蒲原由比の海岸、興津の清見寺、さらに江尻から降りて三保の松原に到るあたりのことを書くべきであらうが、蒲原由比は東海道線を通るひとの誰人もがよく知つてゐる處であらうし、三保にもさほど私は興味を持たぬ。海も松原も割合に淺くきたなく、唯だ羽衣の傳說と三保と呼ぶ名稱の持つ優美感とが一つの美しい幻影を作りなしてゐる傾きが無いではない。

松原ならば私は沼津の千本松原をとる。公園になつてゐるあたりはつまらないが、其處を少し離れて西へ入ると實にいゝ松原となつてゐる。樹がみな古く、且つ磯馴松と見えぬ眞直ぐな幹を持ち、一樣に茂つた三四町の廣さを保つてずつと西三里あまり打ち續いて田子の浦に終つてゐるのである。海岸の松原としては全く珍らしいと思ふ。昔、或る僧侶が幕府に獻言し、枝一本腕一本とかいふ嚴しい法度を作り、この松原を育てゝその蔭の田畑の潮煙から蒙むる損害を防いだものであるさうだ。

この松原を詠んだ拙い自分の歌を添へてこの案內記を終る。

むきむきに枝の伸びつゝ先垂りてならびそびゆる老松が群

風の音こもりてふかき松原の老木の松は此處に群れ生ふ

横さまにならびそびゆる直幹の老松が枝は片なびきとり

張り渡す根あがり松の大きなる老いぬる松は低く茂れり

松原の茂みゆ見れば松が枝に木がくり見えて高き富士が嶺

末とほくけぶりわたれる長濱を漕ぎ出づる舟のひとつありけり

故郷の正月

私は日向國耳川（川口は神武天皇御東征の砌其處から初めて船を出されたといふ美美津港になつてゐます）の上流にあたる長細い峽谷の村に生れました。村の人は多く材木とか椎茸とか木炭とかいふ山の產物で生活してゐるのです。

ですから正月といつても淋しいものでした。今でもまださうではないかと思ひますが、村には新の正月と舊の正月とがありました。新の正月はたゞ學校でやる位のことでしたが、その新年式の式場に飾るために野生の梅の花を學校の裏にある谷間にとりに行つたことを私はよく覺えてゐます。何でも二度ほど取りに行つたと思ひます。先生に連れられて、鉈を持つて、四五人の者が狹い谷間のあちらこちらに咲いてゐる眞白な花を探して歩いた記憶が不思議にはつきりと殘つてゐます。子供心にもさうした谷間に春の來るといふことがよく〳〵嬉しかつたのでせう。それにその頃既に梅が咲くといふ樣な季候違ひの事實もその印象を深めてゐるに違ひありません。山の中と云つても海岸から五六里しか離れてゐず、年中雪を見ることのない程暖かな土地でした。

私の父は醫者で、その頃村での新人でした。で、門松をば必ず新の正月に立てました。たこの松の切出しには必ずまた父と私が出かけました。脊戸から出て小さな岡を越えると其處に一つの谷が流れて兩岸にやゝ平な野原があり、其處に松ばかり茂つてゐる一箇所がありました。父の好みはなか〳〵にむつかしく、容易にこの木がいゝとは云ひません。あとではいつも私と喧嘩をしました。さうして辛ふじて伐り倒した松があまりに大きくて我等の手に合はず、いろ〳〵の目標をしておいてあとで下男をとりによこしたりしました。この松伐りも今ではなつかしい思ひ出です。それに父はなか〳〵のきまり家で、多少にせよ新の正月にも餅をつかせましたので、舊の正月の時と二度餅の喰べらるゝのも幼い私の自慢であり喜びでありました。

新の元旦には母など一向に父を相手にしませんので、父は私を相手に『元日』の屠蘇を祝ひました。他の者が平常着なのに父と私とだけ（私は男の子としては一人子なのです、父の四十二の時の誕生だと云ひますから齡もたいへん違つてゐたのです）が紋附を着て、廣い座敷に向ひ合つて坐るのがいかにも變でした。

舊の正月はそれでも家中たいへんです。それに村ではすべての勘定事が盆と節季の二度勘定にきまつてゐますので、半年分の藥代を村の者がみな大晦日に持つて來るのです。來た者には必ず酒を出す習慣で、どうかすると二三十人も落合つて飲み出すといふ騒ぎになり、父も母も私たちまでもその夜は大陽氣でした。

舊正月は村全帶の正月であるが、これとてたゞ業を休んで酒を飲む、回禮をするといふだけで別

に變つた事もありませんでした。我等子供たちの遊戯ですが、晴れゝばそとへ出て『根つ木』といふ遊びをした。生木の堅いのを一尺か二尺に切り、先を尖らせて地へ互ひに打ち込んで相手の木を倒して取るのです。降るか或は寒い日は家の中で『針打ち』をしました。半紙をめいめい一枚づつ出し合つて疊の上に積み重ね、一本の縫針に二三寸の糸を附け、針のさきを唇にくはへ、絲を烈しく引いて疊の上の紙にその針をつき立てる様に打ちおろします。さうして徐ろに絲を引いて針の先に引き留められて上つて來たゞけの紙を自分の所得とするこれも賭事あそびです。凧をも揚げるには揚げましたが、何しろ平地の少い溪間の事ゆゑ、大勢して揚げるなどといふわけにはゆきませんでした。

いつの正月であつたか、珍らしく雪の降つた事がありました。私の七八歳の頃だつたでせう。我等子供はうろたへて戸外へ出て各自に大きく口を開けながらちら〳〵と落ちて來るその雪を飲み込まうとしたものです。そんなに雪は嬉しい珍らしいものでした。附近一の高山、尾鈴山といふのゝ八合目ころから上にほのかに雪の積ることがありました。大抵は夜間に積むのですが、すると父は大騒ぎをして私を呼び起しました。

『繁、起けんか〳〵、尾鈴山に雪が降つたど、早う起けんと消えつしまうど！』

と云ひながら。

その父が亡くなつてから十年たちました。頑健な母はまだ強情を張りながら、古びた家に唯一人殘つてをり、私が學問をするために尋常科しかなかつたその村を出てから今年で丁度二十八年たつわけになります。

伊豆西海岸の湯

東京にて、M――兄。

伊豆の東海岸には御承知の通り澤山温泉があるけれど、西海岸には二個所しかありません。一つはずつと下田寄りの賀茂温泉、一つはいま私の來てゐる土肥温泉です。此處には沼津から汽船、二時間足らずで來られます。賀茂にはまだ行つて見ません。至つて開けぬ所ださうで、湯の量は非常に多く、浴用よりそれを使つて野菜の促成栽培をやつてゐるとか聞きました。

土肥も似たものですけれど賀茂よりましでせう。旅館も七八軒ありますし、村の人家も相當に寄つてゐます。いゝのは冬暖く夏海水浴の出來ることで、困るのは交通の不便です。ことに、この冬季、十二月から二、三月にかけては誠に西風が立ち易く、それが立つと汽船が止り、汽船が止ると始んど交通途絶です。船原越修善寺越といふ二つの山道がありますが、餘程脚の達者な者でないと歩けない難道です。一は四里程で船原温泉に出、一は六里程で修善寺温泉に越ゆるのです。二日も三日も汽船が出ないとなると爲方なしに人足を雇つてはその峠へかゝつてゆく女連子供連の客が見かけられます。

私はこの五六年、毎年正月元日に此處にやつて來てゐます。朝暗いうちに自宅で屠蘇を祝つて、五時沼津の狩野川河口を出る汽船に乘るのです。幸ひと今迄この元日には船が止りませんでした。然し毎年相當に荒れました。私は船に強いので、平氣で甲板に出て荒浪の中をゆく自分の小さな汽船の搖れざまを見てゐます。晴れゝば背後に聳えた富士をその白浪のうへに仰ぐことになります。河口を出て靜浦江の浦の入江の口を横切り大瀬崎の端へかゝると船は切りそいだ様な斷崖の下に沿うてゆくことになります。十丈二十丈の高さの斷崖の頭の方は篠笹の原か茅の野になつて居り、その下は殆んど直角に切り落ちて露出した岩の壁です。冬のことで、篠笹原はうすい綠の柔かなふくらみを持つて廣がつて居り、枯茅の野は鮮かな代赭色に染つてゐます。そして岩壁は多くうす赤い物々しい色をして聳えてゐます。

その眞下に立つ浪の中をゆらり〳〵と搖れてゆく小さな汽船の姿を想像してごらんなさい。

正月ごとに私の此處に來ますのは、一つはその時に押懸けて來る所謂年始客から逃るゝためでもあるのですが、本統はその頃此處に來てゐますと梅の花の咲き始めを見ることが出來るからです。年の寒さで多少の遲速はある様ですが、先づ一月の十日には咲き出します。元日に來て既に庭に

咲いてゐるのを見て驚いたこともあります。また、この土地にはこの木が非常に多い。一寸出ても家の垣根とか田圃の畔とか、かすかな傾斜を帶びた山の枯草原などに白々と咲いてゐるのが目につきます。或る古い寺があり、其處の竹藪の中にも咲いてゐます。

梅の花はなか〳〵散らないもので、あとの方になるといかにも佗しい褪せざまを見せて來ます。山櫻の花などとは其處はすつかり違つてゐます。が、その咲き始める時はまことにいゝ。一りん二りん、僅かに枝に見えそめた時の心持は全くありがたいものです。毎年のことですが、心がときめきます。

梅の花と共にこのころ此處に來て眼につくのは橙です。また、夏蜜柑です。これも一軒の家には必ず二三本のその木があり、橙は赤く、夏蜜柑は黄いろく、いづれもぎつちりとあの厚い葉の茂つた木になりさがつてゐるのが見えます。

この果物の熟れてゐる色はいかにも明るい感じのするもので、一寸散歩しても右に左に見えて居るこの色がさながらにこの土肥温泉の色彩の様な氣がするのです。

何處の温泉場でも何か土地に相應した様なものを考案して土産物として賣つてゐますが、土肥では先づ枇杷羊羹でせう。つまり土地に枇杷が多いのです。蜜柑と同じく、ずつと高くまで段々畑が作られてこれが植ゑてあります。正月は褪せながらもまだこの木の寂しい花が葉がくれに見えてゐます。そしてそれに寄り集うた眼白鳥が非常に多い。

羽根の青い、眼の縁の白い、親指ほどもないこの小さな鳥は暗い様な枇杷の木の茂みに幾羽となく入り籠つてちい〳〵と啼いてゐます。花の蜜に寄るものと見えます。そして、時々この小鳥の群がその枇杷の木を離れて附近の山の櫟林に入り込んでゐるのを見ます。櫟はまた梅が咲くといふのにも枯葉を落さないで、から〳〵に乾いたまゝの鮮かな色をして山の傾斜に立ち並んでゐます。

土肥は斯うした櫟林や、蜜柑畑や、枇杷の畑のある小山を北から東にかけて背負うて、西また南に海を受けた僅かの平地の土地なのです。

もう一つ土肥の土産物に小土肥海苔、八木澤海苔といふのがあります。小土肥は西に、八木澤は東に、共にこの土肥から二十町ほどを距てた漁村ですが、其處で取れる海苔をそれ〴〵に斯う呼ぶのです。淺草海苔などの様に粗朶に留つたものを取るのでなく、荒浪の打ち寄せる磯の大きな岩の肌に着いた海苔を板片などで掻き取つて乾すものです。ですから風味もずつと違ひます。私などど

ちらかといふとこの荒磯の味を好む者ですが、惜しいかな製法が未熟なため、ともすると中に貝殼のかけらや砂の屑などが入つてゐます。中で小土肥海苔の方は其處の磯の岩が滑かなため、八木澤のよりややその混入物が少いといふことになつてゐます。

西南に海を控へ北と東に山を負うて僅かな平地を持つた土地と先に云ひましたが、その僅かな平地は一つの小さな流に沿うてやゝ深く東の方へ切れ込んでゐます。そしてその平地の兩側は例の雜木の山、果物畑の山となつてゐるのです。

もう少し私はこの雜木林の山のことをお話したい。一體、君は雜木林といふものがお好きでしたか知ら。

欅林とだけ云ひましたが、單にそれだけではありません。いろ〳〵の樹木がその日向に向いた山に生えてゐます。先づ竹の林が眼につきます。杉の木立の、冬の日にうす赤く錆びてゐるのが見えます。何の木だか、竹箒の樣にその落葉した枝や梢をこまぐ〳〵と張りひろげて立つてゐるのがあります。楠かタブの木か、みつちりと黑く茂つた若木もその間に立ち混つてゐます。

斜め上りになつて行つてゐる澤の奥のつめの所に一並び細く杉の木立の立ち續いてゐるのはいかにも靜けく明るく眺められます。またすぐその下に續いて寧ろ淡黃色をした竹の林がこまかな葉を日光に晒して立つてゐるのもいかにも柔かな眺めです。それからは例の欅の林、名もない木立の冬枯、やがて枇杷の畑、蜜柑の畑。

すべてが明るく、すべてが柔かく、すべてが暖かです。そしてすべて其處におちついて眺められます。大きくはないが、まつたく靜かです。

湯は海岸寄りの中濱といふのと、山の窪地に沿うて五六丁入り込んだ奥の番場といふ二部落に湧いてゐます。私は毎年その中濱の方のこの宿に來てゐますが、ツイ裏が山の根がたとなつてゐて海にも近く、湧く湯の量も甚だ豐かです。

弱鹽類泉とかいふのださうで、無色無臭、實によく澄んでゐます。この宿には湯が二個所に湧き、而かもその五六分通りは捨ててしまはねば熱〻て入り得ぬといふ有樣です。ですから少し浴場を作り變へたら所謂千人風呂位ゐ直ぐ出來るでせう。

正月の三ヶ日あたりは流石にこみます。今年は地震のあとで例年の樣なことはあるまいと思つてゐると、もう三十日あたりから滿員になつたとの事でした。客は學生が多く、次ぎに老人です。何

しろ來る道中が道中だものだから、身體の弱い人、氣の弱い人、または時間にきびしい制限のある人たちには一寸出かけて來られないのです。

その正月の混雜は先づ四五日に半減され、七日か八日に及んで更らに半減されます。そしてそれから後は次第に平常の靜けさに歸ります。今年も十二三日になるとこの大きな宿に僅か五六人の客がゐるだけでした。それも論文を書く學生とか少々リウマチの氣のあるといふ老人とかですから靜かなものです。

たゞ困るのは女中の不馴なことゝ粗野なことですが、聞けば正月とか暑中とかの書入時には近所の民家の娘たちを雇ひ入れるので、客や帳場で小言でも言へばどん〳〵歸つてゆくとかで、致しかたのない話です。で、私はこの一二年をば半自炊の氣でやつてゐます。卽ち炭から水から茶道具酒道具寢道具を一切自分の部屋にとり寄せておいて隨時自分の氣の向いた時に飲んだり寢たりするのです。至つて成績がよろしい。

單に女中に限らず、帳場そのものからほゞそれに近いものなのです。不自由と云へば不自由、親しみの眼で見れば却つてなまなかに開けた温泉場よりいゝ氣持です。

二つある湯殿の一つにはよく日が當ります。六疊敷ほどの湯槽が三つに爲切(しき)つてあり、その一つの隅にぼんやりと一人入つてゐますと、ツイ側に落ちてゐる湯口の音のみ冴えて、いつ知らずうとゝしたくなる靜けさです。眼の前の湯の中に動いてゐる微塵に似た湯垢の一つ〳〵にはかすかに虹の樣な日光の影が宿り、湯槽の緣から溢れ出る湯は同じくほがらかに日が當つて乾き切つてゐる流し場の一端に細い小波をたてゝ流れて行つてゐます。

湯槽からあがつてその流の中に横たはりますと、身體半分は温浴、半分は日光浴が出來るといふ有樣です。

西風が立つたとなればあはれです。

眞正面から打ちつけて來る怒濤の響がまつたく一人でゐる時など、戸障子を搖するかと聞ゆる時があります。

二日續き、三日續くとなると出る客も入る客もなくなり、新聞は來ず、郵便は遲れる。郵便だけは荒れが續けば山を越えて來ますが、平常は矢張り船に據つてゐるのです。すべてを沼津から取つてゐる御馳走も途絶えるといふ始末で、たゞもうおとなしく湯の中に浸つてゐるほかはありませ

ん。

要するに梅の初花を見に來るお湯でありませう。しかも野の梅です。すべてにさういつた趣きを此處の湯は持つてゐます。多分私は今後もその花を見にやつて來ることゝ思ひます。

梅を見るには此處に、そして山櫻の花を見るためには私は毎年矢張りこの伊豆の天城山の北麓にある湯が島温泉へ出かけてゐます。いづれまた其處のことはその時に書きませう。

ところで、M――兄。

今朝の地震には嚇かされました。何しろ地震と聞くと妙に神經質になつてゐるものですからですが、今朝のは確かに恐ろしい一つでした。戸外に逃げ出した寒さを拂はうと急いで湯殿へ駈けつけてまた驚きました、湯が眞白に濁つてゐるのです。地の中がどんな具合で搖れるのかとその湯に浸りながら考へました。この調子では屹度また何處ぞがひどくやられてゐる事と思ひます。ほんとうにいやな事だ。

ではこれで失禮します。一月十五日。伊豆土肥温泉土肥館にて。

海邊八月

昨年の八月いつぱいを伊豆西海岸、古宇といふ小さな漁村で過しました。これはその思ひ出話。

八月いつぱい、子供を主として何處かの海岸で暮したい、さういふ相談を妻としてから七月の初め私はその場所選定のため伊豆の西海岸へ出懸けました。西海岸と云つてもさう不便な場所では困るので、この沼津から靜浦灣を挾んで、殆ど正面に見えて居る西浦海岸を探す事になつたのです。幸ひそちらには我等の歌の社中の友人も居るので、大よその事をその友人に調べておいて貰ひ、先づ此處等がよからうといふ事を聞いた上、私は出懸けました。そして指定せられた二三箇所を見て廻つた末、矢張りその友人の居村である古宇村といふにきめたのでした。

其處は半農半漁の、戸數五十戸ほどの村でした。半農と云つてもそれは殆んど蜜柑の栽培が重でそのほか椎茸木炭などを作り出すと云つた風の山爲事なのです。その村の少し手前の江の浦重寺三津などの漁村には所謂避暑地としての善惡それ〴〵の發展が見えてゐましたが、その古宇村にはまだ全然それらの影響がありませんでした。友人に案内せられて行つた宿屋は村内唯一の宿屋で、寧ろ漁師と百姓とを主業としてゐる風に見えました。

旅客用の部屋は母屋と鍵形になつた離室の方で、二階二間、階下二間、すべて六疊づゝの部屋なのです。二階は東北、及び僅かに西がゝつた方角とが開けてゐて、ツイ眞下に、それこそ欄干から

飛び込めさうな眞下に海がありました。そして海の向うには靜浦牛臥沼津の千本濱がずらりと見渡されて、その千本濱の少し左寄りの上の空に富士が圖抜けて高く聳えて居るのでした。

『これは素的だ、早速此處にきめませう』

二階に上るや否やさう云つて、坐りもやらずに、二つの部屋をぐる〳〵と私は廻つて歩きました。階下の部屋も欲しかつたのですが、折々廻つて來る常客などのために其處だけは空けておきたいとのことで、諦めねばなりませんでした。

『イヤ、二階だけで澤山だ、そちらを子供部屋にして、此處に自分の机を置いて……』

その夜一泊、翌朝早くの船で沼津へ歸る筈でしたが折よく降り出した雨をかこつけにもう一日滯在することにしました。そして雨に煙つて居る靜かな入江の海を見て何をすることもなく遊んで居りますと、丁度二階の眞下の海に沿うた小徑を三人の女が何やら眞赤な木の實らしいものゝ入つた籠を重々と背負つて通るのが眼にとまりました。木の實の上は瑞々しい小枝の青葉が置かれ、それに雨が降りかゝつてをりました。

『山桃！』

さう思ふと慌てゝ私は彼等を呼留めました。

そして中の一人から大きな笊いつぱいその珍らしい果物を買ひとりました。聞けばこの近くの江梨といふ附近の山にはこの木が澤山あるのださうです。この山桃は東京あたりではなか〳〵喰べられない。そして私は幼い時からこれを飽きるほど喰べて來たので、季節の來るごとに自づと思ひ出されてならぬのでした。早速皿に盛り、滴る樣な濃紅濃紫の指頭大の粒々しい實の上にさら〳〵と鹽を振つて、サテ徐ろに口に含みました。

斯くして八月の朔日に先づ尋常三年生の長男と書生とが出懸け、二三日して殘り三人の子供と妻と私とがその古宇の宿屋へと行きました。子供達の喜びは云ふまでもありません。宿から二三町離れた所に砂濱があり、割に遠淺になつてゐるので早速彼等の泳ぎ場にきまりました。長男だけ辛うじて五六間の距離を泳げるといふのみで、あとはみなぽちや〳〵黨なのです。妻もまた大きな圖體で、折々このぽちや〳〵組に混つてゐるのです。私だけは宿の直ぐ前の石段から直ぐざんぶと躍り込んで彼等の場所まで泳いで行くのです。何年にも泳いだことがなかつたので最初は少し變でしたが、やがて氣持よく手足を伸して、綺麗な潮を掻き分け得る樣になりました。

まつたく潮は綺麗でした。二階から見てゐますと、眞前の岸近く寄つて來て泳いでゐるいろ〳〵の魚の姿がよく見えました。細長い姿のさよりやうぐいはその群までも細長く續いて、折れつ伸びつ、ちよこ〳〵と泳いで行き、黑鯛はおほく獨りぽつちでぼんやりとその大きな體を浮かせ、何か事があるとぴんと打たれたやうにかき沈んで忽ち何處へやら消え去りました。折々雨の降り出したかの樣にぴよん〳〵ぴよん〳〵こまやかな音を立てゝ水面に跳ねあがり、それが朝日か夕日かを受けて居れば青やかな銀色に輝くのはしこの密群でした、若しこの大群がやゝ遠くを過ぐる時は、海面が急にうす黝く皺ばむのでした。その他、名も知らぬ魚の族がいろいろの色や形で我等の面前に現はれました。中に一つ、土地では海金魚とか云つてゐましたが、樫の葉くらゐの大きさで、それこそ若葉の日に透いた樣な眞みどりの魚が始終其處の大きな岩の蔭に泳いでゐました。二三疋から五六疋どまりの群で引汐の時には見えなくなり、上げ汐となればきまつてその岩の蔭にやつて來ました。これは六つに九つの姉妹の一番の仲好しで、兩人競爭してこの眞みどりの着物をつけた友だちの現はれるのを待つてゐるのでした。ほかにまた、これは少々厄介者でしたが海丹がゐました。これも上げ汐につれすつと海岸沿ひに一列になつて押し寄せて來るのです。例の栗の毬の形で、い

つ動くとなくむんづ〳〵とやつて來るのです。見てゐれば可憐ですけれど泳ぎの時に若し誤つて此奴を踏まうなら、彼は忽ちその黑紫の毬を足裏の肉深く刺し通すのです。拔かうとすれば折れて殘り、やがてじく〳〵と痛み出します。僅に脫脂綿に酢を含ませて局部にあて、痛みの去るのを待つほかはないのです。いゝことに、此奴案外に神經質と見え、泳ぎの場所近くやつて來たと見れば宿から物乾竿を持ち出してその一群の中の五つ六つを突きつぶすのです。すると四邊四五間四方位に群れてゐた連中はいつ動くとなくまた何處へともなく逃げ隱れて行くのです。そして少くとも一兩日の間は其處に姿を見せませんでした。

魚の話のついでに釣の事を申しませう。

私の釣りに行つたのは多く磯魚でした。土地では根魚と呼んでゐます。海底が磯になつてゐる所卽ち砂でなくて石や岩の重疊した樣な場所にのみ居る魚の總稱です。味は一體に大味ですが、色や形には誠に見ごとなのゝ多いのが特色です。かさご、あかぎ、ごんずい、くしろ、おこぜ、海鰻、その他なほ數種、幾ら聞いても直ぐ忘れてしまふ樣な奇怪な名を持つた魚たちが四邊の海で釣れました。餌はしこ、またその一族のはま何とかいふさよりに似た細身の魚を最上とし、それが間に合

はずば大方の魚の切肉（きりみ）。卽ち共餌（ともえ）でゝも釣れるのです。岡からも釣れますが、どうしても船です。一體に此處の入江は入江としては非常に深く、ことに岸から直ぐずつと深く切れ込んでゐる深みが多いのです。その深み――所によれば二三十尋に及びました――に舷から絲を垂れて釣るのです。

技巧は簡單で、舷に掌を置き、そして親指と人差指との間に持つて垂れた釣絲の感觸によつて魚の寄りを知り、やがて程を見て手速く船の中に卷き上ぐるのです。唯だ絲の降りてゐる海底が岩石原であるため、馴れないうちはよく鈎をそれに引つ懸けました。宿の主人が名人とやらで、それに敎はつて釣り始めたのですが三度四度と行くうちにいつか主人より私の方が餘計釣る樣になりました。親爺負惜しんで曰く、

『おめえたちは指がびるつこいせえに追つつかねエ』

びるつこいとは柔かな、せえには故にの意、蓋し指の柔かなためいち速く絲の感觸を受くるから釣りいゝのだとの事でせう。

何しろ二三十尋もある深みの底から一尺大のかさごなどがその大きな口をあいて、一條の絲につれて重々とあがつて來る時の指から腕、腕から頭にかけての感覺の面白さはまつたく別でした。海鰻は淺い所でも釣れました。だからその海底に魚の姿を見ながらに釣れるのです。大瀨崎といふ岬

の蔭の磯に此奴の無數に棲んでゐる所がありました。此處では先づ用意して行つた魚の腸（臭い程いゝの故、腐つてゐればなほよし）を海中に投じ、徐ろに其處等の岩や石の間を覗いてゐるのです。すると間もなく赤黄色の斑のある海鰻先生がどの石の蔭からともなくのろりつと現はれます。出たぞ、と絲をおろすころには、出るは〳〵、のろり〳〵と大きな七五三繩の繩片のやうな奴が縺れつ縺れつ岩から岩の蔭を傳うて泳ぎ廻ります。それの鼻先へ（この先生、眼がろくに見えず唯だ匂ひだけで動くのださうです、だから餘計に間が抜けて見えます）餌を突きつけて釣るのですからわけはありません。但し此奴釣りあげてからが厄介で、私などの細指をば唯だの一嚙で嚙み切らうといふ鋭い齒を持つてゐるので、鈎をはづすが大難澁、私など大抵一匹ごとに鈎を切つて新たなのを用ゐました。大きいのになると幅二三寸長さ二三尺のものがゐました。形美ならず、味また不美。

思ひ出して來るといろ〳〵ありますが、もう一つ、毎日の夕方の事を書いてこれを終りませう。ア、朝起きてから顔も洗はずに、まだ日のさゝぬうす黑い海面へ庭さきからざぶりと飛込む愉快さをも書き落してゐましたね。

この村から毎日早朝沼津へ向けて出る發動汽船があります。そしてそれは午後の四時、五時の頃に村へ歸つて來るのです。私はいち速くこの船の人たちと懇意になつて、いろ〳〵と便宜を得ました。そんな佗しい漁村の、そんな佗しい宿屋のことで、何も御馳走がありません。殆んど自炊をしてゐる形で私たちは其處の一月を送つたのですが、その食料品をば全てこの發動汽船に頼んで沼津から取り寄せたのです。そればかりでなく、沼津の留守宅から廻送して來る郵便や新聞等も途中一二箇所の郵便局の手を經るよりもこの船に頼んで持つて來て貰ふ方がずつと速かつたのです。

夕方の四時近く、いつとなく夕涼が動き出して西日を受けた入江の海の小波が白々と輝き出した頃、泳ぎに疲れた二階の一家族は誰かれともなく一樣に沖の方に眼を注ぎます。

『來た、來た、壯快丸が見えますよ父さん！』

兄が斯う叫びます。

『どれ、どれ、……うゝん、あれは常磐丸だよ、壯快丸ではないよ』

『嘘云つてらア、御らんよ、ぺんきが白ぢやアないか』

『ア、さうだ、今日も兄さんに先に見附けられた、つまんないなア』

と妹が呟きます。

大抵親子二三人してその壯快丸の着く所へ出懸けます。そして野菜や（海岸には大抵何處でもこ

れが少い）肉や郵便物を受取つてめい〳〵に持つて歸ります。歸つてから兄は水汲み、妻は七輪、父親はまた手網を持つて岸近く浮けてある生簀に釣り溜めておいた魚をすくひに泳ぎ出すのです。

八月が終りかけると母と子供とは學校があるので家の方に歸り去り、父親一人は釣に未練を殘してもう二三日とその宿に殘りましたが、越えて九月一日の正午、例の大地震を食つて大にうろたへたのでした。

地震日記

伊豆半島西海岸、古宇村、宿屋大谷屋の二階のことである。九月一日、正午。

その日の晝食はいつもより少し早かつた。數日前支那旅行の歸りがけにわざ〳〵其處まで訪ねて來て呉れた地崎喜太郎君が上海からの土産物の極上ウヰスキイを二三杯食前に飲んだのがきいて、まだ膳も下げぬ室内に仰臥してうと〳〵と眠りかけてゐた。

其處へぐら〳〵ッと來たのであつた。

生來の地震嫌ひではあるが、何しろ半分眠つてゐたのではあるし、普通ありふれたもの位ゐにしか考へずに、初めは起上る事もしなかつた。ところが不圖見ると廊下の角に當る柱が眼に見えて斜めになり、且つそれから直角に渡された双方の横木がぐつと開いてゐるのに氣がついた。

とおもふと私は横つ飛びに階子段の方へ飛び起きた。同時に階下の納戸の方で内儀の

『二階の旦那！』

と叫ぶ金切聲が耳に入つた。が、その時にはその人より私の方がよつぽど速く前の庭にとび出してゐた。

すると、ゴウッ、といふ異様な音響が四方の空に鳴り渡るのを聞いた。見れば目の前の小さな入江向うの崎の鼻が赤黑い土煙を擧げて海の中へ崩れ落つるところであつた。オヤオヤと見詰めてゐると、ツイ眼下の、宿から隣家の醫師宅にかけて庭の塀下を通つてゐる道路が大きな龜裂を見せ、見る〳〵石垣が裂けて波の中へ壞れて行つた。

これは異常な地震である、と漸く意識をとり返してゐるところへ、また次ぎの震動が來た。地響きとか山鳴とかいふべき氣味の惡いどよみが再び空の何處からか起つて來た。村人の擧ぐる叫びがそれに續いてその小さな入江の山蔭からわめき起つた。

三度、四度と震動が續いた。そのうち隣家醫師宅の石塀の倒れ落つる音がした。それこれを見てゐるうちに先づ私の心を襲うたものはツイ眼下から押し廣まつて行つてゐる海であつた。海嘯であつた。

不思議にも波はぴたりと凪いでゐた。その日は朝からの風で、道路下の石垣に寄する小波の音が斷えずぴたり〳〵と聞えてゐたのだが、耳を立てゝもしいんとしてゐる。そして海面一帶がかすかに泡だつた樣に見えて來た。驚いた事にはさうして音もなく泡だつてゐるうちに、ほんの二三分の間に、海面はぐつと高まつてゐるのであつた。約一個月の間見て暮した宿屋の前の海に五つ六つの岩が並び、滿潮の時にはそのうちの四つ五つは隱れても唯だ一つだけ必ず上部一二尺を水面から拔き出してゐる一つの岩があつたが、氣がつけばいつかそれまで水中に沒してゐる。

『此奴は危險だ！』

私は周圍の人に注意した。そしてまさかの時にどういふ風に逃げ登るべきかと、家の背後から起つて居る山の形に眼を配つた。

海の水はいつとなく濁つてゐた。そして向う一帶の入江にかけて滿々と滿ちてゐたが、やがて、「ざアつ」といふ音を立つると共に一二町ほどの長さの瀨を作つて引き始めた。ずつと濱の上の方に引きあげてあつた漁船もいつかその異常な滿潮にゆら〳〵と浮いてゐたのであつたが、この急激な落ち潮に忽ち纜を斷たれて悠々と沖の方へ流れてゆく一つ二つが見えた。あれほど常平生船を大事にする濱の人たちも、それを見ながら誰一人どうしようといふ者がなかつた。

さうした景色を見ながら直ぐ心に來たのは沼津の留守宅の事であつた。四人の子供に、あの舊びはてた家屋、男手の少いところでどうまごついてゐるであらうとおもふと、とてもじつとしてゐられなかつた。この有樣では既に電報線のきく筈はないと思ひながらも、兎に角郵便局まで行つて見ようと尻を端折つた。數日前から階下の部屋に滯在してゐる群馬縣の社友生方吉次君も、

『一人では心細いでせう、私もゆきませう』

と同じく裾をまくしあげた。

郵便局は古宇村から一つの崎の鼻を曲つた向うの隣村立保（たてぼ）といふに在るのであつた。その鼻に沿うて海沿ひにゆく道路はツイ先刻第一の震動と共に崩壞するのを眼前見てゐた。で、その崎山の峠を越えてゆく舊道があるといふことをフツと思ひ出して、それを越えてゆくことにした。

古宇村は戸數六十戸ほどの、半農の漁村で、二つの崎山の間に一掴みに家が集つてゐるのであるその部落の間を通り抜けようとすると、なんと敏速に逃げ出したことか、家といふ家がみな戸をあけすてたまゝ、屋内には早や一個の人影をも留めてゐなかつた。そしてずつと山の手寄りの田圃の間に一かたまりに集つて海面に見入つてゐるのが見えた。

部落を通り抜けて舊道を登りにかゝると、其處には木立のたちこんだ間に、幾つかの龜裂の出來てゐるのが見えた。荒れ古びた小徑の草むらの中には先から先と大小の石塊が眞新しく轉げ落ちてゐた。とても徐歩する事が出來ず、小走りに走つてその山蔭の村立保へと降りて行つた。

此處の龜裂は古宇より更にひどかつた。か細い女の身で大きな簞笥を横背負に背負ひ込んで山手の方へ青田中を急いでゐる者や、米俵を引つ擔いで走つてゐる若者などが入り亂れて見えてゐた。海岸の高みには老人たちが五六人額をあつめて遠くの海上を眺めてゐた。

郵便局に行くと一人の老人を廣い庭の眞中に寢かして、二三人の若い女が手に〳〵傘を持つてそ

の周圍に日を遮つてゐた。病人らしかつた。案の如く電報電話とも不通であつた。心休めに、若し通ずる樣になつたら早速これを賴みますと賴信紙を賴んでおいて、二人はまた山の舊道を越えた。

古宇の村はづれにかゝると、土地の青年團の一人がわざ〳〵我々の方に歩いて來て、

『今夜は津浪が來るさうですから直ぐ彼處に行つて〻下さい、村の者は皆行つてゐますから』

と山の方を指ざした。坐りもやらずに群衆は其處に群つてゐる。

『難有う！』

海岸に似合はない人氣のいゝ人情の純なこの村の氣風を、改めてこの紅顏の一青年に見出しながら、私達は禮を云つて急いで宿に歸つた。

宿でも評定が開かれてゐた。元來いま歸りがけに見て來たところでは村內全部が雨戸を閉ぢて山の方へ引上げてゐるので、まだ平常のまゝに戸をあけてゐるといふのはこの宿屋一軒きりであつたのだ。それを私は私たちに對する宿の遠慮からだとおもつた。で、いま途中で逢つて來た青年の勸告のことを告げて、一緒にこれから立ち退かうと申し出た。

『それがネ旦那』

宿の婆さん——主人の母で七十近くの——が私の側に寄つて來た。そして、安政二年にも地震と共に大津浪がやつて來て、この古宇村全帶を破壞し、洗ひ浚つて行つたことがある。その時に不思議にも此處一軒だけは地震にも崩れず、津浪にも浚はれず、人々に奇異の思ひをさせたのであつたが、もと〳〵この家は裏の山續きの岩を切り拓いてその上に建てたものであり、また僅かの事だが家の所在が一寸した崎の鼻の蔭に位置してゐるので津浪からも逃れたのであらうといふことになつてゐた、だから今度も大抵大丈夫ではあらうとおもふが、それとも旦那たちが氣味が惡ければ逃げませう、まア〳〵念のために飯をばいまうんと炊いてゐる處だといふのだ。

しつかり者のこの老婆の云ふことをば何故だか其儘信用したかつた。そして若しもの事のあつた時の用意だけをしておいて山へ逃げるのをば暫く見合はすことにした。

それでも屋內に入つて居れなかつた。緣側に腰かけるか庭に立つか、斷えず搖つて來るのに氣を配りながらも海面からは眼が離せなかつた。

『や、壯快丸ぢやないかなナ』

私は思はず大きな聲でさう云ひながら庭先へ出て行つた。遙かの沖に、唯だ一個の白點を置いた形で眼に映つた船があつた。其時どうしたものか見渡す沖には一艘の小舟も汽船も影を見せなかつた。其處へ白い浪をあげて走つて來るこの一艘が見え出したのだ。

『ア、ほんとだ、壯快だ〳〵、オーイ、壯快丸がけえつて來たよう』

宿の息子も誰にともない大きな聲をあげた。壯快丸とはこの古宇村の人の持船で、此處から他三四ヶ所の漁村を經て沼津へ毎日通つてゐる發動汽船であるのだ。

『今日は直航でけえつて來たナ、どうだいあの浪は！』

裸體のまゝの宿の亭主も出て來た。なるほどひどい浪である。舳にあがつてゐるその白浪のために、こちらに直面してゐる船の形は殆んど隱れてしまつてゐるのだ。

『ひでえ煙を出すぢアねエか、まるで汽船とおんなじだ、全速力で走つてやがんナ』

いよ〳〵壯快丸だと解つた頃には山に逃げてゐた人たちもぞろ〳〵とその船着場ときめてある海岸に降りて來て集つた。私たちもその中に入つてゐた。船は全く前半身を浪の中に突き入れる樣にして速力を出してゐる。そして間もなく入江の中に入つて來た。

船内には無論客も荷物もなく、丸裸體の船員だけが二三人浪に濡れて見えてゐた。

『どうだい、沼津は？』

『えれえもんだ、船着場んとこん土藏が二三軒ぶつ倒れた、狩野川がまるで津浪で船が繋いでおかれねえ』

まだ碇をもおろさない船と陸の群衆との間には早や高聲の問答が始つた。

小舟で船に漕ぎつける人も出て來た。そして其處あたりから傳へられたらしく、今夜の十二時に氣をつけろ、でつけえ奴が搖つて來ると沼津の測候所でふれを出した、三島町は全滅で、山北では汽車が轉覆して何百人かの死人が出たさうだ、などゝ入江向うの新聞が異常な緊張を以て口から口に傳へられた。其處へ誰から渡されたとも氣のつかぬ手紙が私の手に渡された。大悟法君の手である。胸を躍らせながら封を切つた。

ひどい地震でしたネ、先生大丈夫ですか。こちらは唯だ壁と屋根瓦が落ちたゞけで皆無事ですから御安心下さい。

引き續いて來た三つの大震動がいまやつと鎭まつたところ。先生が心配してゐらつしやるだらうと思ふので取敢へずこれだけ書いて船に驅けつけます。

と簡單だが、これだけ讀んで私はほつとして安心した。そしてよくこそ取込んだ間にこれだけでも知らして呉れたと大悟法君に感謝し、船の人たちにも感謝した。

いそ〳〵と宿へ歸らうとすると、其處の道ばたに一人の少年が坐つてゐる。見れば見知合の郵便配達夫で、顏色が眞蒼だ。

『どうした、おなかでも痛いか』

と訊くと、自分の頭を指ざす。

幸ひその側に醫者の家があるので其處へ連れて行つた。

『ア、腦貧血ですよ、これは！』

と云つたきり、藥の事をば何とも言はず、そゝくさと何處かへ出て行つた。お醫者樣ひどく惶てゝゐるのである。

止むなく私は宿に少年を連れて歸つた。そして緣側に寢かし、仁丹など飲ませて靜かにさせながら、やがて訊いて見ると、これから二里ほど岬の方に離れて江梨といふ漁村がある。其處まで配達に行つて歸つて來る山の中で例の『ドシン！』に出會つたのださうだ。山の根に沿うた路のことで大小雜多な石ころが、がら〳〵と落ちて來る、人家はなし、走らうにも足がきかず、漸く此處まで出て來たらもう立つて居る事も出來なくなつたのださうだ。

夕方まで寢てゐると、顏色も直つて、笑ひながら歸つて行つた。

『サテ、慄へてばかりゐても爲樣がない、一杯元氣をつけませうか』

さう云ひながら私は二階に酒の壜をとりに上つて行つた。そして、思はず立ち止りながら大きな

聲で笑ひ出した。倒れも倒れたり、一升壜が三本麥酒壜が三本――これらは皆カラであつた――ウキスキイ（一本はカラ）二本が、全部横倒しになつて部屋のそちこちに泳ぎ出して來てゐるのだ。時ならぬ笑聲に驚いて宿の亭主も上つて來た。そして一緒に笑ひ出した。

『一本取つて來ませう』

『然し、店は戸をしめてましたよ』

『なアに、こぢあけて取つて來ますよ』

村はほんとにノンキであつた。果して一升壜を提げて、なほ鑑詰をも持つて、人の子一人ゐない部落の方から亭主は歸つて來た。『先生、惜しいことをしましたよ。店では實のある奴が二三本ぶつ壞れて酒の津浪でしたよ』

庭の一隅に板を並べ莫蓙を敷き、其處を夕餉の席とした。生方君と今一人、二三日前から泊り合せてゐる眞田紐行商人の老爺との三人が半裸體になりながら冷酒のコツプを取つた。其處へ消防が來、青年團の人たちが見舞にやつて來た。その間にも、ヅシン、ヅシンと二三度搖つて來た。海は然し却つて無氣味な位ゐに凪いでゐた。そしてまた何といふ富士山の冴えた姿であつたらう。

雲一つない海上の大空にはかすかに夕燒のいろが漂うてゐた。そしてその奥には澄み切つた藍色

がゆたかに滿ち渡つてゐる。其處へなほ一層の濃藍色でくつきりと浮き出てゐるのが富士山であるのだ。

『斯んな綺麗な富士をば近來見ませんでしたねエ、何だか氣味の惡い位ゐに冴えてるぢアありませんか』

暫くもそれから眼を離せない氣持で私は云つた。

やがて四邊が暗くなつた。暮れた入江の丁度眞向う、山の端の空が、半圓形を描いてうす赤く染つて見えた。

『火事だナ、三島には遠いし、何處でせう』

『小田原見當ですネ』

『箱根の山でも噴火したではないでせうか』

噴火ならば爆音がある筈である。火事とするととても小さなものではない。

『今夜の十二時に氣をつけろつてのは本當でせうか、どうしてさういふ事が解るでせう』

『中央氣象臺からでも何か云つて來たのでせう』

『電報がきくか知ら』

戸外に寢るには私は風邪が恐かつた。で、緣側に床を伸べて横になつた。ツイ鼻さきの前栽には鈴蟲が一疋、夜どほしよく徹る聲で鳴いてゐた。

夜警の人が折々庭に入つて來た。

九月二日早朝、出澁る壯快丸を村中して促して沼津に向つた。乘船した人の過半は沼津の病院に病人を置いてゐる人たちであつた。

壯快丸から降りると私はすぐ俥を呼んだ。町中すべて道路に疊を敷いて坐つてゐた。一月ほど見なかつたこの町の眼前の光景が一層私には刺戟强く映つた。

『オ、今、お歸りですか』

と聲をかくる知人もあつた。

香貫の自宅近くの田圃中の畦道には附近の百姓たちが一列に席を敷き。布團を敷いて集つてゐた。

私の姿を見るや否や、

『ア、けえつて來た〳〵』

と誰となくさゝやく聲が聞えた。笑顏の二三人は立ち上つて頭をさげた。

門を入らうとすると、青い蚊帳が見えた。門から中門までの砂利の上、松や楓の木の間に三つ吊つてあるのだ。夜具が見え、ぬぎすてた着物が木の枝にかけてあつた。

『やア、とうさんだ〳〵、かアさアん、とうさんが歸つて來たよウ！』

忽ち湧き起る四人の子供たちの叫びが私を包んだ。

思ひがけぬ綿引蒼梧和尙の大きな圖體がのつそりと半吊りの蚊帳から表はれた。

『やア、君が來てゐたのか！』

『ウン、一昨日來てひどい目にあつたよ』

『さうか、それはよかつた』

星君も日疋君も出て來た。彼等の下宿してゐる龜谷さん一家が私の宅に逃げて來て一緒に蚊帳を並べたのださうだ。大悟法君は壁の落ちた玄關から出て來た。

臨時の炊事場が裏庭に出來てゐた。頰かむりの妻がほてつた顏をして其處から來た。

『ヤアとうさんだ〳〵、うれしいな〳〵』

子供の叫びはなか〳〵に止まなかつた。

三日には雨が來た。しかも强い吹き降りであつた。うろたへて庭のものを取り込んでゐる一方では室內にぽと〳〵といふ雨漏の音が聞え始めた。もと〳〵舊い家で、少し降りが强いと必ず漏るには漏つたが、それは場所がきまつてゐた。今度もツイその氣でゐると、座敷が漏る、茶の間が漏る玄關、奥座敷、二階などは天井の板の目に列をつらねて落ちてゐる。器具を片寄せる。疊をあげる不圖氣がついて一つの押入をあけて見ると其處の布團はぐつしよりだ。周章へて他のをあけて見ると其處も同斷である。臺所、便所にまでポチ〳〵と音が聞えだした。僅かに離室とそれに隣つた湯殿とだけが無事だ。湯殿は早速物置になつた。

其處へ例の「風說」がやつて來た。今夜から土地の青年團が夜警をするから、庭の木戸など一切締めずに彼等の通行に自由ならしめて貰ひ度い、と達して來た。

『恐いなア、おとうさん、どうしませう』

子供たちは眞實顏色を變へてゐる。

四日の夜なかであつた、たゞならぬ聲で私を呼ぶ者がある。一人ならぬ聲だ。三日の雨から庭に寢るのをよした代りに、雨戸はすべてあけ放つてあるので、早速私はその聲の方へ出て行つた。

見ると五六人の青年が一人の男の兩手をとり、肩を捉へて居る。呆氣にとられてよく見ると、捕

へられてゐる男は古宇で別れて來た、生方君であつた。急に私の方に來たくなり、夜みちをしてやつて來る途中、青年團につかまつた。何處へゆく、斯ういふ人の所へ行く、嘘を云へ、何が嘘だ、が嵩じてたうとう此處まで引きずられて來たのださうだ。青年たちも生方君も汗ぐつしよりである。

二日、三日、四日と夢中で過して漸く落着きかけた五日の午後、私は三島町の塚田君を見舞はうと思ひ立つた。同君には沼津の稲玉醫院副院長時代、始終子供たちの身體を診て貰つてゐた。三島に單獨に開業してまだ幾らもたゝぬにこの騷ぎで、しかもそちらは隨分ひどくやられたと聞いて前から氣になつてゐたのである。電車の運轉が止つてゐるので、舊街道の埃道をてく〳〵と歩き始めた。

尻端折で歩くといふ事が不思議に私の心を靜かにしてくれた。と共に急にいろ〳〵な事が思ひ出されて來た。先づ東京横濱の知人たちの身の上である。

この三日あたりから今度の事變の範圍が漸く解りかけた。そして何より驚かされたのは東京横濱地方に於ける出來事であつた。殆んど信じ難い事であつたが、而かも刻々にその事實が確められて來た。次いで起つて來たのはさうした大事變の中に於ける我が知人たちの消息如何である。何處々々が燒失したと聞けば其處に住んで居る誰彼の名が、顏が、直ぐ心に浮んだ。死傷何萬人と聞けばどうしてもその中に二人や三人は入つてゐなければならぬ樣な氣がしてならぬのである。丸ビルの八階はどうだ、六階はどうだつたらう、窓から飛んで二百人死んだといふではないか、通新石町の土藏はこれは最も危險だ、女の身でどうして逃げられたらう、身一つならばだが親を連れてはどんなに難儀したであらう、とそれからそれと想像が走る。しかも明るい方へは行かないでどうしても暗い方へ〳〵とのみ走りたがるのだ。先月伊豆に訪ねて來て呉れた時、今から思へばいつもほど元氣がなかつた、蟲が知らしてお別れに來たのではなかつたか、など丶全く愚にもつかぬ事まで氣になつて來る。

便所に行つた時、枕についた時、僅かの隙を狙つては起つて來る此等の懸念や想像が、いま斯うして獨りで歩いてゐると恰も出口を見付けた水の樣に汪然として心の中に流れ始めたのだ。果ては歩調も速くなつて、汗をかきながら急いでゐたが黄瀬川の橋にかゝつた時、私は歩くのをよして其處の欄干に身を凭せかけた。そして汗を拭き帽子をとつてその熱苦しい想像邪念を追拂はうと努めた。

が、それは徒勞であつたばかりでなく、却つて一種の焦燥をさへ加へた。焦燥はやがて一つの決

心を私に與へた。

『よし、行つて來よう、行つて見て來よう！』

さう思ひ立つともう大抵無事だと解つてゐる三島の方へなど行つてはゐられなかつた。三島はあと廻しだ、と思ひ捨てながらとつとゝ踵をかへして歩き始めた。

家に歸つてから妻との間にいろ〳〵の問答や相談が繰返された。入京の非常に難儀なこと、私自身の健康のこと、旅費のこと、それからそれと頭の痛くなるほど繰返されてゐるところへ、ひよつこり庭先へ服部純雄さんがやつて來た。彼は昨日岡山から職員總代、學生總代其他と三人の人を連れて、

『君たちを掘り出すつもりでやつて來たのだが、まア〳〵噂の様でなくてよかつた』

と云ひながらその明るい笑顔を見せたのであつた。關西地方では最初沼津地方激震死傷數千云々といふ風に傳へられ、それに驚いて飛んで來たのであつたさうだ。その服部さんが勇しい扮裝を見せながら、『とても君危險で箱根から向うには行けないさうだ、此處まで來たついでに東京まで行つてやらうといま町でいろ〳〵用意をしたんだが……』

と、その種々の危險を物語つた。

『それではあなたにも到底駄目ですネ』

と諦め顏に細君が私を見た。

そして、その日の夕方、代りに大悟法君が萬難を冒して出かくるといふことに事は急變したのであつた。

明けて六日の午前中、大悟法君と二人沼津中を馳け廻つて用意を整へ、正午、折柄安否を氣遣つて伊豆から渡つて來て呉れた高島富峯君と共に大悟法君の悲壯な出立を沼津驛に見送つたのであつた。

箱根を越え、御殿場を越えて逃げて來た所謂罹災民の悲慘な姿で沼津驛前あたりが一種の修羅場化してゐる話をば人づてに聞いてゐたが、私が直接にさうした人を見たのはその六日の夕方、自宅の庭に於てゞあつた。

玄關に立つてゐる異様ないでたちの青年に見覺えはあつたが、直ぐには思ひ出せなかつた。名乘られて見ればそれは三年ほど前に、當時長野市にゐた柴山武矩君方で逢つた同君の末弟四郎君であつた。

『ア、さうでしたネ、さアお上んなさい』
『まだ二人ほど連れがあるんですが……』
『どうぞ、お呼びなさい』
一人は四郎君のすぐ上の兄さんで早稲田大學、一人はその友人で農科大學の學生だと解つたが、三人とも古びた袢纏を引つかけたまゝで、下はから脛の、見るからに變な樣子であつた。
『アツ！』
私は初めて氣がついた、彼等はすべて小田原の人であつたのだ。それで、この異樣な樣子が飲み込めると同時に口早やに問掛けた。
『君等はやられたのですね、どうでした、小田原は？』
『すつかりやられました、身體一つで燒出されました……』
漸く私は彼等を座敷に招じた。聞けば彼等は三人共各學校柔道の選手で、九月一日には小田原小學校で始業式の濟んだあとが柔道大會となり、彼等は全て柔道着か裸體かになつて式場（雨天體操場などであつたらうと思ふ）に出てゐた。ドツと來ると共に學校は潰れてしまつた。幸ひ彼等のゐた場所は場内の中央であつたゝめ、落ちた屋根も其處だけは多少の空隙を殘してゐて壓死をば免れ

たが、まん中どころ以外に並んで見物してゐた幼い生徒たちは殆んど全部ひしやがれてしまつた。そのうち小使部屋から火が出た。何處をどう搔き破つて出たのだか兎に角に三人とも素裸體で、諸所に擦傷を負ひながらもつぶれた屋根の下から這ひ出す事が出來た。出て見ると町にはすつかり火が廻つてゐたさうだ。其處へ津浪が寄せ、やがて凄じい龍卷が起つて紙片の樣に人間其他を空中に卷きあげた。
『何しろ町中全部が燒けたものですから食物が無いのです、救助米が多少廻つてるのですけれど如何してだか東京方面を主にして小田原などにはほんの申譯ばかりにしかよこさないのです、で、米を少し持つてゆかうとこれから鈴川の親戚まで行くところです』
と一人が云ふと、一人は笑ひながら着てゐる袢纏を引つぱつて、
『裸體ではしようがないものですから途中の親戚で道了講の宿屋をしてゐる家に寄つてこれを三枚貰つて來たのです』
私は今朝小田原から山を越えて來たといふ三人に強ひて足を洗はせて、今夜此處に泊る事にさせた。そしてようこそ此處に私の住んでゐる事を思ひ出して呉れたと想つた。
酒を取りにやつた女中が歸つて來たらしく、勝手の方で時ならぬ笑ひ聲がするので行つて訊いて

見ると、近所の者が酒屋に集つて、

『いま若山さんところに不〇〇人が三人入つて行つたが、どういふ事になるだらう』

と騒いでゐたといふのだ。なるほどさう云はれゝば三人共髪の長い、眼のぎよろりとした、背の痩高い連中で、おまけに人夫などの着さうな袢纏を着たところ、〇人と見られても否やは云へぬ風采であつたのだ。

久し振だ、勿體ない様だと云ひながら三人の人たちが盃をあげてゐるところへ、

『先生、やつて來ましたよ』

と、聞き馴れた聲が玄關で起つた。思ひもかけぬ笹田登美三君が大きな荷物を擔いで立つてゐるのだ。

『やア笹田さんだ〳〵』

子供たちが一整に飛び出して來た。同君は矢張り大阪地方の新聞記事を見て、不安でならぬので出懸けて來て呉れたのであつた。そしてそれこそ喰べものにも困つてゐはせぬかとわざ〳〵澤山な餅をついて擔いで來て呉れた。なほ來がけに寄つた大阪の某君の許から頼まれたと云つて渡された包を開いて見ると、食料、藥品、燃料と、くさぐさの心づくしが收めてあつた。

『まアほんとに、どうしませうねエ』

一つ〳〵手にとつては妻は早や涙ぐんでゐる。

やがて皆床を敷いて横になつた。その前から小さなのが一つ二つとゆれてゐたのであつたが、九時頃でもあつたか、やゝ大きいのがゆら〳〵と動いて來た。丁度私は便所に行かうと廊下を歩いてゐた所で、『來たナ』と思つて立ち止つた途端にツイ眼の前の座敷から、

『ワツ！』

と云ふと身體を揃へて庭の方へ飛び出したものがあつた。びつくりして見ると小田原組の三人だ揃ひも揃つても長いのが三人、水泳の飛び込み其處のけの恰好で、双手を突き擴げて二三間あまりも闇を目がけて跳躍した有様はまつたく壯觀で、フツと思ふと同時にこみあげて來た笑ひは永い間私の身體を離れなかつた。

彼等も私に合はせて笑ふには笑つたが、それからどうしても屋内に眠る事が出來なくなり、たうとう莫蓙を持ち出して庭の木蔭に三人小さくかたまつて寢てしまつた。私たちは三日の雨の夜から引續いて屋内に寢る事になつてゐたのだ。

待たれるのは被害地からの便りであつた。

大悟法君からの第一便は名古屋驛から來たがそれからぴつたり止つたまゝで何の音沙汰も無い。東京、横濱の誰人からも來ない。毎日町へ出かけて買つて來る大阪地方の新聞紙は日一日と不安を張め確かめてゆくばかりだ。

其處へ十日の正午少し前、電信配達夫が門前に自轉車を乘りすてた。その姿を見るとすぐ私は机を離れて玄關へ急いだのであつたが、妻の方が速く其處に出て受取つた。そして發信人の名を、

『ミ、チ、ヤ』

と讀んだのを耳にした。

『ナニツ！』

と云ひさま彼女の手から引つといて中を見た。

『コチラヘキタアスユク』

シヅオカ局發である。

妻とたゞ眼を見合せた。

『生きてたナ！』

といふ感じが、言葉にならずに全身に浸み巡つたのである。

電報は二通であつた。他の一通の發信人には『トシヲ』とある。

『トウケウミナブ　ジ　アンシンセヨイマヨコハマニユク』

發局は同じく靜岡だ。

『道彌さんが生きて歸つて、それに利雄さんがことづけたのだ』

と直ぐ思つた。

皆無事、の範圍は解らないが兎に角に重な人たちに事の無かつたとだけは解してよろしい。

泣くとも笑ふとも解らぬ顏を突き合はせて夫婦はなほ暫く無言のまゝ緣側に立つてゐた。

『オイ、今日のお晝には一杯つけるのだよ』

嚴として妻に命令した。地震紀念に私は永年の習慣となつてゐた朝酒と晝酒とをやめる事に三四日前からなつてゐたのだ。

九月六日附、「再度上京の時」と脇書した鉛筆の葉書が十一日に中島花楠君から來た。あとで思つたのだが恐らくこれは高崎の停車場あたりで書かれたものだらう。

貴方のお宅もお見舞ひせず、失禮。遂々本所の兩親弟妹四人が完全に燒死したといふ悲しきお

知らせをします。何が何だか解らない頭で燒跡をウロ〳〵してゐます。是から義弟の家へ（是は無事）整理にゆく處です。咲子の家（芝新堀）も全燒です。是にはまだ行きませんから生死は判りません。社友の中にも氣の毒な方が少くないでせう、高久君はどうしたらう。

中島君が早々東京へ出立した事をば名古屋の他の社友から早速通知があつて知つてゐた。行つてそして斯んな事になつたのだ、と暗然とした。後で直ぐこの取消は來たのであつたが。

十一日にミチヤさんが靜岡の實家からやつて來た。見るからに憔悴して、さながら生きた幽靈と云つた形である。不思議な氣持で食卓を中に相向ひながら、私は幾度も涙を飲んだ。瞳孔も緊つてゐず、ともすれば話の返事もちぐはぐになりがちであつた。

然し、この人に逢つて愈々東京の大體は解つた。誰も無事、彼も無事、あの人も私同樣着たまゝで燒出されたさうですけれど、命だけは助かりました、といふ同君の話を聞きながら、又しても瞼は熱くなつて來るのである。

『さうすると、殆んど全部東京の知人は助かつたといふわけか、どうも本統でない樣な氣がするが……』

『まつたく何かの奇蹟を聞く樣ですね』

と妻も食卓にしがみつく樣にしてゐて云つた。

サテ、横濱が氣になる。長谷川も、齋藤も、梅川も、自宅は横濱で、會社は東京だ。

其處へ『トシヲ』の電報が來た。十二日午後零時三十分、『テツセンダイ』局發だ。

『ギ　ンサクキリコブ　ジ　イヘマルヤケ』

越えて十三日にまた同文のものが『ゴテンバ』局發で來た。おもふに同君が大事をとつて一は東北方面へ、一は關西方面へ逃げてゆく人に托して同文のものを發したのであつたらう。

それから續いて追々と各自に無事を知らせる通知が來たが、中に横濱の高梨武雄君からの封書で

（前略）以上の人みな無事、唯だ一人金子花城君のみ今以て行衛不明です。

と云つて來た。そして終にこの人だけは永遠に我等の世界の人でなくなつた事を、ずつと遲れて二十七日に知る事が出來た。

豫定した行數を夙うに超過しながら書きたい事は一向に盡きない。いつそ、この十日前後の記事を以てこの變體な日記文を終らうと思ふ。この偉大な事變に對して動かされた我等の心情も實に多大なものがあつた。然し、それはまだ〳〵ものに書き綴るべき境地にまで澄んでゐない。我等はい

まなほ實に不安な動搖の中に迷つて居るのだ。此處には唯だノート代りのこの記事を殘して恐しかつた『彼の時』の思ひ出にするのみである。（九月二十九日）

火山をめぐる溫泉

信州白骨温泉は乘鞍嶽北側の中腹、海拔五千尺ほどの處に在る。温泉宿が四軒、蕎麥屋が二軒、荒物屋が一軒、合せて七軒だけでその山上の一部落をなしてをるのである。郵便物はその麓に當る島々村から八里の山路を登つて一日がゝりで運ばるゝのである。急峻な山の傾斜の中どころに位置して、四邊をば深い森が圍んでゐる。溪川の烈しい音は聞えるが、姿は見えない。

胃腸病によく利くといふので友だちに勸められ、私は其處に一月近く滯在してゐた。九月の中ごろからであつた。元來この温泉は信州といつても重に上下の兩伊那郡及び木曾路一帶、美濃の一部にかけての百姓たちがその養蠶あがりの疲勞をいやすために大勢して登つて來るので賑ふ湯ださうで、八月末から九月初めにかけては時とするとその四軒の宿屋に七八百人の客が押しかける事があるといふ。私の行つた時はほゞその時期を過ぎてもゐたし、丁度蠶の出來が惡くて百姓たちも幾らか遠慮したと見え、それほどの賑ひを見ずにすんだ。白骨に行けばその年の蠶の出來榮が判るとまで謂はれてゐるのださうである。然し、行つた初めには私の宿屋にだけでも二百ほどの客が來てゐた。が、彼等は蠶が濟んで一休みすると直また稻の收穫にかゝらねばならぬので、永滯在は出來ない。五日か七日、精々二週間もゐれば歸つてゆく。初め意外な人數と賑ひとを見て驚いた私の眼にはやがて毎日々々五人十人づゝ打ち連れて宿の門口から續いてゐる嶮しい阪路を降りてゆく彼等の行列を見送ることになつた。そして私自身その宿屋に別るゝ頃にはそのがらんどうの宿屋に早十人足らずの客しか殘つてゐなかつた。

幾つか折れ込んだ山襞の奥に當つてゐるので、場所の高いに似ず、殆ど眺望といふものがなかつた。唯、宿屋から七八町の阪を登つて、或る一つの尾根に立つと初めて打ち開けた四方の山野を見る事が出來た。並び立つたとり〴〵の山の中に、異樣な一つの山が眼につく。さほど高いといふでないが他とやゝ離れて孤立し、あらはに禿げた山肌は時に赤錆びて見え時に白茶けて見えた。そしてその頂上から、また山腹の窪みから絶えずほの白い煙を噴いてゐる。考ふるまでもなくそれは乘鞍嶽に隣つてゐる燒嶽である。

私は前から火山といふものに心を惹かれがちであつた。あらはに煙を上げてをるもよく、噴き絶えてたゞ山の頂きをのみ見せて居るも嬉しく、または夙うの昔に息をとゞめて靜かに水を湛へてをるその噴火口の跡を見るも好ましい。で、永滯在のつれ〴〵に私は折があればその尾根に登つてこの燒嶽の煙を見ることを喜んだ。そしてどうかして一度その山の頂上まで登つて見たいと思ひ出した。が、もう其處に登るには時が遲れてゐて、宿屋の主人も番頭も私のこの申し出でに對して殆ど相手にならなかつた。止むなくそれをば斷念して、せめてその山の中腹を一巡し、中腹のところど

ころに在ると聞く二三の温泉にでも入つて來ようと思ひ立つた。

私はまた温泉といふものをも愛してをる。同じ温度の湯でも、たゞの水を人の手で沸かしたものより、この地の底の何處からか湧いて來る自然の湯にはいひ難い愛着を感ずるのである。色あるも妨げず、澄みたるは更によく、匂ひあるも無きも、手ざはり荒きも軟かきも、すべてこの大地の底から湧いて來る温かい泉こそはなつかしいものである。其處に靜かに浸つてゐると、そゞろに大地のこころに抱かれてゞもゐる様な心やすさが感ぜられる。

十月十五日、私は白骨温泉の宿屋の作男を案内として先づ燒嶽のツイ麓に在る上高地温泉に向うた。行程四里、道は多く太古からの原始林の中を通じてゐた。そして其廣大な密林を通り過ぎると、大正三年燒嶽の大噴火の名殘だといふ荒涼たる山海嘯の跡があり、再びまた寂び果てた森なかを歩いてやがて上高地温泉に着いた。一軒建の温泉宿はその森のはづれに、山の上とは思はれぬ大きな川を前にしてひつそりと建つてゐた。川は梓川である。

上高地温泉といへば日本アルプスの名と共に殆ど一般的に聞えた所であるが、アルプス登山期が七月中旬から八月中旬に限られてある様に、その時期を過ぐれば此處もほんの山上の一軒家になり終るのである。況して私どもの辿りついた十月なかばといふには無論のこと一人の客もなく、家には玄關からして一杯に落葉松の松毬が積み込まれてあつた。通された二階は全部雨戸が閉ざされて、俄に引きあけた一室には明るく射し込んだ夕日と共に落ち溜つた塵埃の香がまざ〳〵と勾ひ立つた。湯ばかりは淸く澄み湛へてゐたが、その流し場にはほんの一部を除いて處狹く例の松毬が取り入れられてあつた。これを碎いて中のこまかな種子を取れば一升四圓とかの値段で賣れるのださうである。そのために二三人の男が宿屋の庭で默々と働いてゐた。

部屋に歸つて改めて障子を開くと眩ゆい夕日の輝いてゐる眞正面に近々と燒嶽が聳えてゐた。峯から噴きあぐる煙は折柄の西日を背に負ふて、さながら暴風雨の後の雲の様に打ち亂れて立ち昇つてゐるのであつた。

その夜は陰曆九月の滿月をその山上の一軒家で心ゆくばかりに仰ぎ眺めた。そして、月を見つ酒を酌みつしながら、私は白骨から連れて來た老爺を口説き落して案内させ、終にその翌日一時諦めてゐた燒嶽登山を遂行することになつたのであつた。

山の頂上に着いたのは既に正午に近かつた。晴れに晴れ、澄みに澄んだ秋空のもと、濛々と立ち昇る白煙を草鞋の下に踏んだ時の心持をば今でもうら悲しいまでにはつきりと思ひ出す。この火山は阿蘇や淺間などの様に一個の巨大な噴火口を有つことなく、山の八九合目より頂上にかけ、殆ど

到る處の岩石の裂目から煙を噴き出してゐるのであつた。その煙の中に立つて眞向ひに聳えた槍嶽穂高嶽を初め、飛驒信州地の山脈、または甲州から遠く越中加賀あたりへかけての諸々の大きな山岳を眺め渡した氣持もまた忘れがたいものである。更にあちらが木曾地に當ると教へられて振向くと其處の地平には霞が低く棚引いて、これはまた思ひもかけぬ富士の高嶺が獨り寂然として霞の上に輝いてゐたのである。

頂上から今度は路を飛驒地にとつて昨日よりも更に深い森林の中に入つた。まことにこれこそ千古のまゝの森といふのであらう。見ゆる限り押し並んだ巨樹老木の間に間々立枯のそれを見ることがあるとはいへ、唯の一本もまだ人間の手で代り倒されたらしいものを見ないのである。第一、私には斯うした火山の麓に斯うした大森林のあるのからが不思議に思はれた。森の中を下る事二里あまり、一つの川に沿うた。川に沿うて下る事約一里、蒲田温泉があつた。其處に泊る事にきめて來たのであつたが昨年とか一昨年とかの大洪水に洗ひ流されにまゝまだ殆ど温泉場らしい形をも作つてゐなかつた。更に下ること二里、福地温泉があつた。此處は全く影をも留めず洗ひ流されてゐた。

止むなく其處から寒月に照らされながら更に二里の山路を歩いて平湯温泉といふに辿り着いた。此處は謂はゞ飛驒の白骨温泉ともいふべく、飛驒地一帶から登つて來た骨休めの農夫たちで意外な

賑ひを見せてゐた。

この平湯温泉から安房峠といふを越えて約四里、信州白骨へ通ずるのである。即ち白骨、上高地平湯其他の諸温泉が相結んで一個の燒嶽火山を圍んでゐるのである。之等の諸温泉はひとしくみな高山の上にあつて、所謂世間の温泉らしい温泉と遠く相離(あひさか)つてゐる。それがまた私には嬉しかつた。折があらばまたこの三つ四つの山の湯を廻つて見度いと思ふ。唯私はあらゆる場合に於て大勢の人たちのこみ合ふ中に入つて行くことが嫌ひである。で、よし行くにしても七八月の登山期、若しくは蠶あがりの頃には行きたくない。

因にいふ、平湯はたしか一年中あるであらうが、白骨も上高地も雪の來るのを終りとして宿を閉ぢて、一同悉く麓の里に降つてしまふのである。

自然の息自然の聲

私はよく山歩きをする。

それも秋から冬に移るころの、ちやうど紅葉が過ぎて淅くあたりがあらはになりうとする落葉のころの山が好きだ。草鞋ばきの足もとからは、橡(とち)は橡、山毛欅(ぶな)は山毛欅、それ〴〵の木の匂を放つてゞも居る様な眞新しい落葉のから〳〵に乾いたのを踏んで通るのが好きだ。黄いな色も鮮かに散り積つた中から岩の鋭い頭が見え、其處には苔が眞白に乾いてゐる。時々大きな木の根から長い尾を曳いて山鳥がまひ立つ。その姿がいつまでも見えて居る様にあらはに明るい落葉の山。

それも餘り低い山では面白くない。海拔の尺數も少い山といふうちにも暖國の山では落葉の色がきたない。永い間枝にしがみついてゐて、そしていよ〳〵落つる時になるともうすう黝く破れかぢかんでゐる。一霜で染まり、二霜三霜ではら〳〵と散つてしまうといふのはどうしても寒國の高山の木の葉である。從つて附近での高山の多い甲州信州上州といふ風のところへ私はよく出かけてゆく。今年もツイこの間そのあたりを歩いて來た。

昨年の十月の末であつた、利根の上流の片品川の水源林をなす深い山に入り、山中にある沼で鱒を飼つてゐる番人の小屋に一晩泊めて貰ひ、翌日そこの老番人を案内に頼んで金精峠といふを越えた。その山の尾根は上州と野州との國境をなすところで、頂上の路ばたには群馬縣栃木縣の境界石

が立つてゐた。それも半は落葉に埋つてゐた。越えて來た方は峽から峽、峰から峰にかけて眼の及ぶ限り、一面の黑木の森であつた。梅や樅などの針葉樹林であつた。そして、これから下りて行かうとする眼下には、遠い麓の湯元湖の水がうす白く光つて見えた。その湖の縁には今夜泊らうとする湯元温泉がある筈であるのだ。

正午近い日がほがらかに照つてゐた。尾根の前もうしろも見下す限り茂り入つた黑木の森だが、僅かに私たちの腰をおろして休んでゐる頂上附近だけそれが斷えて、まばらな雜木林となつてゐた。無論もう一つ葉も枝にはついてゐない枯木の林だ。其處へほつとりと日がさして、風も吹かず、鳥も啼かない。まことに靜かだ。

不圖私は自分の眼の前にこまかにさし交はしてゐるその冬枯の木の枝のさきに妙なものゝ附いてゐるのを見つけた。初めは何かの花の蕾かとも思つた。丁度小豆粒ほどの大きさで幾重かの蓐見たやうな薄皮で包まれてゐる。然し、いま咲く花もあるまい、さう思ひながら私はその一つを枝から摘み取つて中をほぐして見た。そしてそれが思ひがけないその木の芽であることを知つた。木の芽と云ふが、それが開いて葉となる、あれである。

一つ葉も殘つてはゐないと云ふものゝ、ほんの昨日か一昨日散つてしまつたといふほどのところ

であつた。さうして散つてしまつたと見ると、もう一日か二日の間に次の年の葉の芽が斯のやうに枝ぢゆうに萌え出て來て居るのである。私はまつたく不思議なものを見出した樣な驚きを覺えた。

これら高山の、寒いところの樹木たちは斯うして惶しい自分等の生活の營みを續けてゐるのである。暫らくもぼんやりしてゐられないのだ。少しの時間をも惜んで、自分を伸ばして行かうとしてゐるのである。霜がおりて葉が染まる、落ちる、程なく雪がやつて來るのである。そしてそれからの永い間を雪の中に埋つてゐるのだ。その間こそ、彼等のどうにもならぬ永い〳〵休息の時である年を越えて、恐らく五月か六月の頃までさうして靜かにしてゐねばならぬのであらう。サテ雪が解ける。それとばかりに昨年の秋からこらへてゐたその芽生の力をいつせいに解きほぐすのである。さう思ひ始めると私はその靜寂を極めた冬枯の木立の間にまことに眼に見えず耳に聞えぬ大きな力の動いてゐるのを感ぜずにはゐられなかつた。大きな力が、何處ともなしに方向を定めて徐ろに動いて行きつゝあるのを感ぜずにはゐられなかつた。

峠をおりて私は湯元温泉に一泊した。そして翌朝其處を立つて戰場ケ原の方へ出やうとして不圖振返ると、昨日自分等の休んだ峠からやゝ南寄りに聳えて居る尾根つゞきの白根山には昨夜のうちに早やしら〳〵と雪の來てゐるのを見た。

それは樹木の場合である。さうした山國の山の奥で人間たちの營んで居る生活に就いても同じ樣な感慨を覺えたことがある。それは畑ともつかぬ山畑に一寸ばかりも萌え出て居る麥の芽を通してゞあつた。

信濃から燒岳を越えて飛驒へ下りたことがある。十月の中旬であつた。麓に近い山腹に十軒あまりの家の集つた部落があつた。そしてその家のめぐりの嶮しい傾斜に小さな畑が作られ、其處に青々と伸び出てゐる麥の芽を見て私は變に思つた。暖國に生れ、現に暖い所に住んでゐる私にとつては、麥は大抵十二月に入つてから蒔かれ、五六月の頃に刈り取られその間に稻が蒔かれ刈らるゝものといふ考へしかない。それに其處では十月の半だといふのに、もう一寸も伸びてゐるのである。その事を連れてゐた案内者に云ふと、もう半月も前に蒔かれたもので、これを刈るのは七八月こただと答へた。すると一年の殆ど全部をその山畑の僅かな麥のために費すことに當るのである。これとても半年以上を雪のために埋めらるゝ結果であること無論である。そしてその尊い乏しい麥をろべて彼等は生きて行くのだ。

何といふみぢめな生活であらうと私は思つた。自然と戰ふといふは無論當らず、自然の前に柔順

だといふのがやゝ事實に近からうが寧ろ彼等そのものが自然の一部として生活してゐるのではないかと私には思はれたのであつた。

暖國ではどうしても人は自然に狎れがちである。ともすると甘えがちで、どこか自然を馬鹿にする所がある。都會人、ことに文明の進んだ大きな都會では殆んど自然の存在するのを忘れてゞもゐる様な觀がある。唯だ人は人間同志の間でのみ生活して、自然といふものを相手にしない、相手にするもせぬも、初めからその存在を知らない、といふ風のところがある。そして日一日とその傾向は深くなるかに思はれる。

此間の様に大地震があつたりなどすると、『自然の威力を見よや』といふ風のことをいふ人のあるのをよく見かけるが、私は自然をさうした恐しいものと見ることに心が動かない。あゝした不時の出來事は要するに不時の出來事で、自然自身も豫期しなかつた事ではなからうかと思はれる。大小はあらうが、自然もまた人間と同様、あゝした場合にはわれながらの驚きをなす位のことであらうと思はれる。

そして私の思ふ自然は、生存して行かうとする人類のために出來るだけの助力を與へようとするほどのものではなからうかと考へらるゝのだ。多少の曲折はあるにしても、その生存を共同しようとする所がありはせぬかと考へらるゝ。と云ふより、自然の一部としての人間人類を考ふることに私は興味を持つのである。

たゞ、人間の方でいつの間にかその自然と離れて、やがてはそれを忘るゝ様になり、たま〳〵不時の異變などのあつた際に、周章へて眼を見張るといふところがありはせぬだらうか。

火山の煙を見ることを私は好む。

あれを見てゐると、「現在」といふものから解き放たれた心境を覺ゆる様である。心の輪廓が取り拂はれて、現在もない、過去もない、未來もない、唯だ無限の一部、無窮の一部として自分が存在してゐる様な悠久さを覺ゆる。

常にさうであるとは云はないが、折々さうした感じを火山の煙に對して覺えたことがある。自然と一緒になつて呼吸をしてゐる様な心安さがそれである。心の、身體の、やり場のない淋しみがそれである。

「高山のいたゞきに立つのもいゝものである。

一つの最も高い尖端に立つ。前にも山があり、背後にも見えて居る。そして各々の姿を持ち、各々の峰のとがりを持つて聳えてゐる。

靜まり返つたそれら峰々のとがりに、或る一つの力が動いてゐる樣な感覺を覺ゆることが折々ある。峰から峰に語るのか、それらの峰々がひとしく私に向つてゐるのか、とにかくそれらの峰の一つ〳〵に何か知らの力、言葉が動いてゐる樣な感じを受取つたことが屢々ある。

いま斯う書きながら、回顧し、空想することに於てもそれと同じいものを感じないではない。

雲が湧く。深い溪間から、また、おほらかにうち聳えた峰のうしろから。

その雲に向つても私は私の心の開くのを覺ゆる。煙の樣にあはい雲、掴み取ることも出來る樣な濃いゝ雲、湧きつ昇りつしてゐるのを見てゐると、私の心はいつかその雲の如くになつて次第に輕く次第に明るくなつて行く。

眼を擧げるのがいゝ時と、眼を伏せるのゝ好ましい時とがある。更に唯だじいつと瞑ぢてゐたい時もある。

伏せてゐたい時、瞑ぢてゐたい時、私は其處にかすかに岩を洗ふ溪川の姿を見、糸の樣なちひさな瀧のひゞくのを聽くのである。

溪や瀧の最もいゝのも同じく落葉のころである。水は最も痩せ、最も澄んでゐる。そしてそのひゞきの最もさやかに冴ゆる時である。

捉へどころのない樣な裾野、高原などに漂ふてゐる寂しさもまた忘れ難い。

富士の裾野と普通呼ばれてゐるのは富士の眞南の廣野のことである。土地では大野原と云つてゐる。見渡す限り、いちめんの草野原である。この野原を見るには足柄連山のうちの乙女峠、または長尾峠からがいゝ。この野の中に御殿場から印野（いんの）、須山（すやま）、佐野（さの）などいふ小さな部落が散在してゐるが、いづれもその間二里三里四里あまりの草の野を越えて通はねばならぬ。

富士のやゝ西に面した裾野はまたいちめんの灌木林である、そしてその北側はみつちり茂つた密林となつてゐる。いはゆる青木が原の樹海がそれである。

八ヶ岳の甲州地の廣大な裾野を念場が原といふ。一方八里といはれてゐるこの原を越えてゆくと

信州地に入る。そして其處に展開せられた高原を野邊山が原といふ。

野邊山が原から御牧が原を横切つてゆくと淺間の裾野に出る。追分、沓掛、輕井澤あたりの南に面したあたりもいゝが本統に高原らしい荒涼さを持つてゐるのはその裏山にあたる上州地の六里が原である。これはまた打ち渡した芒の原で、二抱へ三抱への楢の木がところ〴〵に立ち枯れになつてゐる。富士の大野原は明るくやはらかく、この六里が原は見るからに手ざはり荒く近づき難い。

阿蘇山の太古の噴火口の跡だつたといふ平原は今は一郡か二郡かに亘つて一大沃野となつてゐる。この中央の一都會宮地町から豐後地へ出ようとして眞直ぐの坦道を行き行くとやがて思ひもかけぬ懸崖の根に行き當る。卽ちこれが昔の噴火口の壁の一部であつたのださうだ。私の通つた時には、その崖には俥すら登る事が出來なかつた。九十九折の急坂を登つて行くと、路に山茶花の花が散つてゐた。息を切らしながら見上ぐると其處に一抱へもありさうなその古木が、今をさかりと淡紅の花をつけてゐたのである。私はいまだにこの山茶花の花を忘れない。そしてその崖を登り切ると其處にはまた眼も及ばない平野がかすかな傾斜を帶びて南面して押し下つてゐたのである。私はこの崖――たしか坂梨と云つたとおもふ――を這ひ登る時に、生れて初めての人間のなつかしさ自然の偉大さを感じたのを覺えてゐる。まだ十七八歳の頃であつた。

芒が刈られ楢が伐られて次第に武藏野の面影は失せて行くとはいへ、まだ〳〵彼の野の持つ獨特の微妙さ面白さは深いものである。彼の野をおもふと、土にまみれた若い男女をおもひ、また榾火の灰をうちかぶつた爺をおもひ婆をおもふ。かとおもふと其處にはハイカラなネクタイも目に見え、思ひ切り踵の高い靴のひゞきも聞えて來る。芒がなびき、楢の葉が冬枯れて風に鳴る。

これらの野原がすべて火山に緣のあるのも私には面白い。武藏野はもと〳〵富士山の灰から出來たのであるさうな。

人は彼の樹木の地に生えてゐる靜けさをよく知つてゐるであらうか。ことに時間を知らず年代を超越した樣な大きな古木の立つてゐる姿の靜けさを。

獨り靜かに立つてゐる姿もいゝ。次ぎから次ぎと押し並んで茂つてゐる森林の靜けさ美しさも私を醉はすものである。

自然界のもろ〳〵の姿をおもふ時、私はおほく常に靜けさを感ずる。なつかしい靜寂を覺ゆる。中で最も親しみ深いそれを感ずるのは樹木を見る時である。また、森林を見、且つおもふ時である。

樹木の持つ靜けさには何やら明るいところがある。柔かさがある。あたゝかさがある。

森となるとやゝ其處に冷い影を落して來る。そして一層その靜けさが深んで來る。森の中でのみは、私は本統に遠慮なく心ゆくばかりに自分の兩眼を見開き、且つ瞑づる事が出來る樣である。山岳を仰ぐ時、溪谷を瞰下す時に同じくそれを覺えないではないけれども。

森をおもふと、かすかに〳〵、もろ〳〵の鳥の聲が私の耳にひゞいて來る。

自分の好むところに執して私はおほく山のことをのみ云ふて來た。

海も嫌ひではない。あの青やかな、大きな海。うねり浪だち、飛沫がとぶ。太洋、入江、海峽、島、岬、そして其處此處の古い港から新しい港。

然し、いまそれに就いて書き始めるといかにも附けたりの樣に聞える虞がある。

庭さきに立つ一本の樹に向つてゐても、春、夏、秋、冬の移り變りの如何ばかり微妙であるかは知り得べき筈である。

況してや其處に田があり畑があり、野あり山あり大海がある。頭の上には常に大きな空がある。

それでゐて人はおほく自然界に於けるこの四季の移り變りのこまかな心持や感覺やを知らずに過して居る樣である。僅かに暑い寒いで、着物のうつりかへで、寧ろ概念的に知り得るのみの樣である。

何といふ不幸なことであらう。

一寸にも足らぬ一本の草が芽を出し、伸び、咲き、稔り、枯れ、やがて朽ちて地上から影を消す。そしてまた暖い春が來ると其處に青やかな生命の芽を見する。いつの間にか一本は二本になり三本になつてゐる。

砂糖の壜に何やら黑いものが動いてゐる。

『オ、、もう蟻が出たか！』

といふあの心持。

私はあれを、骨身の痛むまでに感じながらに一生を送つて行きたいと願つてゐる。それは一面、自然界のもろ〳〵のあらはれが自分の身を通して現はれて來る意にもならうかと思はるゝ。

大正十四年二月十七日印刷
大正十四年二月二十日發行

樹木とその葉

定價 金二圓

著者 若山牧水

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

印刷者 岡崎太吉
東京市芝區田村町十五番地

山本印刷所印刷

發兌 改造社
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
振替東京八四〇二番
電話高輪四九九三番

谷崎潤一郎著　愛すればこそ　上製四六判　定價一圓六十錢　送料十錢

谷崎潤一郎著　愛なき人々　上製四六判　定價二圓　送料十七錢

賀川豐彦著　死線を越えて　上製四六判　定價三圓　送料二十一錢

賀川豐彦著　死線を越えて(中卷)太陽を射るもの　上製四六判　定價二圓八十錢　送料二十一錢

賀川豐彦著　死線を越えて(下卷)壁の聲きく時　上製四六判　定價二圓八十錢　送料二十一錢

厨川白村著　近代の戀愛觀　上製四六判　定價二圓五十錢　送料十錢

厨川白村著　苦悶の象徴　上製四六判　定價一圓八十錢　送料十七錢

倉田百三著　超克　上製四六判　定價二圓二十錢　送料十七錢

菊池寛著　戀愛病患者　上製四六判　定價一圓五十錢　送料十五錢

武者小路實篤著　第三の隱者の運命　上製四六判　定價一圓九十錢　送料十七錢

山本有三著　嬰兒殺し　上製四六判　定價二圓　送料十七錢

吉田絃二郎著　芭蕉　上製四六判　定價一圓八十錢　送料十九錢

芥川龍之介著　沙羅の花　上製四六判　定價二圓八十錢　送料十九錢

吉田絃二郎著　ダビテと子たち　上製四六判　定價一圓八十錢　送料十七錢

吉田絃二郎著　芭蕉　上製四六判　定價一圓六十錢　送料十五錢

正宗白鳥著　戯曲　ある心の影　上製四六判　定價一圓六十錢　送料十五錢

ジョルジュ、サンド著　田沼利男譯　鬼火の踊り　上製四六判　定價一圓八十錢　送料十七錢

野上彌生著　海神丸　上製四六判　定價一圓三十錢　送料十九錢

柳原燁子著　則天武后　上製四六判　定價一圓六十錢　送料十五錢

細田民樹著　或兵卒の記錄　上製四六判　定價二圓五十錢　送料十七錢

イバニエス原作　鈴木厚譯　血と砂　上製四六判　定價二圓六十錢　送料十九錢

佐藤春夫著　ピノチオ　上製四六判　定價一圓八十錢　送料十七錢

近松秋江著　二人の獨り者　上製四六判　定價一圓八十錢　送料十九錢

犬養健著　一つの時代　上製四六判　定價二圓五十錢　送料十七錢

北村壽夫著　幻の部屋　上製四六判　定價一圓六十錢　送料十五錢

文壇三十一名家著　ゆかり　菊判特製六罔判上製三圓五十錢(送料)圓(十二錢)

帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	菊半截判上製	定價一圓九十錢	送料十五錢
帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	四六判上製	定價二圓二十錢	送料十七錢
吉江喬松著	近代文明と藝術	四六判上製	定價二圓	送料十七錢
野口米次郎著	先驅者の言葉	四六判上製	定價一圓六十錢	送料十三錢
文學博士 新村出著	南蠻更紗	四六判上製	定價二圓五十錢	送料十九錢
埃及人ビシャラ、ナハス著 高瀨毅譯	ツタンカーメンの生涯と時代	四六判上製	定價一圓六十錢	送料十三錢
泉鏡花著	番町夜講	四六判上製	定價二圓	送料十七錢
長谷川如是閑著	改造社隨筆叢書第一篇 犬猫人間	四六判並製	定價一圓八十錢	送料十三錢
堺利彥著	改造社隨筆叢書第二篇 野外劇の一幕	四六判並製	定價一圓五十錢	送料十三錢
中澤臨川著	改造社隨筆叢書第三篇 嵐の前	四六判並製	定價一圓四十錢	送料十三錢
高濱虛子著	改造社隨筆叢書第四篇 朝の庭	四六判並製	定價一圓七十錢	送料十三錢
武者小路實篤著	改造社隨筆叢書第五篇 筆の向くまゝ	四六判並製	定價一圓十錢	送料十三錢
河東碧梧桐著	改造社隨筆叢書第六篇 二重生活	四六判並製	定價一圓二十錢	送料十三錢

Fuzambō
TOKYO